

【完結】私、巨人の母に  
なりました！

ネームレス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

真面目なあらすじ

気が付いたら無尽の荒野に居た現役女子高生の自称美少女。

世紀末な男達に追い立てられて逃げ込んだ洞窟の先で、彼女は一体の巨人と出会う。そして知らされる事になる巨人に秘められた壮絶な過去。

全く知らない世界で、彼女の世界の運命を懸けた子育てが始まる。

真面目じゃないあらすじ。

でつかい体の赤ちゃん、現役JKによしよしされる所見たくない？ 私は見たい。

これはそんな内容が含まれるお話です。

# 目次

第一話『凄く大きい!』	1
第二話『お前がママになるんだよ!』	11
第三話『頑張っておつきして!』	19
第四話『こんなの太すぎる!』	27
第五話『ご立派ですね!』	36
第六話『乱暴にしないで!』	43
第七話『もう好きにして!』	52
第八話『こんなの初めて!』	60
第九話『激し過ぎるよこんなの!』	71
第十話『そんなに入らない!』	78
第十一話『奥まで来てる!』	86
第十二話『精が出ますね!』	94
第十三話『モサモサしてる!』	102
第十四話『すっごい長い!』	111
第十五話『来ちゃった!』	120
第十六話『気持ちいい!』	129
第十七話『濡れちゃう!』	137
第十八話『とんがってる!』	146
第十九話『透けて見える!』	154
第二十話『恥ずかしい!』	163
第二十一話『ピクピクしてる!』	171

第二十二話 『弄り回したい!』	179
第二十三話 『意外に固い!』	188
第二十四話 『溢れて来る!』	197
第二十五話 『変な味!』	205
第二十六話 『ブルブルしてる!』	212
第二十七話 『いやらしい!』	220
第二十八話 『優しくして!』	226
第二十九話 『もう一回したい!』	234
第三十話 『責任とって!』	241

## 第一話『凄く大きい!』

拜啓、お父様お母様。そちらはそろそろ秋が去り、冬の訪れを感じさせる寒さが強くなる頃合いですがいかがお過ごしですか？ 私は今――

「ヒヤツハー！ 待ちやがれえー！」

「いい加減に止まりやがれえ！ 聞こえねえのか、ああーん!？」

「ヒヤツハー！ ヒヤツハー！ ヒヤツハツハツー!!」×おおせい

照り付ける太陽の下で、地平線まで続く無尽の荒野を全力疾走しています。世紀末的な格好をした、無数の男達に追われながら。

つて言うか棘付きの肩パッドにモヒカン頭つて、どんだけテンプレートな悪党なんだ。こいつ等は間違いなく私の事を捕まえて、色々やらかした後に売り飛ばすつもりに違いない。

オーキードーキー。どうしてこうなったか少しだけ考えてみよう。

私こと今全力で走り続けているこの可憐な美少女様は、確か高校の帰り道をスマホを見ながら歩いていたはずだ。それがふと気が付いたら見知らぬ荒野のど真ん中。更には、あれよあれよと言う間に変な外見の連中に迫られる始末。

うむ、何が何だか全く分からない。誰か説明してくれよ！ もちろんそんな誰かは居やしない。

これはアレか、巷で流行りの異世界転生とか、異世界転移とか言う物なのだろうか。だとしたらずいぶんとハードルが高いのではないだろうか。こういうのは、大体読み飛ばされる様な神様何某とのくだらないやり取りや、その世界の住人が聞いたら噴飯モノのチートやら特典やらを貰えるものでは無いのだろうか。

今の私には、もちろんそんな物はありません。あつたら全力で走る必要なども無く、こんな漫画に出て来る様なやられキャラみたいな連中は指先一つでダウンさせられているはずだ。

嘘ですごめんなさい。こんな怖そうな人達と戦いたくなんてありません。一介の高校生に、いきなりすごい力を与えたって、ベテランの戦士みたいに振る舞えるわけないじゃないですか。

だけでも誰も助けちゃくれない。だから私は走るんだ。行くぜべいびー、無限の荒野にさあ行くぞ。

「あの嬢ちゃん、スゲー足速いな！ ぜんぜん追い付けねえよヒヤッハー！」

「ヒヤッハー！ 泣き事言つてないでさつきと追うんだよ！」

ああ、後ろでなんか言ってるみたいだが、そんな事を気にしている余裕はない。何処

かに逃げ込める場所を見つげなくては。どこかに……。

っ!? 見つけた! 洞窟がある、あそこに逃げ込めれば!

「兄貴ー! あの嬢ちゃん例の洞窟に入っちゃいましたぜー!」

「ちっ! まあいい、あそこは袋小路だ! 追い詰めてとっ捕まえるぞー!」

「ヒヤッハー!」×いっぱい

今捕まえるって言った。確実に言った。絶対に捕まるわけにはいかない。私の純潔は、筋骨隆々な鼻筋通ったイケメンダンディに捧げると決めているのだから。最初から団体競技とかノーサンキューだ。

最初は岩肌が露出していた洞窟の中は、外からの光が届かなくなると少しずつ人工の床や壁が見え始めて来る。それに合わせて通路を塞ぐ放置してある資材が増え、ぶつからない様に避けながら進まなくてはならない。どうやら、この洞窟は荒野の真ん中だと言うのに、何かを掘り出していた炭鉱の様なものなのかもしれない。

落ちているツルハシなんかを武器にするかとも考えたが、あの人数相手に大立ち回りなど論外だ。何処かに隠れてやり過ぎさなければ。いい加減走り過ぎて、喉の奥が血の味になって来て辛い。

何とか追っ手を引き離して走り続けるうちに、不意に広い空間に出てしまう。ドームの様な天井の高い一室で、ひび割れた天井から木漏れ日が落ちて室内を薄明るくしてい

る。しかも他に通路の様なものは無く、ここで終点行き止まり。右を見ても左を見ても何もなく、ただ正面には何か巨大な小山の様なものが天井近くまでそびえていた。

隠れる為に入つて来たのに、自ら袋小路に入り込むなんてなんと言う失態か。自分で自分を殴りたい。そんな暇も無く、背後から大量の男達が追いついてきてしまった。

「いたいたあ、やつぱりここに居ましたぜえ!」

「ヒヤツハー! 良くやつたあ! さあ、嬢ちゃん大人しくしなあ!」

「ここは一般人立ち入り禁止だぜえ! 俺達が安全な所まで連れてつてやるよお!」

なんと言う白々しい言葉の数々か。どうせ私を捕まえた後、ひん剥いたり何だりするくせに。悔しさと怖さで勝手に涙があふれて来る。恐怖心に思わず後退り、部屋の中央の小山に背中を預けてしまう。

畜生こんなの嫌だ。『誰か、誰でも良いから誰か助けてよ!!』そう叫んだところで、何も応える者は居ない。ただ、虚しく声が洞窟内に響くだけだ。

「おいおい、なんか勘違いしてるみてーだが俺達は——」

「お、おいおい兄貴! なんかアレ動いてねーか!」

唐突に、本当に唐突に、私の背後で何かが動き始める音がした。ざわついている男達と一緒に、本当に背後を振り返ってみれば、小山だと思つていた物がその『片腕』を振り上げている所が見えた。



違う、あれは小山なんかじゃない。『両腕』もある、そして『顔』もある。下半身は土に埋まっているが『両足』もあるのだろう。あれは――

「やべえ！ 総員退避ーっつっ!!」

「ヒヤッハー！ 逃げろー!!」×たくさん

あれは巨人だ。フルプレートの西洋甲冑の様な似姿の、雄々しく聳える人の像。その材質が金属なのか粘土なのか、はたまた生きているのか無機物なのかすらわからない。ただ一つ分かる事は、この存在は私を助けているという事だ。

巨人が無造作に腕を振り下ろして、私に迫っていたモヒカン達を蹴散らす。幸いと言うか、運が良いと言うべきか、直撃はしておらず惨状は広がっては居ない。トマト祭りみたいな光景なんて見たくも無いから、その方が断然ありがたい。うっ、想像しただけで吐き気がしてきた。

「くそ、まさか本当に動き出すとは！ このままじゃまた荒野が広がっちゃう！ さつさとずらかるぞ、おめえら!!」

「ヒヤッハー！」×ぼうだい

一人だけ鉄仮面を付けたリーダー格の男がひと声あげて、モヒカン達は足並みをそろえて部屋の出口からぞろぞろと逃げ出して行く。何だかわからんが、とにかく良しだ。これでR指定な展開からは、おさらば出来た筈だ。

次に片付けるべき問題は、やはり今も絶賛腕を振り回すこの巨人の事だろう。このままでは日の光の漏れる天井どころか、この洞窟自体が壊れてしまうのではないだろうか。そう思ってしまうと、一気に恐怖心が加速する。

『もういい、もうやめて! このままじゃ天井が崩れちゃう!』なんて叫んでしまった。この巨人相手に、言葉が通じるかどうかも分からないと言うのに。

……止まった。巨人はまるで、私の言葉に従うかのように動きをピタリと止めた。

え、ちよつと待つて。この巨人、言葉が通じるの? と言うより、私の言う事を聞いてくれているの? これは……、確認しなければならぬ。

恐る恐る、動きを止めた巨人の顔を見上げる。大きい……、凄く大きい! 私の何倍ぐらいあるのだろうか、掌なんて私が乗れそうなほどの大きさだ。

視線を上に向ければ、牡牛の様な角のある兜を被った敵つく角張ったご尊顔。きちんと両目と口も備えられた人と同じ様な顔なのに、その質感は無機質で強烈な威圧感を放っている。

アニメとかで見るロボットみたいだ。ファンタジーだと、ゴレムって言うんだっけ。今私がいる場所がどんな所なのかもわからないけど、こんなのが沢山いる世界なのだろうか。

巨人の力ある視線が、私の事をじつと見降ろしていた。その迫力に、思わずごくりと

唾を飲み込む。でも、怖気付いてばかりではられない。

とりあえずは『えっと……、私の言葉が分かる？ 分かるなら、ゆっくり片手を上げてみて？』と、緊張で声を震わせながら語り掛ける。私の言葉を聞いた巨人は、私の事を見つめたままでのっそりと右の手を上げた。

やっぱり、この巨人は私の言葉を理解している。しかも、理由は分からないけど、私の言う事を聞いてくれるのだ。

自分よりも巨大な存在が、力ある存在が私の言う通りに動く。これはなんと言うか、思わず顔がにやけて来ちまう状況じゃあないですか？ さっきまでちっぽけだった私、大勢の男達を蹴散らす巨人を意のままに操れる。しかも自分自身で戦ったりして、怖い思いはしなくていいと来た。これはもう、する事は一つじゃないかな。

「……まるで、『この力で世界を征服するしかない』とでも言いたげな顔だな」

っ!? また背後から——この部屋の出入り口から、人の声が投げかけられて私はビクンと跳ねあがった。そして考えていた事を言い当てられたのも合わさって、私の緊張は一気に高まり動揺してしまふ。

再び巨人に背を預けながら振り返って、声の主を確かめるべく視線を彷徨わせる。目当ての人物は直ぐに見つかった。

「考古学者として忠告しておくが、その巨神を悪用するのはお勧めしない。その巨神を

欲望のままに扱った者の末路がろくでもないと言う事は、まさに歴史が証明しているのだからな」

新たに表れた人が何か言っているが、私はそれどころではない。

人？ 確かに人型をしてはいるが、その人物の顔は、顔が……、人間ではない。あれは、どう見ても、トカゲだ！

「失敬な事を。ワシは確かに人間ではないが、トカゲなどと一緒にはしないでもらおうか。この頭の立派な二本角を見て欲しい。これこそ、竜の末裔たるドラゴニユートの証である」

どうやら、思っていた事が口から漏れていたらしい。トカゲでもドラゴンでも爬虫類に変わりはないかもしれないが、確かに人と猿を同一視するような侮辱にはなるかもしれない。私は素直に、ごめんなさいと謝った。

「ふむ、分かってくれればよい。そして、少女よ。幾許か、ワシの話を聞いてもらえまいか？」

しかし、そんな竜人が私に何の用なのか。もしや、先程の男達の仲間なのだろうか。だとしたら、この巨人の力を借りなくては！

巨人に『あの人が何かして来たら、私を守って』とお願ひして、もう一度腕を振り上げて貰う。戦いとかは怖いけど、自分が酷い目に遭うくらいなら……。

「……やめておけ。今この場でその巨神の力を振るえば死人が出るぞ」

目の前の竜人は余裕綽々と言った表情で口元を歪め、ゆっくりと両腕を上げる。あの竜人はこの巨人よりも強いとでも言うのだろうか。私の全身が思わずぶるりと震えあがった。

「無論、このワシだ」

「アンタかよ！ どっかで見たよこのギャグ！ パクリだよ！」

どうやら両手を上げたのは降参の意志表示らしい。どっと疲労が込み上げて力が抜けた私は、『近づかないでその場で話をしてくれるなら、話を聞いても良いです』と竜人に伝える。

「うむ、良い妥協点であるな。ああ、両手は下ろさせてもらうぞ。疲れてしまうからな」  
なんと言うか、凄くマイペースな竜人さんだ。この人の性格なのか、それとも種族的な物かは分からないが。最初は怖かったが、さっきのやり取りでなんとなく毒気を抜かれてしまった。それだけは、ちよつとありがたい。

私は、この時に漸くこの世界について詳しく知る事が出来た。私がなぜこの世界に来たのか。そして、何をしなければならぬのか。

この異世界での私の物語、その最初の一步はこうしてはじまりを迎えたのだ。

次回、第二話『お前がママになるんだよ!』に続く。

## 第二話 『お前がママになるんだよ!』

前回のあらすじ。

気が付いたら荒野の真ん中だった。なんかモヒカン軍団が居たのでとりあえず逃げたら追いかけられる。逃げ込んだ洞窟の中で巨人を見つけたら、何か知らないが言う事を聞いてくれるらしくて助けてもらった。危機が去ったと思ったら、考古学者を自称するトカゲ人間に出会う。どうやらそのトカゲ人間は話がしたいらしい。

話をすると言っていた目の前のトカゲ人間——いや、竜人か。その彼は立ちつばなしだと疲れると言つて、手ごろな岩に腰かけた。先程、部屋の中の巨人が暴れた時に、天井から落ちて来た破片が何かだろう。こちらは緊張し通しなのに、余裕たっぷりな行動が実に妬ましい。

「さて、単刀直入に言わせてもらおう。少女よ、君はこの世界の住人ではないな?」

ズバリと言い当てられて、ドキッと心臓が跳ね上がった。なんでこの竜人は、私が異世界から来たと見抜いている? 確かにトカゲ頭で人語を喋る存在がいる様な世界に居た経験はないが、私自身は此処が本当に異世界なのかも把握していないと言うのに。

「うむ、その顔。その汗。その驚愕。実に雄弁に語るモノよ。どうやらワシが調べてきた歴史は、お伽噺の類では無いらしいな」

私の焦りの表情から、自信の推測が的中したと確信した竜人は口蓋を見せて笑う。うわ、牙が並んで舌が生々しい。作り物では無く、確かに生きているという事が良く分かる。夢に見そうだ。

「その巨神は、この世界の者にとっては、調べる事も分解する事も出来なかつた無用な長物でな。だがその価値は、お前さんの様な異世界からの来訪者によつて一変するのだよ」

喜びに目を細める竜人は、背負っていた大きなリユックを地面に下ろし、その中をこそごとと漁つて一冊の本を取り出す。ページの間に沢山の付箋が付けられたそれは、彼が言うにはこの辺りにある伝承を纏めた研究ノートらしい。正確には、滅び去つたこの地の周囲に辛うじて伝わる伝承だが、と訂正して、竜人は話し始めた。

「先にも言った通り、ワシは考古学者を生業としておる。そして、各地の遺跡を旅をしながら調べて回り、その地にある古代の歴史を紐解き研究する事が生き甲斐だ」

竜人は少しだけ自慢げな顔をして、分厚いハードカバーの本の表紙を優しく撫でていく。本当に、自分の集めてきた歴史に誇りを持っているのだろう。その貌は不気味さを感じるトカゲ面だと言うのに、とても穏やかで優しい目をしていった。何だか子供っぽ



く見えて、ちよつとだけ受ける印象が変わる。

「この地の周囲に伝わる伝承と、各地の遺跡に残っていた古代語の資料を基に、ワシはこの地には強力な力を持った巨神が居ると確信した。そして見つけたのは、既に研究され尽くしたその巨神と、この遺跡であつたのだ」

少し前まで自慢げにしていた竜人は、今度は凄く不貞腐れた様な顔を始める。分からないでもない。一番最初に見つけたと思つたのに、既に自分以外の誰かが見つけていたと知れば落胆するモノだろう。だが、やはり見かけによらず子供っぽい様だ。

「この遺跡に残された資料によれば、この巨人は数千年周期で世の権力者にその存在を知られ発掘されているらしい。ワシが見つけた資料にも、既に見つけ出された後だと研究者の愚痴が乗っていた。無論、問題はそこではない」

拗ねていたトカゲがまた嬉し気に口元を歪める。分かる。あの顔は自分の知っている事を、誰かに披露して自慢したいと言う時の顔だ。よく見ると、彼の背中で恐竜の尻尾みたいのがピコピコ揺れている。可愛い。

漫画やネットで仕入れた知識を友達に語る時の私も、きつとあんな顔をしていたに違いない。今度から気を付けよう。

「この巨神は、数千年前に発見された時も、今と似た様な状態で地面に埋まっていたらしい。それを掘り起こして自分達で使えないかと手を尽くしたが、時の権力者達はまった

く成功しなかったのだそうさ。だが、ある時その流れが一変した。そう、異世界からの協力者が現れたのだ!」

竜人の語り口が熱くなつて行く。興が乗つて饒舌になつてきているのだろうか、何だか私もボイスドラマを聞いてるみたいで続きが気になつてきてしまった。彼の興奮具合に引き込まれている様だ。

「異世界より現れた奇妙な衣をまといし者が、巨神と心を通わせ操り人となる。どうも、この巨神は操り人以外の言う事を聞かずに、操り人は口頭で命令を下していた様だ。ちようど今のお前さんと同じ様にな」

操り人と聞いて操縦席でもあるのかなと思つたが、どうやらこの巨人は音声入力方式らしい。ちよつと残念なような、それはそれで浪漫がある様な。複雑な気持ちが湧いて来る。

「そして、時の権力者はその異邦人を説得し、巨神の力を使い周囲の国々を侵略して行つた。異邦人は使いきれぬほどの富を、権力者は周囲の国を併合し巨大な大帝國を築き上げた。正に、巨神の力は剛力無双! 向かう所敵は無く、全てを壊し全てを殺し、その力を世界の隅々にまで示したのだ!」

警戒していた事も忘れて、私はついつい前のめりになつてその話に聞き入つていた。彼の話が本当の事ならば、そんなすごい巨人の操り手に私が選ばれたと言う事ではない

だろうか。興奮に思わず頬が熱くなり、走って乱れていた長い髪がうつとおしくなつて乱暴に背中に払つてしまう。こんな事なら面倒臭がつて長く伸ばさずに、短くしていればよかつたと後悔してしまつた。

「ところが、だ。今の時代にそんな大帝國は存在しない。そして、かつての大帝國があつた場所には、地平線の向こうまで何処までも広がる無尽の荒野が在るのだ。そう、此処だ。此処こそがかつて巨神の力で栄え、巨神の力で滅びたその地なのだ」

興奮が、一気に冷めた。このトカゲは今なんと言つただろうか。滅びた？ この巨人がなんで、操り人が住んでいる國を滅ぼす必要があるのだろうか。理由が全く分からなしいし、今まで背中を預けていた巨人が凄く恐ろしい物に感じられてしまう。思わず振り向いて後退る私を、巨人がその力強い視線で見降ろしていた。

「國が栄えて肥え太り、操り人も贅の限りを尽くして暮らしていたある日。巨神は唐突に操り人の言う事を聞かなくなつた。そして、操り人にだけ分かる言葉で、巨神は言つたそうだ。『もう十分、私はあなたから学ぶ事が出来た。巢立ちの時だ』そう言つて、巨神は勝手に動き始め、あつと言う間に世界を滅ぼしてしまつた。そして最後に残つた大帝國も、例外なく一切合切を滅ぼしきつてしまつたそうだ」

なんだそれは……。なんなんだそれは!! 私はいつたい、なんて物に呼び出されたんだ!? 混乱と恐怖でガクガクと全身が震えて、思わずその場に蹲つてしまう。

竜人は、そんな私に構わずに話を続ける。その声色は力強くて、恐怖心に縛られた私にも浸透するように伝わった。

「このデカいのが何を考えて世界を滅ぼしたのかは分からん。資料にはそこまでは書かれていなかったからな。だが、数千年前も今と同じ様に眠っていたという事は、このデカ物は同じ事を何度も繰り返しているのだろう。学び、育ち、滅ぼし、眠る。つまりは、世界を何度もリセットしていると言う事だろう」

リセット……。何のために？ 意味が分からない。わけわかんない！

いや、それよりもこんな奴からは直ぐ離れなければ。こんな恐ろしい存在の傍に居たら、私も何時か昔の操り人みたいに滅ぼされちゃう。私は這う様にして、少しずつ巨人から離れて行く。

「まあ待て。話はまだ終わってはおらぬ。それに、逃げた先で小娘一人でどう生きて行くつもりだ？ 少しは冷静にならんか」

っ!? そうだ、ここは私の知っている世界じゃないんだ。竜人の言葉で、私の頭から今度は血の気が引いた。モヒカン頭や竜人がいる様なファンタジー世界で、『スマホしかもってねえ!』状態の女子高生一人で何ができると言うのだろうか。逃げる為とは言え、カバンを投げ捨ててしまったのが悔やまれる。

そう考えたら腰が抜けてしまった。動く事も出来ない私を放って、竜人は勝手に話を

続ける。

「記録が正しいのであれば、このデカ物は操り人から学んだと言うておる。つまり、こやつが世界を滅ぼしたのは、操り人——否、親の教育が悪かったから。そうは思えぬか？」  
教育が悪かった？ なにか？ 親が欲望のままに振る舞つて巨人を暴れさせたから、それを見て育つた巨人は世界を欲望のままに壊して回つたと？ 『世界が何度も滅んだのは、育児失敗が原因だと言うのかこのトカゲは?!』

「トカゲではない、ドラゴニュートだ。ふん、少しは元気が出てきたようだな。そうだが、今世の操り人の少女よ。お前さんには、こやつを世界を滅ぼさない良い子に育ててもらわねばならぬのだ。ワシが気ままに遺跡探索をして生きて行くためにもな！」

お前がママになるんだよ！ ってか!? ふざけんなよ！ 何で私がそんな事を、なんで私が!?

ああ、駄目だもう、目の前が歪む。動けない体で必死に振り向いて、睨みつけているはずのトカゲの姿が滲んで行く。

感情に火が付いた私は泣き喚いた。そりやあもうわんわん泣いた。

いきなり変な奴らに追いかけて回され、日常から切り離された異世界に連れて来られて。拳句の果てには世界を滅ぼす存在を育てるだつて。そんな理不尽な事言われたら誰だつて泣くよ。私が現に泣いている。

泣き崩れて、それでも悔しくて地面を両手でガンガン叩く私の傍に、竜人が近づいてきて屈み込んだ。大きな掌で、痲癩を起して地面を叩く私の両手をやんわりと押さえてくる。

『やめろよ! 私を泣かせたのはお前なんだぞ!』って、多分そう言ったんだと思うけど、自分でもちゃんと発音できてたかどうかは分からない。

それから、上体を抱き起してくれた竜人の胸を精一杯私は叩いた。叩いて、叩いて、そして泣き喚く。

そうしていたら、今度は両手でそっと抱きしめられて、乱れていた髪を撫でられた。背中もぼんぼんつてされて、子供みたいにあやされる。

それが馬鹿にされてるみたいで悔しくて、でも優しくされるのが嬉しくて、私はもつと泣いた。むしろ色々擦り付けて汚してやったわ。トカゲくせえ癖に、生意気なことしやがって。ちくしょう。

結局私が落ち着くまで、竜人の腕の中で長い事泣いてしまうのだった。

次回、第三話『頑張っておつきして!』に続く

### 第三話 『頑張っておつきして！』

前回のあらすじ。

トカゲ人間の話を聞いたなら、異世界転移していた事実を確認できた。巨人はどうやら大昔に世界を滅ぼしたらしい。そんな奴の傍に居たくないから逃げようとしたら、世界を滅ぼさない様に教育しないと酷い事になると言われた。色んなことがあったので感情が爆発して泣き喚いてしまう。トカゲに慰められて凄く悔しかったです。

いっぱい泣いたからスッキリしたので、今後の事を相談する事にした。

とりあえず制服のブレザーのポケットに入れておいたハンカチで顔を拭いて、ついでだから色々つけてしまった童人の服も軽く拭いてやる。小娘が余計な気を遣うなど言われたが、ムカついたので徹底的に拭いてやった。ざまあ。

「まったく……。では念の為に尋ねるが、お前さんは子を産んだ経験はあるか？」

有る訳ねえだろうがポケエ！ 何いきなりセクハラかましてんだこのトカゲ頭!!

こちらら、取れたて新鮮の女子高生様ですぞ!!

「トカゲじゃないドラゴニュートだ。まあ、お前さん垢抜けておらんから、おぼこなのは

想定通りよな」

中々言ってくれるなトカゲ野郎。どうせ彼氏いない歴〃年齢ですよ。つーか、それもセクハラだろ!

それは兎も角として、なぜ竜人がそんな事を言ってきたのかは分からんでもない。要は子育ての経験はあるのかと問いたいのだろう。無論、そんな物は無い。一人っ子だし、親戚の赤ちゃんとかも全く居なかつたし。雑誌とかも、サブカル系ばかり読んだしなあ……。

「あまりにも想定通りだが、そうなると今からの子育ては苦勞しそうなのう」

言ってくれるな。自分でも女子としてどうなのかと、思わんでもないのだから。

と言うか、竜人も世界の平和を懸けた子育てに付き合ってくれるのだろうか? 事情の説明をしてくれた事と言い、ずいぶんと協力的ではないか。やっぱり何だか怪しい。実は巨人の力を狙っているとか……。

「ふむ、心中の思いが実によく顔に現れるな。そんな顔をしなくとも、ワシは世界征服などに興味は無いわい。こんな資料を発掘してしまった上に、本当に巨神を操れる人物を見つけてしまったのだ。放っておいて世界が滅びましたなどとなつたら、後悔しても足りないであろう」

………確かに。この世界の事も知らない、帰る場所も無い私がこの巨人と二人きり



になったら、先程聞いたお伽噺みたいに何処かの大きな国に自分の力を売り込むかもしれない。と言うか、間違ひなくヒヤッハーとか言いながら巨人の肩に乗って、この世界を力任せに練り歩いていただろう。

きつと、そんな先に待ち受けているのは、お伽噺と同じ様な終わり……。そんなのは嫌だ。少なくとも、碌な終わり方にならないのは目に見えている。

「さて、それではまず方針を決めねばならん。最終目標はこの「デカいのが大暴れするのを阻止する事だとして、とりあえず今日明日どう行動するかの小目標を決めねばならん」

ああ、それについては現状全くのノープランだ。確かに話し合いは重要だろう。しかも私はこの世界の常識も情報もなにも持ち合わせていない。目の前の竜人は貴重な情報源であり、今の私が唯一頼りに出来る他人である。是非ともここで話を詰めねばなるまい。

そんな訳で、私は竜人からこの世界のことを幾許か聞いた。一度巨人にリセットされた世界は、再び長い年月を掛けて新たな文明を少しずつ発展させているらしい。

そこに住まう物は多種多様。普通の人間——ヒューマンはもちろんの事、漫画でおなじみの亜人なんかも沢山いて、それぞれの国を作って貿易やら小競り合いをしているのだとか。

そして、一番の特徴は世界中に点在する旧世代の遺跡だ。世界が滅び、人々が居なくなったとしても、その痕跡は大地に残り続けた。新たに発生した文明人たちは、旧世代の遺産を発掘して改修し、自らの生活に役立てて暮らしているらしい。そのせいで、人の生活基盤もかなりちぐはぐな事になっており。電気の無い生活をしている村もあれば、当たり前のように電気製品を使う大都市までピンキリなのだそうだ。

何だろこの中途半端に都合の良さそうな世界は。こういうのが異世界の流行なのか。まあ、ファンタジー世界にあまり深いツツコミを入れても仕方がないか。

そう思った私は、椅子代わりにしていた巨人の掌から立ち上がった。相談する為に落ち着ける場所を探していたら、巨人の姿が目に入ってなんとなく掌を貸すように命じてみたのだ。ちよつと固いけど指の一本ずつが太くて座るにはちよつどいい高さだった。

ちなみに、竜人も羨ましそうに見ていたので、私の隣に座る様に促したら尻尾を振って喜んでた。やつぱり中身は子供だ。喋り方は凄いや臭いの。

とりま、小目標としては、とにかく巨人をこの場から動かそうと言う事になった。荒野のど真ん中にぽっかり空いた洞窟の先にあるこの遺跡は、今でも廃品を漁る為にサルベイジャーと言う遺跡荒らしがそれなりにやって来るらしい。私の事を追いかけて来た鉄仮面とモヒカン達も、竜人曰くサルベイジャーなのではないかと言う事だ。

そのサルベイジャーに動く巨人を見られたのなら、瞬く間に巨人の話は近隣に伝わ

るだろう。なので、この場に留まり続けるのは悪手であると私達は結論付けた。

しかしまあ、この馬鹿デカいのを手作業で掘り起こしていたら、いったい何日かかるか分かりはしない。なのでとりあえず、自力で脱出出来ないかと巨人に命じて見る事にした。

私の言葉を聞いた巨人は一度、その目力あふれる視線を己の下腹部に向ける。そして、今初めて自分が土に埋まっているのを認識した様子で、恐る恐るその巨大な手で地面に触れて土を掻く。野太い指が固いはずの土を易々と掬い上げ、私はその様子に凄いと歓声を上げた。

すると、土を掬っては離れた所に捨てるという動作を、巨人は何度も何度も繰り返し始める。もしかして、誉められたのでやる気が出たのだろうか。でっかい図体の癖に、こいつも可愛い所があるな。

暫く掘り進むと、巨人の両膝が見える様になってきた。そこまで来ればもう後は、掘るよりも引っこ抜いた方が早いだろうと竜人が言う。私もそれに頷いて、巨人に穴から這い出て来る様に命じる。

念の為にと竜人が私を連れて部屋の入り口付近まで下がる。巨人の視線が私を追いかけて、そして両腕を地面に突いて身体を揺り動かした。巨大な体を強引に土の中から引き抜いて、力を込めながら少しずつ穴の中から下半身を引き摺り上げて行く。

その様子を見ていた私は、知らず両手を広げて巨人に語り掛けていた。頑張つて。もう少しだから。頑張つておっきして！まるで幼子に語り掛ける様に、私は自然と巨人を応援していたのだ。

その声に導かれる様に、巨人は穴から足を一步踏み出して、そして！盛大にすつころんだ。私は今までの人生で、一番大きな音と振動に襲われる事になった。

「……………、離れていなければ仲良くべしやんこであったな」

竜人がボソリと呟いて、振動で倒れそうな私を支えてくれる。うん、凄い感謝してる。感謝してるけど、支えるなら襟首掴むんじゃないかと、肩とか腰を抱くとかもつとあるだろう。このトカゲめ。

竜人の脇腹に肘を入れてから、顔から転んでしまった巨人に視線を向ける。巨人は、痛そうにはしていないけれど、何処か泣きそうな視線をこちらに向けてきている様な気がした。その姿が凄く可哀想に見えて、駆け寄つて今すぐ大丈夫かって甘やかしたい衝動に駆られる。

それをぐつと我慢して、私は両手を差し伸べて言うのだ。『頑張つて、ここまでおいで』って。

言葉を聞いた巨人は、倒れたままの状態から腕の力で上体を起こす。そして両膝を地面に突いて、まるで獣の様に這いつくばった。そのままズリズリと四肢を動かして、こ

ちらに向かつて這い進んで来る。その姿は無様だったが、私の胸には込み上げて来る物があつた。

私の所まで手が届く距離まで来ると、巨人は私に向かつて指の先を差し向けて来る。私はその指先を抱きかかえる様にして、『良くやったね、偉かつたね』つて誉めてあげた。それから時間を掛けて、巨人を励ましながら立ち上がる練習をした。ハイハイでくるつて事は、両足が全く動かないつて訳じやない筈だし。竜人はきつと何千年も眠つてる間に、立ち上がり方を忘れたんだらうつて言つてた。だつたら、出来るようになるまで根気よく付き合つてあげればいい。

何度も立ち上がるうとしては転ぶ。転んで、それでも両手を突いて諦めずに立ち上がるうとする。角張つたその表情は変わつていないけど、私には泣くのを我慢している様に見えた。諦めて欲しくない。

それから、どれぐらい時間が経つたか。壁に手を付いてぶるぶると震えながら、それでも巨人は部屋の中でようやく立ち上がれるようになった。もちろん私は凄く嬉しくなつて、思わず巨人の足に抱き付きに行つてしまふ。制服も顔も土で汚れてしまつたけど、そんなの気にならないぐらいに立ち上がつてくれたのが嬉しかったのだ。

うん、決めた。私はこの子の母親にならう。

私はまだこの子が怖くて、この世界に連れて来られたのは理不尽だと思つていけるけれ

ど。それでも、こんなに一生懸命にすり寄って来る子を、何時か世界を滅ぼす様な存在にはしたくない。だから、今日から始めよう。少しずつでも、一緒に育っていけるように。

私、巨人の母になりました!

次回、第四話『太すぎるでしょ!』に続く。

## 第四話 『こんな太すぎる！』

前回のあらすじ。

トカゲさんと今後の事について話し合った。大目標は世界のリセットの阻止として、とりあえずの小目標としては遺跡からの移動をする事に。その為に巨人に自分自身を掘り起こさせたが、何と巨人は立ち上がる事が出来なかった。何度も繰り返し立ち上がる訓練をして、いっぱい応援して立ち上がれるようになる。

私は改めて、巨人の母になる決意を固めた。

立ち上がる事が出来たのは良い事だ。問題は巨人が出入り口より大きくて、部屋の中から出る方法が無いと言う事だけだろう。どうやって中に入ったんだよこいつは。

暫し熟考した後、竜人と私は天井を破壊して外に出ようと意見をすり合わせた。もともと木漏れ日が落ちる程度には崩壊しかけている天井だ。巨人が手を伸ばして軽く押し上げただけで、ごそつと天井が剥がれて上から大量の土砂が落ちて来る。それをもろに浴びた巨人は暫し呆然としていたが、砂浴びが楽しかったのか剥がした天井を投げ捨てて次の天井を剥がしに掛った。

適当に引き剥がしても良いが、なるべく残骸は足場になる様に積み上げて欲しい。その様に伝えると、天井の残骸を持ったままおろおろし始める。どうやら、もつと細かく指示をしないと自己判断が出来ないようだ。

どんな風に積み上げればいいんだろう。私にだってそんなのは分からない。と言う訳で隣に立っている竜人の方をじーっと見つめてみる。

「天井の残骸を壁に立てかけて、スロープのように使えばいいのではないか?」

なるほど、良く言ったトカゲ。伊達に偉そうな口調な訳では無いらしいな。そう素直に称賛したら、毎度の様に『トカゲじゃないドラゴニユートだ』と返された。お約束な奴め。

それからは竜人のアドバイスを元に瓦礫を積み上げさせ、大きな天板を立てかけゆるい傾斜を作らせる。天井を殆ど引き剥がす事になったが、何とか這いあがれそうな位の道を作る事に成功した。真上から巨人がじっと見つめて来るので、私は手を差し伸ばしながら偉い偉いと誉めてやる。誉めて伸ばすのは大事な事なのだ。

天蓋の無くなった部屋から空を見上げれば、既に空には星々が見え始めている。立ち上がる練習に時間を取られた為に、周囲はとつくに夕闇に染まっていた。異世界にも夕暮れはあるんだなあ。

どうせならと言う事で、私は初めて見る異世界の夕闇を、巨人の右肩に乗せてもらっ



て眺める事にした。竜人もすつごく尻尾をブンブン振っていたので、巨人にお願いして反対側の肩に乗せてもらっている。

私たち二人を肩に乗せながら巨人がスロープを上って、すつかり巨大な穴に様変わりした遺跡から地上へと這い上がった。瞬間、私の視界は地平線の果てまで続く、日の光と闇のマーブル模様の空に釘付けになる。周囲に何も無いからこそ、頭上から落ちて来る様な夕闇空が、怖い位に美しく思わず魅了されてしまう。

これが、私の知らない世界の景色なんだ。

「こりゃあ、堪らん絶景だな。遺跡探索を続けてきた甲斐があつたと言う物だー！」

巨人の頭を挟んで反対側に居る竜人も大はしやぎだ。彼の場合は景色よりも、巨人に乗っているという事が感動的なのだろうけども。

さあ、これからどこに行こうか。はしやぐ竜人に近くに隠れられそうな場所か、せめて寝泊りだけでも出来そうな場所が無いかを聞こうとする。聞こうとしたのだ。

だが、それは突然の振動で遮られてしまった。足を滑らせそうになった私を巨人が指先を差し伸べて支えてくれる。巨人の頭の角に捕まった竜人が、緊張した声色で大声を上げた。

「いかん、ランドウォームだ！　ちいとばかり騒ぎ過ぎたようだ！　好戦的な生き物だから襲って来るぞ！」

まるでタイミングを計った様に、竜人の言葉に合わせて地面から巨大な物が姿を現した。

それは、とても長い体をしていた。長く長く天まで伸びるんじゃないかってぐらいい地面から飛び出して、そして急に先端の向きを変えて地面に再び潜り込んで行く。段々と浮上と潜行の間隔が短くなって行き、最後にはその全身を私達の前に露わにする。蛇の様だとも思ったがその生き物には鱗が無い。代わりに節が沢山付いた胴体をのたくらせ、先端にある頭には円状になった口の中にヤスリみたいに沢山の歯が並んでいた。

って言うか、でかつ！　ながつ！　こんなの太すぎる！　この異世界ってこんな生き物が蔓延ってるの!?

「ここまでデカいのは珍しい方だな。恐らく、地下で何度も派手に転んだから、音で引き寄せられたんだろう。この肉食ミミズはどうしようもなく凶暴な性格で、そう簡単には獲物を逃がしたりはせんぞ」

『そんな生き物が近くににいるなら先に言えよ!!　そしたらもうちよつと静かに訓練させてたよ!』と言つても、もう既に覆水は盆に返らない。こうなったら、巨人に頑張ってもらう時が来たかもしれない。よしいけ、襲ってきたらぶん殴ってやれ!

鎌首をもたげていた肉食ミミズが威嚇の為か唇を引き剥いて吠え声を上げる。その拍子に折り畳まれていた四本の巨大な牙が展開して、気持ち悪さが更にパワーアップし

た。そのまま奴は、目標を巨人に定めて頭から突っ込んで来る。

ガツキイイン！ と耳をつんざく金属音と共に、肩に乗る私にも振り落とさせられるような振動が襲って来る。巨人の指に捕まってなかったら、今のできつと吹き飛んでいた。こんな高さから真つ逆さまだなんてぞつとしないな。

巨人は無事なのかと見降ろしてみるのが、牙を叩きつけられた胴体には傷一つない。流石お伽噺で大暴れしていた巨人だ、実に頼もしい。

好戦的だと言っただけあって、肉食ミミズは何度も何度も巨人に攻撃を仕掛けて来る。それを巨人は私を庇っていない方の手で弾いたり、腕に付いた分厚い装甲で受け止めてりして防ぐ。これならやられる事は無さそうだ。

でも防戦一方で、自分からは攻撃しようとはしない。どうした、こんな奴ぶん殴つてやつつけちやええば良いのに、一体何を……。

「ワシらだ！ ワシらが居るから迂闊に動けなくなっておるんだ！」

頭の反対側から聞こえて来た竜人の言葉に、私は思わずハツとして息を飲んだ。巨人は私達を気遣って本気で戦えないのだ。私がこの子の足かせになっている。この子の母親になるなんて決意した直後に、この子の邪魔になつてしまうなんて何たる失態。

「くそつ、おおつ!？」

角に捕まっていただけの竜人が、ついに衝撃で振り落とされてしまった。その様子を

見て私は反射的に叫ぶ。『お願い助けてあげて!』と。

果たして、巨人は私の言葉通りに、落ちて行く竜人をもう片方の手で受け止めた。いままで、防御に使っていた腕で。

戦闘中に思い切り隙を晒した巨人に対して、肉食ミミズは一気に飛び掛かって来た。その長い体で巨人の身体に巻き付いて、足から頭までをギチギチと締め上げて行く。

「ぬおおおおつ!」

一度は助けられた竜人が、巨人が拘束された拍子に手の中から零れ落ちてしまった。でも、今回は巨人の膝辺りの距離からの落下なので、竜人は受け身を取って着地できたようだ。特に怪我らしい怪我も無い様で、すたこらサッサと元遺跡の方に逃げて行く。理知的なあのとカゲの事だ、恐らく戦闘の邪魔にならない様にとの判断だろう。

「トカゲじゃないドラゴニユートだ!」

心の中にまでツツコミを入れるんじゃない! お前はエスパークか!?

私は未だに巨人の腕で庇われているが、何時までもこの状態で耐えられるものだろうか。更に締め付けが強まれば、守られている腕ごと圧殺されるかもしれない。

でも、今はそんな事は重要な事では無かった。相手が組み付いた事で、邪魔な戦闘音が出た。だからこそ私は、思い切り息を吸い込んでから、腹の底から声を張り上げた。『戦いなさい! 私の事は気にしなくていいから、思いっきりやってこんなミミズ

ぶっ飛ばしちやえ！ お母さんを信じなさい！ 私に、アナタが強い子だつて見せて！』そんな風に耳元で、思っていた事を叫んでやる。

私を守る為に、あんな大勢の男達を追い払ってくれた。だったら、この子がこんなミズ程度にやられるはずはないんだ。齧りついてでも振り落とされないと覚悟を決めて、私は今までしがみ付いていた巨人の指から手を離し、直ぐに巨人の角に体いっぱい使つてへばりついた。女としてどうかと思う格好だが、それがどうした!!

巨人は私の言葉を聞き、行動を横目で見送つてから、改めて正面に視線を戻す。そして、その全身に圧倒的な力が漲つた。今までギリギリと己を締め付けていた肉食ミミズの体を、内側から無理矢理に抉じ開け強引に投げ飛ばす。引き剥がされた肉食ミミズは悲鳴の様な吠え声を上げて、大きく距離を開けて地面に墜落する羽目になる。

すっげ！ 大迫力！ でも腕痛い！

私は必死にしがみ付きながらも、何とか目を開いて戦況を盗み見る。見えてしまった光景に内心驚喜していた。ロボットと怪獣の戦いがこんな至近距離で繰り出されるなんて。怖いけど。怖いけどかなり嬉しい！

巨人は改めて肉食ミミズと対峙すると、両腕を顔の位置まで上げて腕に付いた装甲を相手に向け、ガードを固めながら突つ込んで行った。ズシンズシンと台地を揺らす足音が響き、肉食ミミズが直ぐ眼前に迫り来る。

先に攻撃を仕掛けたのは迎え撃つ肉食ミミズ。再び牙を剥きだしにして装甲の上から噛み付こうと飛び込んで来た。

その牙を正面から受け止め、攻撃をいなした隙に片手で牙を掴んで頭を引けない様にする。そこへ追撃に逆の手を振り振り、掴んだ頭を引きながら握りこぶしを口の中に叩きこんだ。

湿った布を思い切り壁に叩きつけたような音が当たりに響き、巨人が拳を突きこんだ肉食ミミズの頭部が爆ぜた。なんと言う威力か。肉片が飛び散って、超気持ち悪い。吐きそ……。

頭部を失ったミミズの体が、ピクンピクンとそれでもものたうつ。まだ生きているのか、これだから無脊椎動物は性質が悪い。巨人は掴んだままの牙を振り回して、暴れ続けるミミズの体を放り投げる。再び地響きを起こして巨体が大地に叩きつけられ、もうもうと砂埃を巻き上げた。

頭を失った以上その内動かなくなるだろうけど、あの大きさだといつたいどれだけ生き続けるのやら。ここはきっちりトドメを差しておいた方が良さだろう。巨人に向けて、トドメを差してやれと指示をする。

数秒ほど停止した後、巨人は再び歩き出す。のたうつ肉食ミミズに近づくと、その胴体に向けて拳を振り被った。動かなくなるまでぶん殴るのかと思ったが、どうやらそう

ではないらしい。

見守っていると、拳を振り被っていた腕の装甲が音を立てて展開し、生まれた溝に輝きが走って装飾の様に彩られた。必殺技か!? 必殺技なのか!? 俄然食い付く様に私の興奮は高まった。

紋様の輝きが増して、拳にバチバチと雷光を煌めかせる青白い光の球体が纏い付く。巨人はその球体を拳と共に、のたうつ肉食ミミズの胴体へ、真上から打ち下ろす様に叩きつけた。

次の瞬間、頭を失っても生き続けていた肉食ミミズの体が、その活動を完全に停止する。全身から精気を無くして朽ち果てた様に、萎びてひび割れ枯れ果てたのだ。それ処か、形を保てなくなってバサリと崩れ落ち、荒れ果てた大地に砂となった肉食ミミズの体が広がった。

その光景を見て、私は改めて強く思う。

この子の教育を間違えれば、世界は確実に滅ぼされるだろうと。

次回、第五話『ご立派ですな!』に続く。

## 第五話 『ご立派ですな!』

前回のあらすじ。

巨人を遺跡から外に出す為に遺跡の天井を破壊した。その過程で、巨人自体の思考力はそれほど高くない事が判明する。無事に表に出て夕闇空の景色を楽しんでいたら、滅茶苦茶デカい肉食ミミズに襲われた。私達を盛る為に苦戦もしたけれど、本気を出した巨人の力でミミズは哀れ爆散。必殺技まで叩き込まれて砂になる。

改めて、この巨人は放置したらヤバいと思いました。

遺跡の外に出たのは良いが、襲われたりなんだりで色々疲れてしまった。すっかりと陽も暮れてしまったので、結局今夜はその場でキャンプをする事になった。

巨人を体育座りに座らせて、その足の間に竜人が持つていた一人用のテントを立てる。後はその辺で拾って来た枯草と小枝で、竜人があつと言う間に焚火を作ってしまった。更には水筒と小さなポットを取り出し、焚火を使ってお茶の用意までしてくれる。なんとと言う頼もしさだろう。

「これは、恐らく風化したのだろうか」



焚火の熱に当たりながら、砂になった肉食ミミズの成れの果てを調べていた竜人が言う。私は分けて貰った粘土みたいな携帯食料を無理やりお茶で流し込んで、その後口に顔を響めながら風化したとはどういう事かと問い返した。

「ふっ、やはり口に合わんか。不味いからなその食料は。風化と言うのはまあ、生き物の死骸や岩などが風雨にさらされて少しずつ削れて行く事だ。あのミミズは体中の水分が無くなって、ミイラを通り越して文字通り分解されたのだろう」

それをこの巨人がやったって？ 言われて上を見上げれば、自分の足の間を覗き込んでいる巨人と目が合う。気のせいかその視線は、私が持った携帯食料に注がれている様な気がする。何だろうお腹空いたのかな。

そう言えばこの子は、燃料とか補給しなくてもいいんだらうか。その辺りの情報、お得意の資料には書いてなかったのかなトカゲさんや。

「トカゲじゃないドラゴニユートだ。あの遺跡で見つけた資料には特に具体的な事は書いていなかったのだが、周囲の村ではちと面白いお伽噺があつてな。何でも、この巨神は時間を食べて動いているらしい」

フーン、ソウナンダスゴイネ。私は興味を無くして手を向けて来た巨人の、そのでっかい指先をよしよしと撫でていた。なんだよ時間を食べるって。眉唾も良い所のお伽噺じゃないか。

「確かに、見えない物を食べるなんてのは理解できん物だがな。ほれ、干し肉が炙れたからこれも食うと良い」

どうせ食べるならこういう分かりやすい物の方が良い。かぶりついた干し肉は炙つても滅茶苦茶固くて、おまけに塩辛かったが空腹の体には有り難い物だった。何だか貰つてばかりなので、何時かこの借りは返さないといけないな。

味は兎も角、携帯食料と干し肉でお腹は一杯になった。お茶もしつかり飲み干して、私はそのままゴロンと横になる。あー、凄い疲れたなあ。これだけ疲れてたらベッドじゃなくてもぐっすり眠れそうだ。

「なんだ、あれっぽっちでもう満腹になったのか。見た目通りの貧相な女子だ。もうちつと肉を付けないと、この荒野では生き残れんぞ」

それはアレか、私の胸を見て言ったのか。セクハラばかりしやがってトカゲコノヤロウ。それを言ったら戦争だろうが!!

決めた。こいつはもう私の中ではトカゲのおっさんだ。絶対に呼び方は変えてやらん。

暫く、ぼーっと星空と覗き込んで来る巨人の顔を見上げていると、私はふとポケットに入れたままのスマホの存在を思い出した。横になったままでござござと取り出して画面を付ける。なんとと言う事だ、電源をつけっぱなしにしていたのもうバッテリーが

半分も無い。

念の為に試したが、ネットも位置情報も機能はしていない。完全な圏外だ。試験の為に幾つかの辞書ツールを入れてはいるが、バッテリーが切れればいずれはこのスマホも無用の長物と化すだろう。

「ん？ おお、お前さんもPDAを持つておるのか。それもそんなに小型の物を。それはあまり人に見せるなよ、この世界では高級品だぞ」

寝転がりながらスマホを見ていた私に、トカゲのおっさんがやや興奮気味に語り掛けて来た。なんだよ、物珍しいのか？ と言うかPDAってなんだ。PADの間違いじゃないのか？ タブレットPCとかはそう呼ぶけど。なんとなく気になった私は、詳しく話を聞いてみる事にした。

なんでも、PDA——携帯型情報端末は遺跡潜りの必需品らしい。データの吸出しやら、機械類の操作にも使える情報ツールをこの世界では共通してそう呼んでいるそうだ。そしてバッテリーが非常に貴重品なので、消耗を押さえるべくデータ管理は紙媒体に書き移して行っているらしい。

話を聞き限り、やはりスマホの充電は難しい様だな。——と、手を伸ばして持つて居たスマホが不意に、ひょいっと持ち上げられた。視線で追うと、なんと巨人の指先からなんか更に細い機械のアームが出て来て、私のスマホを掴んでいる。そして、返せと言

う間も無く、巨人はそのスマホをぱくつと口の中に入れてしまった。

もぐもぐ、ごつくん。

いや、ごつくんじゃねえよ！ 私のスマホがあああああ！ もうとにかく驚いて跳ね起きた私は、文句を言う為に巨人の顔を睨みつける。そんな私の目の前に再び巨人が指先を近づけて来て、その指先がぱかんと蓋を開けるみたいにして装甲版を開く。

はたして、その開いた中に充電ケーブルを差された私のスマホが収まっていたのだった。

「何とも面妖な……。おい、何か変化が無いか調べてみい」

トカゲのおっさんに促されて、私は恐る恐るスマホを手取る。画面を付けてみると表示は変わらず、ただバッテリーの残りを示す数値が充電中に切り替わっていた。なんと、この子はスマホの充電も出来てしまえるようだ。

「なんとなんと?! ワシのは!? ワシのPDAはバッテリーを回復できんのか!」

充電ができる事を伝えたら、おっさん大ハッスル。そんなにこの世界ではバッテリーは貴重品なのだろうか、リッユクの中から自分のPDAを取り出して巨人に直接交渉し始めた。トカゲのおっさんのは、本体にキーボードが付いたノートパソコンみたいなのだな。あのおっさんの太い指でキーが押せるのだろうか。

無論、巨人は私の話しか聞かないので交渉は失敗。尻尾を垂れさせて項垂れているの

を見かねた私が、充電してやってくれと頼むとスマホから軽快な着信音が響く。再びスマホを覗き込んでみると、見た事の無い様なチャットツールが起動して、そこに一言だけ『いや』と書かれていた。

え、もしかして返事したの？ チャットで？ また響く着信音と、書かれた文字は『はい』。やっぱり巨人の返答に間違いは無い様だ。

凄い、この子スマホ越しに会話できるようにしたんだ。何て言うご都合展開！

その後、どうしてもダメかなって続けてお願いしてみたら、開いた指先のハッチからしぶしぶといった感じで電源ケーブルが飛び出して来た。規格が合うのかなとも思ったが、トカゲのおっさんがイソイソと試してみると無事に装着できた。おっさんは今、焚火の周りで嬉しそうに小躍りしている。本気で嬉しかったんだな、アレ。

いやあ、私の子は本当にすごいな。何て言うか、ビックリ箱みたいに色んな機能がある。もつとこの子の事を色々知って行かなきゃいけないな。

知ると言えば、この子には名前とかは付いてなかったのだろうか。もしかして、名付け親にもなった方が良いのかと一瞬悩んだが、とりあえずせつかく会話できるようになったのだから尋ねてみる事にした。

そして、チャットに表示される膨大な何か分からないごちゃごちゃした文字の羅列。形式番号？ 試作性能検証機？ こんな数字とアルファベットの組み合わせがこの子

の名前なのか。何だか釈然としないな。

少し慥然としながら文字列を追っていると、最後の方に気になる文字を見つけた。これは英語かな？ システムクロノス……ああ、駄目だ辞書が無いと分からん。ああ、でも、これが良いかもしれない。

今日からお前の名前は、『クロノス』だ！ なんとたら神話の神様の名前だったっけ。よっ、ご立派ですね！

って、あれ？ そう言えば何でこの世界……、日本語が普通に通じて英語まであるんだ……？

次回、第六話『乱暴にしないで!』に続く。

## 第六話 『乱暴にしないで!』

前回のあらすじ。

野営して微妙な味の携帯食料と干し肉を食べた。スマホの存在を思い出して眺めていたら、巨人にスマホを食べられてしまう。何やかんやあって、スマホが充電できるのが分かり、更には巨人とある程度の意志疎通ができる様になった。トカゲのおっさんはバッテリーが充電できると知って小躍りする。ついでに巨人の名前がクロノスに決定。だが、今更ながらに日本語が通じている事に気が付いて私は驚愕した。

悩んだ結果。『別に日本語が通じるんだったら、気にしなくても良いんじゃないかね?』と言う事になった。私は自慢じゃないが頭は良い方じゃない。むしろ知っている言語で会話ができるのなら喜ぶべきだろう。トカゲのおっさんに聞いても役に立たなかったしな。

「昔から使われてきた言語だったから、別段気にした事は無かったな。これがお前さんの世界の言葉だと言うなら、異世界から伝わってきたのがそのまま定着したんじゃないのか?」

そんなご都合主義な考察で良いのか。本当に考古学者なのかこのトカゲは。まったく、いい加減だなあ。

そんな訳で私達は今、元遺跡の穴傍からキャンプを撤収し、巨人に乗りながらトカゲのおっさんに指示された方向に進んでいた。何でも、この方向に一番近い町があるんだそう。そこで食料品や、生活に必要な物を買に行けらしい。

とにかく次の方針を決めるにしても、今は持っている物が少なすぎる。とりあえず、日差しから身を守る為に帯状の長い布を貰ったので、頭を包んだ後に埃避けとして首にもマフラーみたいな巻いている程度だ。

!!  
どうにか他にも色々揃えたい。乙女には沢山必要な物があるのだよ。あと、お風呂

「町に近づいたら、このデカ物は隠しておかんなあ」

そう言えばその問題もあったか。こんなデカイのをどう隠せばいいんだ。と、思わず頭を掻きむしりたくなったのだが……、なんとその解決方法は、巨人が自ら示してくれた。巨人の目線で町が見えて来た頃、手ごろな岩場に身を潜めて巨人はまず穴を掘った。両足が膝まで入る位の穴に身を収めると、巨人の両手両足が縮んで頭も胴体に埋まって行く。なんと言うか土偶みたいな形になって、そしてそのまま自身を振動させて地中に潜って行った。今は辛うじて頭が見える程度。これで直ぐには見つからないし、



少なくとも巨人には見えないはずだ。

これから巨人にはお留守番してもらおう事になるのだが、淋しくなつて勝手に着いて来るなんて心配はいらない。移動中に偶々発見した事なのだが、昨夜スマホを食べられた後から巨人の視覚とスマホのカメラが連動しているのが発覚したのだ。

スマホをなんとなく弄つて居たら、撮影した覚えのない私の顔写真が保存されているのを発見。巨人に何か知っているのか、もしかしてカメラを勝手に使えるのか尋ねれば、例のチャットツールで帰ってきた返事は二度とも短い肯定。なんとスマホを遠隔で操り盗み見をしていたのだ、悪い子め。

ちなみに巨人の見た物をスマホに映し出す事も出来るので、巨人の最大望遠した視覚での映像も色々楽しめた。動画も静止画も思いのままだ。だから許します。

今回はそれを利用してもらい、制服の胸ポケットに入れたスマホで、巨人も私達と一緒に町を見て回る事が出来る。これで退屈だからと、その辺を歩き回る事も無いだろう。

さあいよいよ異世界の町を散策だ!! と勢い込んでやって来たは良いものの……。到着した町はなんと言うか、想像していた異世界の物とは違っていた。

立ち並ぶ建物は四角い豆腐建築で、大きさも向きもまちまちで統一性が無い。色も白一辺倒で飾り気が無く、実に実用的と言うべきか殺風景と言うべきか。舗装もされてい

ない荒地地まんまの地面の上の建物達を、申し訳程度の木製の柵がぐるっと一周圍つて  
いるだけ。そして町の近くには、大きく積み上げられたガラクタの山みたいなのがあつ  
た。なんでもサルベイジャー達が拾つて来たは良いが値が付かなかつたからと不法投  
棄した物なんだそうだ。

ガラクタ塗れのサルベイジャーの屯する補給地点。それが私達の辿り着いた町だつ  
た。

木製のログハウス風の建物が立ち並ぶ、中世の田舎町みたいなのを想像していたのだ  
が、私の期待からはかなりかけ離れた様相だ。その事が顔に出ていたのか、トカゲの  
おっさんには笑われてしまった。

「ご期待に沿えなくて悪いが、この辺りの町はみんなこんな様相だぞ。周圍に建築に使  
える木材が生えないから、建築材は大抵石か土レンガだな。外壁は陽の光を弾く様に白  
く塗るのが主流だ。蒸し焼きになりたいなら話は別だが」

うん蓄を語つてくれるのは良いが、ドヤ顔で言つて来るのがムカつく。だからお礼は  
きちんと言つておこう。ありがとう、トカゲのおっさん。

「トカゲじゃないドラゴニユートだ。さて、まずはお前さんの格好を何とかしよう。ワ  
シのくれてやった布切れだけでは心もとないだろう」

ずいぶん気前が良い話だ。あまり貰つてばかりでは気が引けるのだが。欲しい物と

か色々あるし……。なんて言ったら、小娘が遠慮をするなど言われてしまった。何でもスポンサーが居るから懷事情は苦しくないらしい。そこまで言うなら、遠慮なんてかなくなり捨てる事にしよう。

まず服装をどうにかしようと服屋に行ったのだが、何とも悲しい事に私の今着ている制服以上に丈夫で長持ちするような服は無いと言われてしまった。流石は三年間の使用に耐える前提の量産品だ。仕方ないので似たデザインのシャツと、肌着類を幾つか揃える程度にしておいた。

次に行ったのは、武器防具屋と言う名前の雑貨店みたいなお店で、荷物を入れる為の背囊と雨風と砂も防げる外套。それから腰に巻くポケットの沢山付いたツールベルトに、でっかい四角レンズが二つ付いた防塵ゴーグル。先の巻き布も合わせて装備すると、ちよつと着ぶくれた感がある。日差しが強いのにこんなに着込む必要があるのは、直射日光を防いだ方が結果的に涼しくなるからなんだそうだ。

「それから、こつちの刃物と手投げ弾もいくつか持つておけ」

トカゲのおっさんがそう言つて、鞆に収まったナイフと取っ手が付いたスチール缶みたいな物を二つ手渡してきた。手投げ弾つてあれか、グレネードつて奴か!? んな物騒な物はあるんまり持ちたくないんだけど……。

「そいつは閃光発音筒と言つてな、馬鹿デカイ音と光で外敵から身を守る為の必需品だ。

街中では間違っても安全ピンを外すなよ。もし外しちまったら五秒以内に投げ捨てて、目と耳を塞いで蹲れ」

な、なんか想像してた異世界と違う。剣と魔法の臭いが全くしない、爆薬と硝煙の香りがしてくるようだ。ファンタジーじゃなくてミリタリーじゃないかコレ。

ナイフの鞘には、円筒形をした金属のヤスリみたいのも一緒にくっついていて。何でもナイフの背のギザギザに擦り付けると火花が出るので、火付けの道具として使えるんだそうだ。

試しに目の前で火花出された時は、金属のこすれる音に思わず耳を塞いでしまった。ちよつ、まだ買ってないのにそんな強くやるなよ。やめろよ、やめつ、乱暴にしないで！ 店のおじさん凄い顔で睨んでるから！

くそう、絶対面白がつてやがるなこのトカゲ。悔しいので自分でも、色々出来る様にならなくっちゃな。

その後は寝そべる時に使うシートとか、折り畳み式の穴掘りの道具とかもまとめて買って背囊に詰め込んだ。それなりの重さになったけど、自分の命を支える重さだと言われたら耐えられそうな気がしてきた。後はそのうち慣れて行くだろうとの、先達からの訓示だ。

食料品や水はかさ張るし重たいので明日の出発前に買う事にして、とりあえずは腹こ

しらえをしようと言う事になった。そう言えば陽はもう既に中天を過ぎていて。遅めの昼食として、そろそろ携帯食料以外の物も食べてみたい。レストランなんて気の利いた物は無いので、ここは定番の酒場に行こうと言う事になった。

それにしても、この街に入ってから常々思っていた事がある。この街の住人はなんと言うか……、トカゲのおっさんみたいなのが沢山居るな。

「うん？　この街にはドラゴニユートはそんなに居ない筈だが。亜人は確かに多いが、ヒューマンもそれなりに居るだろうに。確かに荒野の町では、体の強い亜人の方が住みやすいがな」

いや、そういう意味じゃなくてな……。首から上がモロ動物って言う亜人が多い気がするんだよな。私知ってる亜人って、尻尾が生えててケモノ耳とか生えてても基本は人間って言うか。この世界の亜人はケモ度が高くないかな。いや、犬とか猫の人達は可愛かったんだけど、爬虫類系はなかなかインパクトがあつて……。

「ふっ、心配するな。亜人から見れば、ヒューマンの顔もそのように見えるのだからな」  
そんなもんか。人間だつて猿だもんな。あんまりじろじろ見るのはやめておこう。  
田舎者丸出しでキョロキョロしてたら、因縁吹っかけられたりするものだしね。

なんて話をしていたら、目的の酒場に付いた。

昼過ぎだと言うのに喧噪も人の出入りも無い。ここホントに大丈夫なの？　とんで

もないゲテモノ料理とか出てこないよね? 冷やした人食いアメーバのヌメヌメ細胞とか。

「なんじゃそりや。心配せんでも、この飯は他の所よりだいぶマシだぞ」

おい、美味いって言えよ。言ってくださいお願いします。マシって何なのさ!?

そんなこんなで私達は酒場の戸を開けて、日差しから逃げ込む様に薄暗い店内へと入り込む。中はうつとするくらいのお酒の臭いと、濃密な煙が充満していた。

なにこれ、タバコの煙? 分煙しろとは言わないけど、少しは換気しなさいよね。煙たいなあ。

「……おい、悪いが今この店は貸し切りで……。飯が食いてえならどこか他所へ行つてくんない……」

私が煙たさに顔を顰めながら口元に巻いた布を下ろしていると、店の中で先に座っていた人達のうちの一人がそう言って来た。客席に座ってるって事はお客さんなのだろうか。店主でもないのに出て行けなんてずいぶん言い草である。

もしかしてこの店に活気が無かったのは、この人達のせいだろうか。せめてどんな奴らだか顔を見てやろうと、薄暗い店内で目を凝らした。

「聞こえなかつたのか? 俺達は今——」

何だか見覚えのある鉄仮面を被った人が、もう一度口を開きかけてその言葉を止めて

しまう。

そして、薄暗闇に目が慣れて来て店の全体が見渡せるようになった。そしてその時になつて漸くと、店中の席に誰かが座っているのに気が付く。

店内には、世紀末な格好のモヒカン達があしめいていたのだつた。

「お、お前はあの時の嬢ちゃんか!？」

モヒカン達に兄貴と呼ばれていた鉄仮面の人が、私の顔を驚いた眼で見つめている。周りのモヒカン達も色めきだつて、がたがたと座っていた椅子から腰を上げていた。

トカゲのおっさんは怪訝そうな顔をして私の顔を見ている。やめてくれ、そんな目で見なよ。

どうやら私はこの街に来て、したくも無かつた再会をする羽目になつてしまつたようだ。

次回、第七話『もう好きにして!』に続く。

## 第七話『もう好きにして!』

前回のあらすじ。

巨人にお留守番してもらいながら、荒野の町に立ち寄りお買い物。制服姿はそのままだけど、いろいろ買いそろえて少しはこの世界っぽい格好になれたと思う。その後お腹を満たす為に酒場を探して入り込む。静まり返った店内では、記憶に新しいモヒカンと鉄仮面が待ち受けていました。

これは、どういう状況だろうか。

「そうかそうか! 生きてたのか、めでてえなあ!!」

「ヒヤツハー!! お祝いだあ!!」×うじやうじや

つい先ほどまではお通夜もかくやと言った雰囲気だった酒場の中は、今は男どもが酒杯を交わし笑い声を上げる大宴会の様相を顕わにしていた。本当に何なんだこの状況は。

私の顔を確認した鉄仮面は、開口一番宴会の開始を宣言した。襲われるとばかり思っていた私はその時点で面食らってしまった、トカゲのおっさんも怪訝そうな顔で状況を見



守るばかり。そして、薄暗かった店内には窓を開け放って陽の光が取り入れられ、なかなかでつかいミュージックプレイヤー——ジュークボックスって言うらしい——から音楽が流れ出す。そうして、あれよあれよと言う間に乱痴気騒ぎが始まってしまったのだ。ああうん、もういいよ、もう好きにして！

「はっはっはあ！ どうした、ここは俺らのおごりだぞ。食べ食べ、どんどん食べ！ そっちのトカゲの旦那も遠慮すんなよ！」

「ああ、馳走になっておるよ。あと、トカゲじゃないドラゴニュートだ」

あ、それ私以外にも言うんだ……。やっぱりトカゲに見えるよね。

今はカウンター席にトカゲのおっさんと並んで座り、私の隣に移って来た鉄仮面さんのおごりで食事を取っていた。私はお酒を飲めないのにジュースだが、他の二人はジョッキで良く分らないお酒を飲んでた。お酒もジュースも両方サボテンから作られているらしい。サボテンみたいな物って言ってたから、サボテンで良いんだろう。

食べ物の方は警戒していた印象と違い、堅焼きにした目玉焼きとちよつと固いソーセージにパンが付いてきた。衛生的に良く火を通さないとイケナイらしい。半熟卵などもつての外だ。パンはビックリした事にしよつぱかったので、薬味無しでも普通にオカズが食べられた。逞しい筋肉で小さなフライパンを振るう酒場の店主さん、グツジョブ。

お腹一杯になって満足していると、余裕が出て来て店内の様子が目に入って来た。そして、何故か見慣れたものが店の奥に飾られているのに気が付く。私が投げ捨てた筈の学校の鞆だ。何故か花輪が掛けられて、手前でお線香が焚かれていたが。つて言うか線香あるのか。

「ん? ああ、あん時に嬢ちゃんが投げ捨てて行つた奴だな。こいつを届ける為に追いかけたのに、嬢ちゃん悲鳴上げながら走つて行くからよお。おまけに行き先が、あの『時食いの巨神』の遺跡だしよ。慌てて全員で追いかけてしまったぜ」

そして最後に、怖がらせちまつて悪かつたなど謝つて来る鉄仮面さん。人は見かけによらないといふかなんと言ふか。こちらこそ見かけで判断してしまつてすみませんでした!

そんな訳で私の手元に鞆が帰つて来た。でも、何で花輪と線香が備えてあつたのだろうか。

「ああ、言つてなかつたが葬式してたんだよ。嬢ちゃんの。俺たちやてつきり嬢ちゃんが巨神にやられたと思つてたんでな。見捨てて逃げちまつたのが後ろ暗くて、せめて弔い位はしてやらにやあ、つてな?」

なんと言うかまあ本当に、良い人達なんだなあ……。私が生きていたのが嬉しかったのか鉄仮面さんは、巨神にやられなくてよかつたなどバシバシ背中を叩いてきた。

どうも、このサルベイジャー集団の鉄仮面と愉快なモヒカン達は、巨人の事を良く無いモノだと認識しているらしい。この辺りに伝わるお伽噺のせいなのか、『時食いの巨神』は近寄るのも禁忌と思っている様だ。この辺りでは大体共通の認識の様だが、中にはトカゲのおっさんみたいに好んで発掘に行くやつもいるらしい。でも、その誰もが奥の大部屋に鎮座する巨神には、発掘どころか調査も出来なかつたのだとか。

殴つても切つても突いても、ヤケクソになつて爆破しても、傷どころか汚れすら付かないそれを、まるで時間が止まっている様だと表現したサルベイジャーも居たんだそうだ。確かに不気味な話には違いない。

すいません、私その巨神とやらの母親になつてるんですよ。この情報は、この人達には隠しておいた方が良くかもしれないな。そんなに巨人の事を恐れているなら、今町の傍まで来てますとかわざわざ知らせない方が良いでしょう。

それに、申し訳ないけどこの人達からうわさが広がるのもやつぱり怖い。ちらりと隣のとカゲのおっさんの顔を盗み見たが、おっさんも自分からは巨人の話はしないようだった。多分似た様な事を思っているのだろう。

「ワシはこの小娘を保護してこの街に連れて来ただけだ。先行きに難儀して居る様なので、暫くは面倒を見ようと思つておる」

「そうか、何だったらこつちでも世話しようかとも思つたが、こんな野郎だらけの所に放

り込むよりはそっちの方がマシだろうな。良かったな嬢ちゃん、荒野で行き倒れないなんてお前さんかなり運が良いぜ」

むう、この鉄仮面さん良い人過ぎて嘘ついてるのが辛い。ちなみに巨人が動いた事は特に誰かに知らせる様な事はしていないらしい。どうせ言っても誰も信じないし、あの遺跡から出て来なければ気にしなくても良いだろうって。

ごめんなさい、思いつきり巨人外に出ちゃってるんですよ。あー、変な汗出て来た。トカゲのおっさんは凄いい涼しい顔して酒飲んでるし。なんかムカつくな。

そうこうしている間に、私の目の前にデザートのアイスのせパンケーキが置かれた。二段重ねの分厚いパンケーキに、真っ白な半球状のパニライスの乗った素敵な小島だ。こんな荒野の異世界で甘い物が食べられるなんて、なんて幸せなんだろうと私はナイフとフォークで小島を切り崩しに掛かった。

そんな時だ。店の外から突然一人のモヒカンが、息せき切って扉を跳ね開けて入って来たのは。彼はそのままの勢いで、カウンターから振り返った鉄仮面さんにあらん限りの声で叫ぶ。

「ヒヤッハー! 兄貴てえへんだあ! 町の外に巨神があ!! 巨神の奴が街外れまで迫って来やがったあ!!」

「ああ!? どうした、落ち着いて説明しやがれ! 巨神がまさか遺跡の外に出やがった

のかあ!？」

うん、美味しい。アイスを吸ったふわふわの生地が甘くて幸せ。何も考えたくない。くっそ、せめてアイスだけでも！

大急ぎでアイスを口に詰め込んで、もぐもぐもぐと咀嚼し飲み下す。そして痛む頭を押さえながら、酒場の店主に後で食べに来るから残しといて叫んで店の外に飛び出した。

今このタイミングで巨神だ何だと言うならば、まず間違いなくうちの巨人だろうと私の頭には浮かび上がったのだ。スマホのカメラでこっちの様子は伝わっていたはずなのに、もしかして宴会に参加したくなってしまうたんだらうか。

なんにせよ、大騒ぎになる前に言い聞かせて、身を隠させないといけない。胸ポケットからスマホを取り出して、電源ボタンを押して画面を表示させた。そして同時に、スマホの画面に一枚の静止画が拡大されて表示される。どうやらまたスマホを勝手に動かしているようだ。叱ってやろうかと口を開き掛けたが、その画像を見て私の動きは止まってしまう。

そこには、町を外から眺めた風景と共に、スクラップ置き場から起き上がる見た事も無い巨大な人型の何かが映っていた。

巨大な、しかし私の巨人——クロノスとはかけ離れたシルエットの新たな巨人。恐ら

くこのスマホに映っている映像は、私に見せる為に撮影してくれたものなのだろう。町に来たのが私の巨人ではないと分かって安堵すると、今度はこの人型は何なのかと疑問がわき上がる。

「おい、小娘! ワシを勝手に置いて行くんじやあない! 一人で出歩いておると連れ攫われちまうぞ! この辺りじやただでさえ、お前さんぐらいの年の娘が攫われる事が多いと言うのに」

誘拐とか普通にあるのかよこの世界。こわっ!

背後からトカゲのおっさんが追い付いてきたので、とりあえずスマホの静止画を見せる。なんじやこりやとかぶつくさ言っていたが、映っている物が私の巨人ではないと気が付くと目を輝かせた。ああ、そう言えばこのおっさんは、巨人とか巨神みたいな昔の遺物が大好物なんだっけ。

「あー! あー! 聞こえているかな、この町に住むゴミ虫の諸君!! ただいまマイクのテスト中! テストや実験とはなんてすばらしい響きなのだろうか、我輩興奮を隠しきれないでついつい声が大きくなってしまいます。あっあっ、助手君痛い痛い。話を脱線させてごめんなさい、やめてっ、乱暴にしないで! あ、これ前回のだ!」

とりあえず、どうしようかと相談しようとした所で、町の中に機械越しに出したくぐもった大音声が響き渡った。なんとと言うか、反応に困ってしまう様な、凄く世界観の違

う騒がしい声であつた。

次回、第八話『こんなの初めて！』に続く。

## 第八話『こんなの初めて!』

前回のあらすじ。

再会した鉄仮面と愉快なモヒカン達は、凄く良い人達だった。私の為に開いてくれたお葬式が、一転して大宴会となる。この世界のまともな料理を堪能させてもらって居たら、町に見た事も無い新たな巨神が現れた。ついでに、第四の壁に喧嘩を売る様な発言をする、機械越しの大音声は街中に響き渡る。

街中に突然響き渡った大音声。それはどうも、例のスクラップ置き場に居る人型の方から聞こえてきている様だった。

私とトカゲのおっさんは顔を見合わせて、声の方に近づいて見る事に決める。何事もまずは確認からだ。うちの子が関わっていないのなら、尚更情報は集めておいた方が良さだろう。

「うむ、危なそうならば逃げれば良いしな。さあさあ、早くあの新しい巨神を見に行こうじゃないか」

こいつぜってえ好奇心優先だろう。尻尾ブンブン振ってるし、お前は犬か!



「犬じゃないドラゴニュートだ」

言うと思つたよ！

そんなやり取りをしつつ息を弾ませて走れば、やがて町の傍のスクラップ置き場に辿り着く。かさ張る荷物を酒場に置きっぱなしにしたおかげで軽快に走れた。お願い、パンケーキと一緒に取っておいて酒場の店主さん。

大きさも大きさなので走っている間中ずっと見えていたが、間近に来てみてようやく分かった。この新たに現れた巨神は、人の形をしてはいない。人型に見えるのは上半身だけで、下半身は四角い箱になっている。箱の前面がまるで足の様に形を変えているので、なるほど正面から見れば巨神に見えるのだろう。

そして、その巨神もどきの前には二人の人物が佇んでいた。一人は長身で髪の毛の長いメイドさん。もう一人は、そのメイドさんに片手で後ろ頭を掴まれ、プラインと持ち上げられている、白衣を着た毛むくじやらのげっ歯類顔の亜人。あれは間違いなくカピバラの顔だ。背が低いせいでケモ度は八十パーセント位に見える。

その場には、巨神もどきとさっきの大音声で人だかりが出来ていた。その集まり具合を見て、ぶら下げられていたカピバラがじたばたともがいて、メイドの腕から逃れ地面に降り立つ。そして奴は、手に持っていたメガホンみたいな物を口元に持つて行き、また機械越しの大音声で話し始める。

「はい、静かに、静かに。はい、今皆さんが静かになるまで、五秒かかりました。えー、今日はこの街のゴミ虫の諸君に嬉しいお知らせがあつて我々は交渉に参りました。なんとなんと、我が陣営では若い女性の皆さんの協力を募集しております。えー、一六歳から一八歳前後の女の子が良いと言う事でありまして。この年代の女性を連れて来てもらえれば、なんと高額な謝礼が支払われまーす。明朗会計ですよー」

聞こえた言葉に思わずどきりとしてしまった。私は慌てて首元の布を持ち上げ顔を隠す。一六〜一八つて、丁度私ぐらいの年齢じゃないか。つて言うか、もしかして誘拐事件が頻発してる理由つて、こいつ等が関わってんのか？

似た様な事を考えた奴が居たのか、何のためにそんな事をするのかと群衆の中からヤジが飛ぶ。それを聞いて白衣のカピバラは、鼻先に着けていた小さな眼鏡をクイツと指で押し上げる。

「それはもちろん、我輩の崇高なる人体実験に使うに決まっているのである。この吾輩の作り上げたレプリカ巨神の動——痛いタイタイタイ！ 割れちゃう、我輩の貴重な頭脳が割れちゃう！ 助手君、我輩の天才的頭脳が喪失しちゃう!! 茹で卵の殻みたくになっちゃう!!」

物凄い事を言い放ったカピバラの頭を、またもやメイドさんが片手で掴みあげた。そして、一体どんな力が掛かっているのかミシミシと何かがきしむ音が聞こえて来る。あ

んなに細くて長い腕なのに、握力ばねえ。しかもメイドさんの顔色は、無表情を通り越して絶対零度に近かった。超怖い。

その後、カピバラがごめんなさいと連呼していたら、しぶしぶと言った様子でメイドさんは頭を開放した。地面にぼてつと落ちたカピバラは、直ぐにシャキツと立ち上がった再びメガホンで話し始める。めげない奴だな。

『我輩としてはこの交渉に応じて、町の娘どもを素直に差し出してくれると大変喜ばしい。交渉が決裂した場合は、この背後にそびえる我輩自信作のレプリカ巨神をけしかけて、直接回収させてもらうのである』

最後の一言を聞いた時、周囲の空気は一変した。あんな巨大な物をけしかけると言ったのだ、その真偽は兎も角としてこれは明確な脅しになるだろう。

周囲の空気の不穏さを感じた私は、トカゲのおっさんに逃げる様に伝えようとして隣に視線を向ける。しかし、隣にも周囲にもトカゲの姿は見えなかった。あの野郎、一人でさっさと逃げやがった!?

『ん？ おお、ちょうどそこにギャルがおるではないか。今その子をこちらに連れて来れば、素敵な褒章があなたの物に！ 視聴者の皆さんも是非この機会にご応募を！ お申込みはこちらの番号まで！』

やばい、色々やばいカピバラに見つかった。周囲に居た人達も一斉にこっちに視線を

向けて来る。色々思いは違うのだろうけど、その誰もが必死そうな顔をしていた。はっきり言って怖い。絡みついて来る視線が気持ち悪い。

じりじりと私に向けて包囲が狭まって来る。なんだよ、金や安全の為なら私はどうなっても良いってのかよ。怖さと理不尽さで勝手に涙があふれそうになってしまった。

「買物の時に言った事を思い出せ!!」

聞き慣れた声音で大声が上がリ、包囲の中にスチール缶みたいな物が投げ込まれる。それが何なのかを理解した瞬間、私は顔を背けながら目を閉じて両手で耳を塞いでその場に蹲った。

程なくして、耳を塞いでいても身体に響いて来る轟音と、瞼ごしにも感じられる閃光の気配。それから、私の周囲でバタバタと人が倒れる音も続いて行く。恐る恐る目を開けると、私を包囲していた連中が倒れ込んでいるのが見えた。

「何してる! さっさと逃げんか!!」

再び聞こえて来る、聞き慣れたトカゲのおっさんの声。逃げたくせに、助けに戻ってきてくれたんだ。街中で使うとか言ったくせに、自分ではあつさり使っちゃうなんてズルいじゃないか。

「身の危険を感じたら、迷い無く使えと言うのを忘れておったわ」

それは一番大事な事なんじゃないだろうか。後で尻尾を蝶々結びにしてやろう。

私はトカゲのおっさんの手招きしている方に全力で走る。その私の前に、スツと横からメイドさんが現れて道を遮って来た。あのカピバラの隣に居た筈なのに、何時の間に移動したのだろう。まったく気配を感じなかった。

メイドさんは今まで背中に背負っていた、布に包まれた巨大な棒状の何かを片手で引き抜く。布を解かれたそれは、彼女の手の手で中心から別れてくの字型になる。最初は剣かと思つたが、違うあれは――

「小娘!! うおおおっ!!」

建物の影から手招きしていたトカゲのおっさんが、メイドさんにくの字型の巨大な物を投げつけられて慌てて逃げ出す。投擲された得物は高速回転しながら弧を描いて、再び彼女の手元に戻って来た。彼女が得物を手にした瞬間に、通り道に在った建物が悉く切り裂かれて崩れ始める。

あれは巨大なブーメランド。現実のブーメランドは、何かに当たったら返って来ないんじゃないやなかったのかよ!!

メイドさんがブーメランドを肩に担ぎながら、私の方に手を伸ばして来る。やばい、今度はトカゲのおっさんの助けは期待できそうにない。捕まったら私もアイアンクローされるのか!?! くそつ、人体実験も茹で卵の殻も御免だぞ。

そんな戦慄する私の後方から、地に轟く様な爆音が近づいてきた。私は危機的状態

だったが、思わず背後に視線を向けてしまう。

「ヒヤッハー!! 嬢ちゃん捕まりなあ!」

近づいてきたのは、轟音奏でる大型二輪車に乗った鉄仮面さんだった。彼はすれ違いざまに私を搔つ攫い、更にはメイドさんに向けて手にした武器をぶつ放した。それは水平二連式のソードオフショットガンで、女性相手だと言うのに容赦なく顔面を狙って放たれる。そして、メイドさんはそれを事も無さげに担いでいたブーメランで払い除けた。

ショットガンの弾つて、あれつて確か散弾つて奴だよ。何であんなにあつさりと凌げるんだよ! さつきから凄いい体験のオンパレードだ! こんなの初めて!

元々街外れに在ったスクラップ置き場を抜けて、鉄仮面さんは二輪車を町の外に向けて走らせる。荷物みたいに抱えられていた私は、その間に自力でなんとか鉄仮面さんの後ろに跨る事に成功した。こえー、スピード出てるのに動くの超こえー。でも、巨人にしがみ付いて戦闘した時よりは楽だったな。

『くおおおああああああ!! 我輩のおめめを目がー目がーつてブラックアウトさせたどころか、助手君の可愛いお顔を狙うとは許せん!! くうおうなつたら、レプリカ巨神でノシイカにしてくれるわあ!! イテテテテテテテテ! なに!? 可愛いって言ったから照れたの!? 助手君かわ——イテテテテテテテテテ!! 助手君の異常な

愛情が痛い!!』

町の方からあのカピバラの声が追いかけて来て、スクラップ置き場から四角い下半身の巨神もどきが飛び出して来る。どうやら二足歩行では無く箱の下のキャタピラで推進して、前足部分のタイヤで方向転換している様だ。まるで地面の上を滑るように移動して土煙を上げていた。

カピバラ本人はあのメイドさんがまた頭を掴んでいて、走って追いかけて来ている。あのサイズの巨神もどきと並走してるんだけど、ドンだけ走るの速いのさあのメイドさん。

駄目だ、あんなでつかいの相手に、鉄仮面さんの銃だけじゃ対抗出来っこない。私は片手で鉄仮面さんの服を掴みながら、握りっぱなしだったスマホの画面をもう一度標示させて確認する。

スマホの画面にはやはり巨人の視界が映っていた。土煙を上げて走行するバイクの背に乗る私を、スマホは大写しで標示している。スマホを見て目を見開いている所までばっちりだ。

あの子は私のピンチを知っているんだ。それでも動かないのは、私が動かない様に言い聞かせたから。『言いつけを守れて偉い、良くやったね！ 後で一杯よしよしして上げるから、お願い助けてクロノス!』って、私はあらん限りの声で叫んでいた。

現在逃げている方向とは少し離れた場所で、轟音と共に高々と土砂が舞い上がった。視線を向ければ、そこには悠然と立ち上がる巨人の姿。頼もしくて、言いつけを守れる良い子が居た。

私は突然現れたもう一体の巨人に慄く鉄仮面さんに、新しく現れた巨人に向かつてくれと頼み込んだ。事情も説明せずに唐突に言った私の言葉だが、何度も何度もお願いしますと頼み続けると鉄仮面さんは二輪車の向きを変えてくれた。ああもう、この人本当にいい人過ぎるよ。

でも、あの距離だと後ろの巨神もどきに先に追いつかれてしまうかもしれない。大きいくせに機動力まである何て、卑怯すぎるだろう！

『クロノスお願い、間に合つてー!』なんて、言つても無駄と思つても言わずには居られない。

そして、私の巨人はその思いに応えてくれた。

両足の装甲が展開して最初の戦いの時の様に、生まれた溝に光が充填して紋様を浮かび上げる。そして、巨人が一步足を踏み出した時、その巨人の姿が視界から消えた。

は？ 何て呆けた次の瞬間には、二輪車の進行方向とは逆側からとんでもない音量の金属音が響き渡る。音の方を向いてみれば、いつの間にか移動していた私の巨人が、巨神もどきをぶん殴っていたのだった。



鉄仮面さんが驚いて二輪車を止め。そして、その直後に私達を猛烈な突風が襲った。元々巨人の居た方向からの、身体が飛ばされそうになる位の風圧だ。

何とか横転を免れた私の耳に、スマホの着信音が響く。今度はチャットツールが起動しており、そこに『accelerator』と書き込まれていた。アクセラレーター？ 加速したってこと？ 何それ凄い。

呆然と視線を巨人と巨神もどきの方に向ければ、二体の勝敗はもう既に決まりかけていた。完全に不意を突かれた形の巨神もどきは、最初の一撃で吹き飛ばされて横転してしまう。起き上がろうと腕を突っ張った所で、私の巨人がそのどてつばらを蹴り上げる。その時点で、上半身と下半身が引きちぎれてしまった。

倒れ伏した下半身は放置して、私の巨人は上半身を執拗に踏みつけて行く。一回、二回と、繰り返してとうとう頭部がひしゃげてしまう。更に胸部を踏み抜くと、ついに巨神もどきの上半身は巨大な爆発を生み出して砕け散った。

『おのおれえい!! 吾輩がスクラップから丹精込めて五分で作り上げたレプリカ巨神を、よくもやってくれたなあ!』

爆発が収まると、三度響くカピバラの声。彼は横転したもどきの下半身の上で、ピョンピョン飛び跳ねて存在を主張している。口を開かなきゃ可愛いんだけどなあ。

その足元の箱型の下半身が内側からボゴンとぶち破られて、中からパイプの沢山付い

たカプセル型の金属の塊が現れた。カピバラがその金属に飛び乗ると、箱の内側から金属を抱えたメイドさんが飛び出し地面に降り立つ。彼女はブーメランをまた棒状にして片手に持ち、更に自分よりも大きな金属の塊——ついでにその上のカピバラも——を涼しい顔で肩に担いでいた。あまりの不条理な光景に、流石に嫌悪感が湧いてきてしま

う。  
『動力炉だけは回収させてもらうのである！ いいか、この敗北は我輩の頭脳の敗北ではない！ これからの世界に羽ばたく我輩の新たな科学技術の為の礎なのだ!! おぼえてろよー!! また先の方で出て来てやるからなー!!』

騒がしいカピバラと物静かなメイドは、捨て台詞と共に荒野を走って去って行った。何だったんだあいつらは……。流石に疲れた……。

「……詳しい話、聞かせてくれるんだよな？」

私が頭を預けている背中を持ち主が、冷静だが有無を言わせない声色で訪ねて来る。どうやら私はまだ、ゆっくり休みではいられないようだ。

次回、第九話『激し過ぎるよこんなの!』に続く。

## 第九話 『激し過ぎるよこんなの！』

前回のあらすじ。

突如現れたカピバラ顔の亜人とブーメラン使いのメイドさん。独特過ぎる言動に戸惑いつつも、理不尽な状況に抗う為に逃走劇を繰り広げた。奴等は人体実験の為に、高校生ぐらいの女の子を集めているらしい。巨神もどきを巨人が倒したのはいいけれど、親切にしてくれた鉄仮面さんに嘘を吐いてたことがばれました。

あれー？ どうしてこんな事になっているんだろう。

「ヒヤッハー!!」酒だあ！ 酒を持って来やがれえ!!」

「宴会の続きだぜえ！ ヒヤッハー!!」×凄い沢山

私の周りでは今、鉄仮面と愉快なモヒカン達が再びの酒宴で踊り狂っている。『俺は嘘がでえきれえなんだ！ そこに座れ！』みたいのに、てつきり圧迫面接みたいな感じで責められると思っていたのに。状況の推移が激し過ぎるよこんなの！

あれから事情を説明する為に、私達はあの酒場へと戻って来ていた。途中、家屋の残骸に挟まれて動けなくなっていたトカゲのおっさんを回収し、巨人はまた岩場に隠れに

戻ってもらっている。

中で待つていたモヒカン達はしきりに私達の事を心配してくれて、酒場の店主さんは残して行つたパンケーキを温め直して出してくれた。その優しさにいたたまれなくなつて、私は嘘を吐いていた事を謝罪して巨人の事を全て話したのだ。

罵倒されたり、怒鳴られたりするだろうと思つてビクビクしながら。それでも包み隠さずに、今日までにあつた事を全部ぶちまけた。巨人を災厄にしないために育てる事、そして私が違う世界から来たことも。

そうしたら、何故か宴会が始まつたのだ。訳が分からないよ。

「まあ、嬢ちゃんが無事に帰つて来られたんだから、それで良いじゃねえか」

そんなんで良いのだろうか。本人達が納得してるなら良いんだけど。あれ、おかしいな。このパンケーキきちよつとシヨツパイよ。店主さん、今度はシロツプたっぷり掛けてくれたのになあ。

「それじゃあ、特に行く当てもねえのか。あんなデカいのを抱えてるわりに、ずいぶん行き当たりばつたりだな」

「ワシとしては観察と調査が出来れば良いからな。しかし、あのデカいのを連れて動き回るのも難儀ではある。どこぞに良い隠れ場でもあればよいのだがな」

私が鼻を鳴らしながらパンケーキに齧りついていると、私の頭越しにトカゲのおつさ

んと鉄仮面さんが難しそうな話をしていた。二人とも背が高いからって、ちよつと失礼な状況じゃないですかねえ。

ちよつと不貞腐れていたら、二人に同時に頭に手を置かれた。やめろお！ セクハラで訴えるぞ！ 子供扱いされるのが悔しいのに、ちよつとうれいのが余計に悔しい。

結局その日は夜遅くまで宴会が続いた様だった。私は途中で酒場の二階の部屋で寝る様に言われて追い出されてしまったが、鉄仮面さんとトカゲのおっさんはずっと相談事をつけていたみいだった。

二階の個室は安宿らしく家具もベッドだけの質素な物だったが、シーツだけは天日で干されていたのか真っ白でふかふかだ。私は荷物と装備を部屋の隅に投げ捨てて、服を脱ぐのもそこそこに顔からダイブした。

最後の力を振り絞って、制服の上着とスカートをベッドの上でもぞもぞと脱いだけれど、それをどうにかする前に私は枕から顔を上げられなくなってしまった。

一人になった私は、それからだいたい遅くまで声を押し殺しながら泣いた。怖さと不安と怒りと、色々な感情が混ざり合っつて。でも周りに気が付かれたくも無かったから、必死に声を我慢して泣いたのだ。

次の日の朝、制服が皺になつてしまつてちよつと後悔した。次からはきつちり畳むかハンガーにかけてから寝よう。

制服に入れっぱなしだったスマホを手にとって、巨人に向けておはようとあいさつをする。巨人は起きていたのか、直ぐにチャットツールでおはようと挨拶を返して来た。うんうん、挨拶は大事だよね。

身支度を終えて一回に降りて来ると、昨日の騒動が嘘みたいに酒場の中はもぬけの殻で、椅子が全てテーブルの上に逆様に乗せてあった。カウンター席だけが元のままで、そこには皿を洗っている店主さんが居た。挨拶してから話を聞けば、掃除と洗い物を終らせたならこれから就寝するのだそうだ。そして朝から出かけるサルベイジャー目当ての屋台が出ているので、朝食はそこで食べられるとアドバイスも貰った。うん、凄い寡黙な人だけどやっぱいい人だな。

店の外に出で陽にあたりながらうーんと伸びをしていると、横合いから見知った奴に声を掛けられる。毎度おなじみのトカゲのおっさんだ。両手には、何やら紙に包まれたホットドッグみたいのを持っていた。

「トカゲじゃないドラゴニュートだ。ほれ、お前さんの分も買って来たぞ」

何時もの台詞と共に、袋の一つを手渡してくれる。トウモロコシの粉で作ったクレープに焼いたソーセージをチリソースと一緒に包んだ物だった。ソースがピリツとしていて、美味しい上に目が覚める。

って言うか、この世界って荒野なのに凄い食べ物がまともだなあ。この町には畑みた

いな物は見えないのに、一体この食料は何処から調達しているのだろうか。

「ああ、そりゃトレーダーが運んでくるんだよ。サルベイジャーが遺跡を荒らして遺物を発掘し、見つけた遺物をトレーダーが買い上げる。それから他所の町に売りに行つて、その帰り道に食べ物を買って来る。そんな風に、持ちつ持たれつやつておるのだ」

ふーん。遺物ってそんなに沢山見つかるものなのか？ 巨人が居た遺跡は取り尽くされたって感じだったけど、何時かは他の遺跡も取り尽しちゃうんじゃないか？

「そうだったらそうだったで、他の商いが生まれて行くものさ。少なくとも、今日明日で全ての遺物が取り尽くされるわけではあるまいて」

刹那的な世界なんだな。まあ、私が心配しても仕方ないか。金山とかも取り尽ししまったらそれまでだしな。無いなら他の物を探すのは普通の事だよな。

他の物か……。私は巨人と出会わなかったら、一体何をしていたんだろうな。

その後は、トカゲのおっさんと二人で宿を引き上げて、後回しにしていた食料品と水の買い付けに行った。日持ちする携帯食料や干し肉、干し野菜や豆の缶詰とかも色々。水はどうするのかと思つたら、デカイドラム缶で購入してトカゲのおっさんが背負う。改めて亜人って、私と体のつくりが違うんだと見せ付けられてしまった。

背囊と鞆まで持つとかなりの重量だが、まったく歩けないわけではない。巨人の所ま

で行けば乗って移動できるので、それまでの距離の辛抱だろう。この町に来る時は結構歩いたが、今回は開き直って町の近くまで来てもらうのでそれまでの辛抱である。

「おう、俺達は先に出るぜ。嬢ちゃんもトカゲの旦那も達者でな！」

「ヒヤツハー!! お元気でえ!!」×凄いいっぱい

町から出る際には、鉄仮面と愉快なモヒカン達が仕事場への出発ついでに見送りに来てくれた。鉄仮面さんはあの時の大型二輪車で、モヒカン達はホ口付きのトラックを数台に乗り込んで出発していく。最近見つかった実入りの良い遺跡に、全員で遠征しに行くのだそうだ。

それから私達も町を出て、荷物の重さにゼーゼー言いながら巨人の元に向かった。町から十分離れた所でスマホで巨人に迎えに来てもらい、何時もの様に肩の上に乗せてもらう。トカゲのおっさんは掌に載せて貰って、一緒に乗せたドラム缶や荷物類が落ちない様に見張るそうだ。巨人用の背負い袋とかがあれば、この子も楽になるのになあ。

そうして、巨人がトカゲのおっさんの指示した方向に向けて歩みを進めて行く。正確には、おっさんの話を聞いた私が巨人に頼むのだが。この子は絶対に、その辺りの融通を利かせてはくれなかった。

昨日は結局よしよししてあげられなかったから、私は肩に乗ったままで巨人の角に捕まって立ち上がる。そうして、手を伸ばして巨人の頬に触れて撫で撫でして上げた。昨



日は偉かったね、助けてくれてありがとうね、って。

すると、巨人の歩みが少しだけ早くなった。急な速度の変化に、掌の上でトカゲのおっさんがよろけて大慌てだ。

やっぱりこの子はただの機械の塊じゃない。意志があつて、そして私の行動に反応を示してくれる。なら、絶対に世界を破壊するような災厄になんてさせられない。

その為にも私も強くなろう。少なくとも、泣き虫は卒業しなくちゃいけないかもしれない。そんな事を考えながら、私は荒野の果てを見つめるのだった。

次回、第十話『そんなに入らない!』に続く。

## 第十話 『そんなに入らない!』

前回のあらすじ。

怒られるかと思ったら全力で宴会された。一泊してから旅立ちの準備。亜人は凄いい力持ちだと再確認した。お世話になった人達と別れて、新しい場所へと出発する。巨人の事を撫でながら、少しずつでも強くなつて行こうと改めて思った。

無尽の荒野を突き進む巨人の肩で、私は流れゆく景色を見ながら口笛を吹いていた。適当に頭に沸いたフレーズを口遊んだり、昔聞いた事のある音楽を空真似したりして。暇を潰すという目的もあるが、荒野と言えば口笛なのだ。古いゲームで良く流れていたから間違いない。

「お前さん……、本当に緊張感がまるで無いな。本来ならこんなおおびつらな場所で音を立てとつたら、ワシらを餌にするために怪物どもがうようよ寄つて来るのだぞ?」

え、何それ聞いてない。怪物つてこの間のでつかいミミズみたいな奴? うわあ、知らなかったとは言えとんでもない事をしでかしていた様だ。つて言うかももう街を出て三日経つてるのに、指摘遅くない!? とりあえず謝っておこう。トカゲのおっさん、ご

めんなさい。

「いや、ワシも今まで言わなかったしな。それにこの巨神が居れば、そうそう襲われる様な事は無かろうよ。あと、トカゲじゃないドラゴニユートだ」

はい、お約束頂きました。襲われないのなら、まあ退屈しのぎは続けても良いみたいだ。

それにしても、この世界はやつぱり人間には厳しい世界の様だ。夜眠る時も本来は見張りを立てたり、焚火を着けたまま短時間だけ仮眠をしたりして夜をやり過ぎすらい。私は本当に、巨人のおかげで楽が出来ているんだな。

それからも口笛をBGMにして、足音を響かせながら巨人が歩く。巨人の歩みはゆっくりだが、その巨体故に進行速度は下手なトラックよりも速い。徒歩なら何日掛るか分からない程の道も、比較にならない速度で安全に進む事が出来ていた。順調な旅路にはやがて、流れる景色に変化が訪れる。

「そう言えば、行先は説明したが、そこがどんな場所かはまだ話してなかったな」

周囲が背の高い岩に囲まれた渓谷に彩られる様になると、唐突に下からトカゲのおつさんが話しかけて来た。岩肌が剥き出しのその深い谷間の道を進みながら、私に対してのレクチャーが始まる。

私達が向かっているのは、出発した町の北にあると言う鉱山の町だった。元々は炭鉱夫が家族連れで身を寄せ合う小さな集落だったのだが、資源が豊富に取れる上に遺跡もいくつか近くに見つかって、あつと言う間に人が増えたらしい。

今では発掘された機械で大規模な掘削をする炭鉱夫と、遺跡目当てのサルベイジャーで賑わう、人の出入りの激しい町となっている。

人の出入りが激しいと言う事は、私達みたいな余所者が混じっても特に気にされないと言う事だ。ここで暫く情報収集と本格的な隠れ場所を探そうと言う事になった。トカゲのおっさんが鉄仮面さんとの相談の末に決めて、私もあとから聞いてそれを了承している。

本当は町の間を行き来するトレーダー達の為の大きな道があるらしいのだが、私達は敢えて大回りで迂回して渓谷を突っ切って進んでいた。途中で巨人を隠せそうな場所を探して、そこから更に徒歩で向かわなければならぬ。少し起伏がある地形なのでちよつとだけ気が重い、その辺りは仕方ないと諦めよう。

岩肌のちよつとした窪地を見つけたので、巨人にはまた両手両足を縮めた土偶みたいな待機モードになってもらう。その状態で首まで地面に埋まったのを確認すると、私達は町までの残りの道を徒歩で向かって行く。町にほど近いので危険な生き物には遭遇しないが、険しい道なので直ぐに疲労が溜まってなかなか進めない。結局、町に辿り着

いたのは、巨人を置いて行つた次の日の昼頃になつてしまった。

「ほれ、すっかりせんか。せつかく町に着いたんだ、寝るなら宿に着いてからにしたいだろう？」

うおおお……、足が痛い。背中も痛い。痛い所が見つからないぐらい痛い。正に半死半生と言つた様子で、私はトカゲのおっさんの背中を追いかけていた。荷物の背負つての山道ハイキングは、なかなか辛い物がありましたよ。

そんな苦難の道乗り越えて、辿り着いた町は私の疲労を吹き飛ばすに余りある様相を携えていた。一目見た感想はそう、正に穴倉だ。

その町は巨大な、本当に巨大な大岩に横穴を穿つて存在していた。その穴の中にへばりつく様にして、岸壁に足場を掛けて無数の採掘口が開いており、その周囲に大型の機械や小屋なんか配置されている。その採掘場の足元には町の中央を巨大な道が分断していて、その道の左右に沿つて例によつて豆腐ハウスがごちゃごちゃと乱雑に並んでいる。何て言うか、掘り過ぎて岩が崩れたらまるごと埋まりそうな造りの町だな。

もちろんそんな感想は沢山言われたらしいが、この町の住民の大半を占めるモグラの亜人はこう言つたそうだ。『元より穴を掘つてできた町だ。埋まつたらまた掘り返せば良い』と。

町に付いてまず真つ先にした事は、宿の確保だった。外からの人の出入りが激しいこ

の町には、当たり前前の事だが沢山の宿屋が営まれている。そんな無数の宿屋の中で、トカゲのおっさんが以前に利用した宿に行こうと言う事になったのだ。対して大きくは無く表通りにも面してはいないが、その分部屋の質と飯が美味いらしい。

飯が美味しいのは良い事だ。一も二も無く賛成して、その日は疲れを取る為に早々に休む事にした。この町は蒸気機関が発達しているので、お湯が豊富に使えるらしい。念願のお風呂にも入る事が出来て、私の疲れは次の日には綺麗さっぱり吹き飛んでしまった。

と、ここまでは良かったのだが。

「正直な話、お前さんにしてもらう事が無い。情報収集と言っても、ワシが顔なじみに会うか、酒場で話を聞けばいいだけだしな」

なんと言う事だ。ここにきて私にイベントが何も発生しないなんて。このストーリー進行、行き当たりばったりにも程があるんじゃないかなろうか。

とは言え、この町はそれ程治安が悪い方でも無いらしい。モグラの亜人の自警が行き届いていて、私一人で出歩いてもいきなり裏道に連れ込まれてあれこれされると言う事は無いそうだ。最終手段に巨人へのSOSもある事だし、少し大胆に動いても良いかもしれない。

せっかくなので私は、この機会にお金を稼ごうと思ひ至りました。

そんな訳でやってきたのは、町の掲示板に張り付けられていた日雇いの鉱石拾いのアルバイトの現場。そこに私は、マントを外して動きやすくなった格好でやって来た。

何でも、無数にある古い坑道でも、他所の採掘作業の影響で偶然新しい鉱脈に繋がる事もあるらしいので、取り残しを回収しつつ探索をしているのだそう。何しろ坑道自体数が多いとの事で、日雇い労働者を雇っての人海戦術なのだそう。

日当は低めだが、その分珍しい物を見つければ歩合制で増額もあるらしい。要するに、金が欲しければ頑張れと言う事だ。体力も付けたいし、とにかくコツコツと取り組もう。

しかし、私以外の作業員は殆どが子供ばかりだな。おまけにそんな子供達の方が次々に鉱石の欠片などを見つけ出して、一人だけ大きいのに手間取っている私はなんだかとても恥ずかしい。

くっ、負けてなるものか。私は今日の日当で、トカゲのおっさんに酒の一杯でも奢ってやると決めたのだ。

「ねーちゃん、俺達よりデカいくせにのろまだなー。俺達がお手本見せてやるよ」

私のもたつき具合を見かねたのか、子供達が声を掛けて来てからかい半分に仕事を教えてくれた。悔しいけど有り難い。年下の先輩達、よろしく願います！

そんなこんなで、子供達と仲良くなつてしまつた。トカゲのおっさんの情報収集も一日では終わらなかつたので、私のアルバイト生活もしばらく続く事になる。

酒を奢つた時はトカゲのおっさん、ちよつと驚いた後に照れくさそうにしてたな。あの顔を見ただけでも疲れた甲斐があつたと言う物だ。

知り合つた子供達はもう何度もこのアルバイトをしているらしくて、良く鉱石の取れる穴場みたいのを教えてくれたりもした。中身を空にして持つて来た私の背囊が、『やめて、そんなに入らない!』つて位になるまでパンパンに膨らむ日もあつた。どうもこの子供達は、私を荷物持ちにする算段で声を掛けて来たらしい。子供が持つて帰れる鉱石量には限りがあつて、そんな時に見つけた私はとても都合が良かったのだろう。

でもまあ、動機はともかく世話になつた事には違いない。あの子供達には感謝の念しかわかかなかつた。今度お菓子の一つでも配つてやろう。

そんな日々を過ごしていたある日。一際古い坑道を漁つていた私と子供達は、不自然に崩れた横穴を発見する。これが話に聞いた、新しい鉱脈と言う奴だろうか。報酬の増額の可能性に色めき立つ子供達だが、私はその横穴の先に何か嫌なものが潜んでいる様な気がしてならなかつた。

根拠のない感覚だけの物だつたが、その予感直ぐに的中する事になる。



次回、第十一話『奥まで来てる!』に続く。

## 第十一話『奥まで来てる!』

前回のあらすじ。

荒野で口笛を吹くと化け物が寄つて来るらしい。巨人に乗つて次の町へ辿り着くも、時間が空いてしまったのでアルバイトをする事に。体力づくりの為に奮闘している、アルバイト仲間の子供達と仲良くなった。その子供達と古い坑道を探索して居たら、何やら不穏な気配を感じる新たな鉱脈を見つけてしまう。

一際古い坑道の中で見つけた、新たに現れたと思わしき横穴。とりあえず報告に戻ろうかと思つたが、子供達は中を少し探つてからにしようと思案して来た。一部の子供達——男の子達は一樣に、報酬のさらなる増加に目をきらつかせている。後は、未知への好奇心と冒険心もあるのだろう。

確かに未知の坑道ならさぞ珍しい物が取れる筈だ。けれど、何があるか分からないから危険すぎると、私と女の子達はその意見に待ったをかける。すると反対された彼らは、それなら男だけで行つて来ると言い出して、静止を振り切つて勝手に飛び込んでしまった。危険に男も女もあるものか。ああもう、やんちゃなんだから!

残った女の子達に大人を呼んで来る様に伝えて、私も覚悟を決めて横穴に飛び込んだ。

横穴の中は思ったよりも狭い。子供なら楽に通れるかもしれないが、こっちはこれでも色々大きいんだぞ。

苦勞しながら狭い道を抜けると、少しだけ広い空間に出る事が出来た。洞窟と言うよりは、人の手が加わった坑道の様に見える。別の古い坑道に繋がっただけだったのだろうか、それなら報酬は残念だが危険は少ないだろう。

「あ、ねーちゃんも来たのか！　おーい、こつち来てこつち！　凄いもの見つけちゃったんだよ!!」

私のお目当ての子供達は直ぐに見つかった。と言うよりも、慌てて私の方に戻ってきたようだ。一体何を慌てているんだか、子供達は私の手を引つ張つて奥に連れて行くこうとして来る。なんだなんだ、何なんだ全く。

手を引かれて連れて来られた坑道の奥には、もう完全に人工物だと分かる巨大な扉の様なものがあった。何だこれは、何かの倉庫にでも繋がってしまったのだろうか。

「遺跡だよ遺跡！　俺達遺跡を見つけたんだよ！　鉱石なんかよりずっとすげえやー!」

なんとこれは遺跡の扉らしい。ずいぶん立派な門構えでいらつしやること。と言う事は、これはもう専門家のサルベイジャーに任せるべきであろう。こう言う未発見の遺

跡には、それを守ってる危険なガーディアンとかが付き物だし。

「ええっ!? こゝこまで来て帰るのかよ! どうせなら中まで調べて行こうぜ! 俺達が遺跡に一番乗りできるんだぜ!」

等と子供達は口をそろえて言ってくる始末。君達の溢れ出る冒険心は大変素晴らしい物だが、私以下の装備で冒険に挑むとは笑止千万だ。私だってナイフとスタンングレネードしか持ってないと言うのに。

第一、こんなに立派な扉ががちり閉じていると言うのに、どうやって中に入ろうと言うのだろうか。ほら、取っ手もないし開け様がないじゃないか。私は納得させるためにペタペタと扉を触って見せた。

そして無情にも開いてしまう未知への扉。なんで!? ただ触っただけなのになんて開いちやうの!?

「俺達が触っても何にも起きなかったのに……、実はねーちゃんってスゲエのか!? 胸は全然ないのに!」

ないない、そんな訳ない、胸も無い。ってやかましいわ!!

可能性があるとするば……、あつと気が付いて私は制服の胸ポケットからスマホを取り出した。もしかしたら、スマホ越しに巨人が何かしたのだろうか。そう思って画面を起動すると同時に、着信音と共にチャットツールが起動する。そこに書かれていたのは

『奥に居る』との一言。やはりこやつが犯人か。後でお説教です。

一体全体何が居るかは知らないが、やっぱりここは戻っておいた方が良いだろう。私一人じゃこの子達どころか、自分の身すら守れるか怪しい。後でアイス奢ってあげるから、お願いだから外に出ようよ少年達。

「やだよ！ 戻りたいならねーちゃん一人で戻ってな!!」

なんと言う事か、子供達は開いた扉から遺跡の中に入り込んでしまった。あああああ、もう！ 本当にもう！ 巨人の教育の為にも、悪ガキは全員とつちめて泣かす!!

既に見えなくなってしまうた子供達を追いかけるべく、私もまた遺跡の中に突入する。

遺跡の中は予想とは全く違つて明かりが灯っていた。どうにも、人が通るのに合わせでセンサーで照明が点く様だ。相当に技術力が高い、しかも電力が生きている遺跡。このせいで少年達の暴走が止まらないどころか加速している。これが後戻りのできない青春か。

こんな生き生きしている遺跡、どんな防衛機構があるか分からないのに、もう既にこんな奥まで来てる！ こうなったら可哀想だけど、心を鬼にしても止めるしかない！ この世界に来てから散々酷使しているローファーに更に鞭を入れて、私はあの初めてこの世界に来た日の様に全力で走り始めた。うおおおおお！ 今回の給料が出たら新

しい靴を買ってやるううううっ!!

大の大人を突き放した走りを繰り出して、すばしっこい子供達を次々と捕まえて行く。一人、二人、三人! 捕まえた先から頭を鉄拳制裁。巨人もスマホ越しに見ていさない、悪い事した子はこうなるって事を。

幸いな事にここまではほぼ一本道。ゲンコツを食らって涙目になった子供達は、私の本気で怒っているのを感じてか戻る様に言うと言素直に従ってくれた。

残るはあと一人。私に最初に話しかけてくれた、子供達のまとめ役のリーダーの子だ。活動的で一番年長なのもあって、正直捕まえるのは至難だろう。でも、こんな場所で怪我しても良い様な子じゃないのは確かだ。私は自分に活を入れて、更に遺跡の奥に向かつて駆け出した。

「うげっ!? もう追い付いてきたのかよ!? って、顔こわっ!」

最後の一人を見つけた! っしやあ!! そこ動くなよ、今なら一発で許してやる!!

やっと追いついた先で、リーダーの子は通路の脇の部屋を物色しようとしていた。私が入ると部屋に入るのを諦めて、更に奥に向かつて駆け出して行く。確かに足が速いが、このタイミングなら逃がしはしない!

今までずっと最高速で走り続けてきた私は、加速前のリーダーの子に追いつく。その襟首に手を伸ばし、掴んだ!!

「ちよつ、離せつて、うわあつ!!」

リーダーの子がバランスを崩して転びかけてしまった。それを支えようとして襟を掴む手を引いたが、力が足りずに引つ張られてしまう。せめて怪我をさせない様にと、頭を抱き寄せて私は肩から床に倒れ込んだ。

うあー……、いったあ……。こんなに痛い思いをしたのは、テストで赤点三つ取った時以来かな。あれは痛かった……。主に心が。あと物理的に頭も。

ちよつと直ぐには動く気になれなくて、ごろりと床に転がり抱えていた子を開放する。

「いつててて……。なにす——おい!? 大丈夫か? 怪我したのか……?」

何だいつちよ前に心配してんのか? 困つてた時に声かけてくれたのと言い、やつぱりこの子は優しいなあ。とりあえず、リーダーの子に怪我はない様で安心したよ。

どうもこつちに怪我をさせたと思つて落ち込んでしまったようなので、ちよつとズルい気もするが利用させてもらおう。ずいぶんとしおらしくなつてしまつたリーダーの子に、このまま来た道を戻つて大人を連れてきてほしいと頼んだ。全身が痛いのは本当だしね。

「わかつた! 助けを呼んで来るから待つてろよ!」

実に素直に來た道走り抜けていくリーダーの子。どうせならその素直さ、最初から

發揮してほしかったよ。あー、疲れた。もう助けが来るまで、このままごろごろしていい。

私の胸元でスマホが震える。ああ、そう言えば此処に入れるようにしたのはこの子だったね。取り出して画面を見てみると、此処にいる、此処にいる、と同じメッセージが連投されていた。一体、何が居ると言うのだろうか。

痛む体を何とか引き起こして、立ち上がれるか確認しながらゆつくりと身体を床から離して行く。うん、大丈夫。走れるかは怪しいけど、壁伝いに歩く位は出来る。

そのまま壁に手を突いて支えながら、一歩ずつ奥に向かって廊下を進む。

暫く進んだ先で、入り口で見かけたよりも更に重厚な扉にぶつかつた。まるで何か大切な物を守ると言うよりも、内側の物を二度と日の目に晒すものかと言うような執念すら感じる堅牢さだ。

この扉にも取っ手や、パネルの様な物は無い。無言のままスマホを取り出して、物は試しと扉の前に翳してみた。

はたして、扉は何の抵抗も無くあつけなく解錠を始めた。何本も扉に通っていた門の様な物が外れて、内側から外開きに分厚い扉が開いて行く。鬼が出るか蛇が出るか。ここまで来たら、うちの子を信じて顔を拝んでやろうじゃないか。

扉の中に恐る恐る入り込むと、そこは天井の高い倉庫の様な一室だった。恐らく巨人



が見せたかった物は、今私の目の前に鎮座している。部屋の奥の壁に供えられた、まるで玉座の様に見える機械に座る巨大な人型の物体。

なんて事だ、私はこの世界に来て二体目の巨神に、こんな所で出会ってしまった様だ。

次回、第十二話『精が出ますね!』に続く

## 第十二話『精が出ますね!』

前回のあらすじ。

横穴に男の子達が入ってしまったので追いかけた。追いかけた先で遺跡を見つかるも、暴走した男の子達は遺跡の中にまで入ってしまう。久々に本気を出して走って追いかけて、全員捕まえるも少し体を痛めてしまった。それでもスマホ越しに巨人にせがまれて、遺跡の最奥へと向かう。辿り着いた巨大な扉の先には、部屋を埋め尽くすほどの巨大な人型が鎮座していた。

倉庫の様に広く天井の高いその一室には、複雑に機械がより合わさった玉座に座る一体の人型。遠目に見てもその人型の放つ威圧感はすさまじく、やはりその体は立ち上がればゆうに天井へ届くだろう巨体であった。

スマホ越しの巨人に導かれ、遺跡の奥で見つけてしまった二体目の巨神。その姿はどことなく私の巨人——クロノスよりも単調化されている。全体的にのっぺりとしたデザインで、腕は極端に長いのに足は極端に短い。顔などは赤い大きな単眼が真ん中に一つあるだけで、釣り鐘型の胴体には際立った装飾なども無い。人に程近い私の巨人に比

べると、この巨神は何処か玩具の人形のようにも見えた。

そんな風に巨神を観察していると、手に持ったままだったスマホが震え出し着信音が長く奏でられる。この世界に来てからは圏外だったというのに、メッセージ送信の次は電話がかかってくるとは。画面に表示された通話のボタンに指を置き、スライドさせてからスマホを耳に当てた。

『おひさしぶり。そして初めまして、今代の操り人さん』

聞こえて来た声は、何とも意外な事に女性の声であった。声を聴きながら思わず視線を上げて、鎮座している二体目の巨神の顔を見てしまう。光沢のある丸い単眼が、その奥で光を走らせたように見えた。

『三千年……。いえ、六千年の遙か時の彼方から、私は待つていました』

スマホからの音声は抑揚は少ないが、人が発している様にも聞こえる合成の音声だった。人の声を加工して作られた合成音声は、元の世界でも企業やサブカルチャーで広く普及されていた。まさか異世界でも似た様な物が聞けるとは思っていなかったが。

聞くだけならば非常に落ち着いた女性の声色で、目の前の巨神はついに己の名を明かすのだった。

『私の名はヘステイア。十七歳です』

……いや嘘つけ、さつき六千年って自分で言ってたじゃん。六千十七歳

だつてか? 鯖読み過ぎだろ。つて言うか何でギャグを挟んだ!? 今までのシリアスな空気は何処に行つた!!

『あら、もしかして今は伝わってないのかしら。昔流行つていたジョークですのに。これがジエネレーションギャップと言う物なのです』

なんか頭痛くなつてきた。身体も痛いし頭も痛いとか、良い所が何にも無いじゃないか。

もう今までの緊張感とか全部吹き飛んで、ゆかに座り込んで足を投げ出す。もー、うちの子はこんな所にまで誘導して、こんなギャグを聞かせたかっただらうか。

『では、少し真面目なお話をしましょうか。このままだと、あと十年もしない内に世界は滅びます』

また偉く大きなことを言い始めたな。今のが冗談だつたら、うちの子を此処に連れて来てパンチしてもらうぞ。

割と本気で言つた言葉に、電話先の相手はクスクスと嬉しげに笑う。このやろう、どこまで本気なんだか。そして電話の相手は更にとんでもない事を言い始めた。

『本当に冗談だつたら私も嬉しかつただけれど、もうあまり時間が無いから要点だけを話しますね。今の世界の文明が一定の領域を超えた時、私達の姉弟のうちの一人が目を覚まします。その姉弟は過度に文明を栄えさせた人類に対して、直ぐに肅清を始める

でしょう。三千年前、自らを産み育てた文明を滅ぼしたように」

ちよつとまって、その話ってどこかで聞いた事がある。トカゲのおっさんが初めて会った時に話してくれた、私の巨人——クロノスの過去の話じゃないか。それならもう目覚めてる。それに、今は災厄にならない様に育ててる途中。それが十年後に破滅を迎えるだなんて不吉な事を言ってくれる。

『あら、クロノス？ でもこのコードは……。あらあら、あらあらあらあら？ なるほど、そう言う事なのね……。』

ああうん、止めてくれないかな、その『全部知ってる系キャラが自分だけ納得してこっちには何にも知らせてくれない』的なムーブは。漫画のキャラがやっていると面白かったけど、実際に自分がやられるとすっぱームカつくのな。

こっちの反応が面白いのか、電話越しの声は隠しても隠し切れない忍び笑いを零している。スマホを操作して通話を切ってやろうと思ったが、その前に声色が少しだけ悲しげなものに変わった。

『ごめんなさいね。こうして誰かと話すのも何時以来かしら、とにかく久し振りではしゃいでしまったわ。なにせ、三千年ぶりですからね……。』

むう、そんな事を言われたら怒りが引つ込んでしまう。三千年も独りぼっちだったのなら、少しは優しくしておいてやろうか。

『まあ、その殆どはスリープモードで眠っていたから、寂しさとか感じてないんですけどね。ウフフフフツ……!』

あ、わかったあ! こいつ喧嘩売ってるんだな! そうなんだろう!?

がなり立てるが電話の声は調子を変えない。上機嫌なのか、声に弾みが掛かっている。まるで、ようやくと望んでいた物を得た様な、それで居て懐かしい思い出に浸る様な不思議な声色だ。

『今代の操り人は面白い方ですね。貰った情報通り……。そう、この方がお母様なら……。『貴女のクロノス』は健やかに育ってくれるでしょう』

それに関しては全力で当たるつもりだ。言われずとも、あの子の母親になるって決めたんだ。絶対に災厄になんてさせないし、それが無くたってあの子を放り出すつもりなんてもう欠片も無い。何て言うか、あの子を見ていたら、胸の奥から温かい物が湧き出て来るんだ。これがきつと母性本能って奴なんだろう。

『………………。一方的なお願ひになります、私の姉弟を探してください。文明の破壊者である姉弟を探す為には、他の姉弟達の持つ情報が不可欠でしょう。三千年この場所であつて動かさなかった私よりも、他の姉弟は文明の破壊者である弟について知っている筈です』

弟……。ちなみにその姉弟って言うのは後何人居るんだい? それによつて、今後の活動が凄い大変な事になりそうなんだけれども。

『私と貴女のクロノスを除いて五体ですね。各地に散らばって居て、私が居場所を知っているのは一人だけ……。此処より東に進んだ地に、あの子の眠る棺——あなた達の言う遺跡があります。巨神を連れたい貴女なら、その遺跡に入る事が出来るでしょう』

結構多いな!? こんなでつかい巨神をあと五体も作つてるとか、古代人はどれだけ暇だったんだよ! 自分達を滅ぼす事になる存在をせこそせこと作り上げるとか、ご苦労様です精が出ますね!

全部で七体の巨神を探し出せと言われてれば、つつい罵倒が出ても仕方がないと思う。おまけに当たりが何処に居るかもわからないと来た。本当に頭が痛いお願いだよ。

『名残惜しいですがそろそろ時間ですね。姉弟の内最初の実験機として生まれた私は、動力炉に欠陥を抱えています。次に眠れば、目覚めるには膨大な時を必要とするでしょう』

えっ、ちよっ!? それ聞いてない! 何でそんな大事な事を先に言わないんだよ。こ言ううのは些細なすれ違いとから、重大な事件に発展したりするのがお約束だろ。もつと詳細に話を聞かないときつと大変な事になるぞ。

『六千年前の文明を滅ぼしたのはクロノス……。三千年前に再び世界を破壊したのはその子供……。三千年前の文明人達が過去の遺産から再生させた末の弟です』

トカゲのおっさんは数千年ごとにリセットされているって言ってたけど、そのリセッ

トの全てを私の巨人がしていたわけじゃないのか……。って言うか子供!! 私の子供に子供が居た!? 孫って事!?

慌てるこちらとは対照的に、電話の声は酷く落ち着いた、けれど優しさを伴った声で語り掛けて来る。しかし、その声にはノイズが混じり、不鮮明になり始めていた。本当に時間が無い様だ。

『文明の破壊者、その名はゼウス。私たち姉弟の末の弟にして、最強の性能を誇る後期完成型です。どうか、この子を止めてあげてください。貴女と、そして貴女のクロノスならば出来る筈です』

語りたいたい事を語り切ったのか、電話の先からまるで人間みたいふうと溜息を吐くのが聞こえた。目の前の巨大な機会が話しているというのに、妙に人間臭い所がある。だからだろうか、その声には疲れの様な物を感じ取る事が出来た。

『時間です。今のうちに謝っておきますね。ごめんなさい。沢山苦勞をすすると思いましたが、これから先を貴女に託します。ああ……。次に目覚める時は……。誰かにおはようって言うてもらいたいですね……。』

それきり、声は聞こえなくなり、目の前の人型の単眼から光が消える。私は、名残惜しさを感じながら通話を切って、スマホを胸ポケットへと戻した。

もうここには用は無いだろう。眠りの邪魔をしたくないから、さっさと町に帰ろうと



踵を返す。

ちくししょう。おはようぐらい、言っつてやればよかつた。

次回、第十三話『モサモサしてる！』に続く。

## 第十三話『モサモサしてる!』

前回のあらすじ

未発掘の遺跡の最奥で見つけた、二体目の巨神はヘステイアと名乗った。彼女は過去の災厄に付いて語り、そしてその災厄を再び起こさんとする姉弟の存在を止めて欲しいと頼んで来る。願いを聞き届けられて安堵した二体目の巨神は、次はおはようと言われないと零しながら眠りについて行った。

一面は鬱蒼と生い茂る森。メキメキシミシと木々をなぎ倒しながら、そんな森の中を巨人が突き進んでいた。

驚くべきはその木々の高さだろう。巨人が日陰に入る程に、周囲の木々達は大きく太い。はつきり言えば、異常な植物の発達具合だった。

最初の方こそこの世界に来て初めて見る濃い緑の景色に、『森林浴が出来る!』『木があるなら木の実とか取れないかな!』『地平線の果てまで木の葉がモサモサしてる!』とかはしゃいでいたのだが……。そんなテンションも高い湿度と、頭が痛くなる様な匂いの洪水で吹き飛んでしまった。今はもう、早くこの森林の中で目当ての物が見つかって

くれるのを祈るばかりだ。

あの日、二体目の巨神に出会って、そして眠りにつくのを見送った日。あれからもう既に一週間が経っていた。

這う這うの体で遺跡の入り口まで戻って来ると、狭い横穴を掘り広げてモグラの亜人達が遺跡前の坑道に丁度到着しており、私は直ぐに救助される事となる。

その後はもう、とにかく怒られた。アルバイトを統括してた現場監督にはもちろんの事。話を聞きつけてやって来たトカゲのおっさんにまで、こつぴどく怒られた。もちろん子供達も一緒にだ。

子供達を助けに行くまでは良いが、碌な戦力も無いのは私も同じ。その上で深入りしたのは、確かに誉められた事では無かっただろう。でも、子供達の見てる前でゲンコツはやめてほしかったなあ。恥ずかしい……。

その後は、見聞きした事をトカゲのおっさんと共有して、しつかり準備をしてから鉾山の町の東へと旅に出た。せつかく子供達と仲良くなれたけど、こればかりは仕方ないよね。その代り、出発までの間は色々と買い物とかに行つて遊ぶ事が出来た。また今度立ち寄る事があれば、もう一度一緒に遊びたい物だ。

ちなみに、トカゲのおっさんは二体目の巨神に会えなかった事にガチでへこんでいた。遺跡の最奥の部屋は再び固く閉ざされて、スマホをかざしても開かなかったのだか

ら仕方ないだろう。

そう言えば、あのアルバイトをしてた子供達は皆ヒューマンだったな。亜人の子供は身体能力が高くて、もっと危険な採掘にも行けるけど、ヒューマンの子供はああ言った余り物拾いに回されるらしい。

やっぱりこの世界は、ただのヒューマンには厳しい環境なんだなあ。

そしてその厳しい環境を、今こうして味わっている。

とにかく湿度が高くて暑い。何もしていなくてもじつとりと汗が染みだして来て、服が肌に張り付いて不快感が堪らない。そのくせ薄着をしよう物なら、容赦なく柔肌を虫やら木葉やらが狙って来ると言う。しかもその虫がやたらとデカイ。もう、何度巨人で辺り一面を薙ぎ払ってやろうかと思つた事か。

それにしても、荒野が突然森林に切り替わるとはどういう事なのだろう。まるで切つて張り付けたかのように、突然景色が緑一色に切り替わる光景はなかなか奇妙だった。荒野との境界線に草原すらなくいきなり森。しかも熱帯雨林めいた密林だ。トカゲのおっさんも、どうしてこうなっているのかは分からないと語っていた。

ともかくにも、炭鉱の町から東に進んでぶつかつた奇妙な森なのだ。ここに未踏の遺跡の一つでもあるならば、それは間違いなく次の巨神の棺に違いはないだろう。なぜ棺と呼ぶのかは分からないが。その理由は中に居る奴にでも聞けばいいだろう。

とにかく、今は巨人が前の様に次の巨神を見つけ出すまで、木々をなぎ倒してでも先に進み続ける事しか出来ない。とにかく、とにかく先へ……。

「よし、今日はここまでだ、巨人を止めてくれ」

巨人の掌に乗って荷物の番をしていたトカゲのおっさんが、不意に上を向いて声を上げる。巨人の肩からそれを見下ろして、反論しようとした所で知らず息が上がっていた事に気が付いた。知らず知らずの内に、暑さで体力を持って行かれていた様だ。

「巨人を座らせて壁になってもらおう。それから、今回は焚火を二つ作るぞ」

言われたとおりに巨人を座らせて、足の間にスペースを作らせそこに荷物を降ろさせる。私が巨人に手伝ってもらって地面に降りる頃には、トカゲのおっさんは荷物を解いて野営の準備を始めていた。

手伝うと言ったら、焚火に火を点けてくれと言われたので言われたとおりにナイフとスターターを使い火を起こして行く。ナイフの背を金属の棒で擦り、火花を散らして着火剤の木屑を燻らせるのだ。そこから順々に大きな物へ移して火を大きくしていく。持つて来た薪はしっかり乾いていて良く燃えてくれた。

トカゲのおっさんは少し離れた巨人の足先の方で、私が火を点けている物よりも大きな焚火を作っていた。そこらへんに生える背の低い木を伐採して、乾いても無いのに燃料としてくべてしまう。そんな事をすれば当然煙が沢山出るのがお構いなしだ。

戻って来た時に聞いたら、虫よけの為らしい。虫の嫌がる匂いが出る薬品も、一緒に燃しているのだそうだ。

ちよつと煙いけど、ようやく人心地付けた気がする。おのれ虫め……。

小さい焚火の火が落ち着いたところ合いに、三脚を使ってお湯を沸かしてお茶を淹れてくれた。ずずずつと啜ると、体の中に染みる様で思わす溜息が出てしまう。

スマホを見れば時間はもう夕刻に差し掛かっていた。森の木々のせいで薄暗いので、昼夜の区別すらあいまいだった様だ。森に入ったのは昼過ぎだから、そりゃ疲れる筈か。迷惑かけたな、トカゲのおっさん。

「トカゲじゃないドラゴニユートだ。体力が落ちている時は冷たい物は摂るなよ。飲んだらカップは水筒の水で濯いで、それから布で良く拭いておけ。ここの湿度だと放置しても乾かんだろうからな」

流石自称考古学者。湿地帯の経験もあるようだ。先達の知恵袋は実にありがたい物である。

虫よけの効果が出てのんびりとお茶を飲み干せた私は、言われた通り金属のカップを濯いで拭いてから背囊に戻す。そのついでに、中から一冊の本を取り出した。鉾山の町で稼いだお金で買った、複数のお話を纏めた絵本だ。

常々思っていた事なのだが、私は本当に母親らしい事が出来ているのか自信が無い。

子は親の背を見て育つと言うが、私がやっているのは主に指図ぐらいではないだろうか。そんな考えを持つている時に、思いついたのがこの絵本だった。

私もかつては親にお話を読み聞かされたものだ。ならばそれを受け継いでみようと考え、数日前から寝る前に読み聞かせている。喜んでいいのかは分からないが、読んでいるとスマホの着信で続きをせがまれるので嫌ではないのだろう。

幾つかの話が纏められているので、お得感満載のこの絵本。この世界で紙の本が売られているのにも驚いたが、その内容がどこかで聞いた事がある様な物が多くて私も楽しんでしまう。ヒューマンの男の子が犬と猿と鳥の巫人と共に、食人鬼に挑む話とかそのまんま桃太郎じゃないか。ちよつとサイバーパンク調になつてるけど。きつと、私のお他にもこの世界に来た日本人が伝えたのだろう。日本語の件と言い、ずいぶんと浸透している物だ。

今日読む事になった物語はとある神様のお話。とある予言で生まれてくる子に権力を奪われると吹きこまれ、それを真に受けて生まれる子供を次々に喰らつた大喰らいの神。幾度も幾度も我が子を飲み込んで、しかし最後の一人の時には騙されて石を飲み込んでしまう。隠されて育てられた末の子は、やがて大きく育ち大喰らいの神を討つたという。

この話をなぜか巨人は気に入っていた。正直、権力欲しさに我が子を食べちゃう親な

んで、最低最悪だと思っただけだ。何処にこの子を引き付ける魅力があったのだろうか、私にはとんと分らない。でも、お気に入りだと言うのなら、はい喜んでと読んであげるのが親の道だろう。良く分らないけどきつとそうだ。

そんな風に、疲れた体を休めながら親子の時間を楽しんでいた時、それらは唐突にやって来た。

「酷い有り様だな。他所のテリトリーに侵入して、辺りにこんな匂いを撒き散らすとは」  
耳朶を揺らす凜とした声。本を読む為には巨人の肩にもう一度乗っていた私の隣に、それを発した者はいつの間にか音も無く立っていた。あまりの気配の無さに、全身がゾクリと震える。私はともかく、巨人も気が付かなかつたなんて。

「おっと、この巨神を暴れさせるのはご勘弁願いたい。羽虫の様に潰されるのは御免だ。既に竜人はこちらの仲間が掌握している。無駄に抵抗はしないでほしい」

絵本読んでる間やけに静かだと思ったら、私より先に捕まってるのかよトカゲのおっさん！ 前に捕まりそうになった時は颯爽と助けてくれたのに、今回ちよつとだらしないですかねえ……。

恐る恐る、声を掛けてきた相手に視線を向けて行く。足先からゆつくりと身体を観察し、最後に顔をしっかりと見て相手を認識する。そこに見えたのは、虫だ。

逆三角形の形をした頭に、その半分はあるんじゃないかと言う二つの複眼。長い二本



の触角が生えた額に、三つある単眼やマスクに見える口元。身体は衣服などを纏っておらず、皮膚自体が硬質でまるで鎧を着ているかのようだった。体つきも人間とは別の骨格で節くれだち、人で言う胸部には第三第四の短い腕がある。一番違いがあるのは虫のお腹に当たる部分が、人で言うお尻に付いている事だろう。まるで野太い尻尾のようにも見える。

はつきり言つて、直立二足歩行している以外はほぼ虫と変わらない姿であつた。超怖い。

「お前達にはこのまま、我々の住処まで来てもらう。そこで、お前達の事を待ち望んでいる方がいらつしやるのだ」

良くは分からないが、今直ぐにどうこうされる事は無いらしい。敬つた言い方から察するに、余程身分の高い人物に会わせられるのだろうか。見た目からして虫っぽしい、女王とかが居るのかも知れない。ああ、なんて言うか、この世界に来て今までで一番ピンチかも知れない。

そんな事を緊張しつつ考えていたら、最初に居た虫人の隣にブーンと他の虫人が降り立った。すげえ、人間サイズで飛べるのか。

私が見ている前で、新たに表れた虫人は若干困惑した様に仲間にも声を掛ける。

「ご報告します……。下の竜人がこちらの娘に伝言を伝えてくれれば、自分は大人しく

連行されると申しております」

「なに……………? 構わん、このまま伝えろ」

「はっ、竜人はただ一言、『トカゲじゃないドラゴニユートだ』と伝えろと……………」

「……………? 何かの符丁か……………」

おい、やめろ。こっちに不審そうな目を向けるんじゃない。この誤解を私が解かないといけないのか? トカゲ扱いが不審だったから言っただけだと、初対面なら意味不明な理由を説明しろと? って言うか、何でこのタイミング!?

おのれ、覚えていろよトカゲ野郎。いつか目に物見せてやる。

次回、第十四話『すんごい長い!』に続く。

## 第十四話 『すつごい長い!』

前回のあらすじ。

荒野の真つただ中に突然現れた熱帯雨林。巨人よりも背の高い木儀を掻き分けて内部に侵入すると暑さでダウン寸前になってしまう。トカゲのおっさんの提案でその日はもう休む事に決めて、巨人の肩で最近の日課の絵本の朗読をする。その最中、突如現れた虫人にたちまち拘束されてしまう。最後に、トカゲのおっさんの無駄な根性のせいで、弁解に困る事態に陥ってしまった。絶対に許さんぞ。

特に縛られてはいないけれど、連行されてきた場所は森の奥の一際巨大な大樹の近くであった。幹の太さも尋常では無く、まるで高層ビルの様だ。特にその高さなど、上方が霞んで見える程である。そして驚いた事に、その大樹には無数の窓や出入り口が設置されていた。これは虫人達の住処——いや、町なのかもしれない。

「止まるな、あのお方がいらっしやる神殿は地下にある。中までは案内する、着いて来い」

立ち止まってついつい大樹を見上げていると、先頭を歩いていた虫人がわざわざ振り

返って言って来る。最初に私の目の前に現れたのと同じ虫人だ。肉食的な見た目なのに、意外と知的と言うか実に理性的。なんかこう言うのを何処かで見た事がある様な……。

ああ! 仮面な二輪車乗り!! そうだよ、あれにそっくりなんだ! あー、納得したあ……。

「竜人よ……。このヒューマンの雌はその……、色々大丈夫なのか?」

「なに、気にするな。どうせ大したことは考えておらんよ。それとお主は良く分かつておるな、そうだワシはトカゲじゃないドラゴニュートだ」

ひとしきり満足感から帰って来ると、虫人とトカゲのおっさんが大したことない事を話し合っている。まったく、男って生き物はどの種族でもアレだな。とってもアレだ。どの世界でも変わらないな。

見上げてても天辺が見えない様な大樹の根元。そこには辛うじて人工物の様な物が見えた。四角い建物が大樹の根元で囲まれており、半分ほどが大樹の重さの為か地面に沈み込んでいる。恐らくはこの建物が支えているおかげで、この大樹は天高くまで枝葉を伸ばす事が出来たのだろう。

その半地下状態になった建物の出入り口に案内され、通された内部は炭鉱の町で見た遺跡にそっくりだった。電灯の明るさが絞られている以外は、床も壁も殆ど同じ物と

言つて良いだろう。

「( )は……、『生きている遺跡』か。素晴らしい！」

遺跡の中に入るなり、トカゲのおっさんが尻尾を振りながら声を震わせている。前の遺跡では結局巨神に会えずに落ち込んでいたが、遺跡自体に入れた事は喜んでいたしな。この自称考古学者は、やっぱり遺跡に入れる事自体が嬉しいのだろう。

だが、今はゆっくり観光をしている場合では無いらしい。前後を挟んでいる虫人達が、遺跡の奥に向かう様に促して来る。物腰は穏便なのに、有無を言わせない圧力があつた。今は従う他ないだろう。

鉦山の町に在つた遺跡と程近い内装の遺跡の中を、縦一列になつて進んで行く。すると、門の幾つも入つた重厚な扉が、すでに開け放たれている姿に出会つた。この遺跡は最奥までが解放されて居るらしい。

だとすれば、この扉の先に居るのは――

「巨神か！」

トカゲのおっさんが声を荒ぶらせて駆け出し、先頭の虫人に腕で止められる。感情とはおよそ無縁な複眼だが、そこに込められた意志は見ていれば分かる。ここでの狼藉は許さないと言う、殺気めいた怒りが放たれていた。

そんなに残念だったのか、おっさんの尻尾がしおれている。頼むからこいつらを刺激

する様な事はしないで欲しい。本当にアレだな。遺跡の事になると子供っぽいなこやつは。

扉を潜って部屋の中に入ると、そこはやはり倉庫の様に天井が高く、幅と奥行きも大きく広かった。見れば見る程炭鉱の町の遺跡とそっくりだ。異彩があるとすれば、部屋のそこかしこに木材で作られた人形や木彫りのレリーフ、草花で編まれたリース等が飾られている事だろうか。恐らくは、虫人達の手による物だろう。

そして当然、視線は部屋の奥に自然と吸い込まれる。複雑な機械の寄り集まった玉座に座る、圧倒的存在感を醸し出す巨大な人型。間違いない、あれは巨神だ。第三の巨神が今日の前に、居る。

「……………素晴らしい……………」

トカゲのおっさんにとつては二度目の邂逅か。こうして飾り立てられて居る姿を見れば、溜息の一つも漏らしたくなる気分は分からんでもない。

その姿に心酔しているのは虫人達も同じようで、片膝を突いて恭しくこうべを垂れている。これはもはや、尊敬と言うよりも崇拜に近い態度だろう。

造形は第二の巨神よりもぐっと人の形に近づいていた。長さのバランスが調整された手足に加え、上半身と下半身のパーツに分かれた胴体。頭部はやはり簡素なものだが、青いガラスの様な瞳が縦に二つ並んでいた。正しく、改良された後継機と言うべき

姿である。

そんな機械作りの人型が、無機質な瞳でこちらをじつと見つめていた。

そして、今回もまた私の胸元で、スマホが着信音と共に震え出す。この世界でこのスマホに掛かって来る通話など、心当たりは一つしかない。

胸ポケットからスマホを取り出して、パネルの上で指を滑らせ通話を開始する。今回は全員に聞こえる様に、スピーカーボタンも押しておく。程なく、スマホから発せられた音声が入屋に響き渡った。

『おはようございます。そしてお久しぶりですね。私の名前はヘステイア、十七歳です』

おいおい。おいおいおい！ 何でお前が今のタイミングで電話掛けて来るんだああああああ!!

私は絶叫した。虫人達もトカゲのおっさんもギョツとした顔で見に来るが、そんなもん構うものか。そもそも、永い眠りに付くみたいと言ったのはどうなったんだよ!?

『うふふふ、一週間ぶりですね。そろそろ東に居る私の姉弟に会えた頃かと思つて、お電話掛けてしまいました。あらあら、あらあらあら？ もしかして暫く会えないと思つてました？ どんな気持ちですか？ しんみりして別れたのに、いきなり声が聞けちゃつてどんな気持ちですか？』

とんでもなく頭に来て、血管がブチ切れそうだよコノヤロウ。相変わらず台風みたいな奴だ。つて言うか、息継ぎ無しに喋るからこいつのターンがすっごい長い! このまま主導権を握らせていたら、話が全く進まなくなってしまう。なんとかしなくては。

だから、とりあえずおはようと喋っておいてやる。それだけで、とりあえずスマホからの、怒涛のごとし音声の洪水は止んでくれた。代わりににやけ顔が想像できそうな声で、あらあらまあまあ言い続けていやがる。これはこれで恥ずかしいな。

『相変わらずだな、ヘスティア……。お前の破天荒さは間違いないく姉弟一だろう』  
スマホとは別の場所から、機械越しに声が響いてきた。その声は部屋中に反響しているが、どうやら部屋の四隅にあるスピーカーから発せられている様だ。

声色自体はやはりと言うか女性の物で、何処かの十七歳と違って押し殺したかのように冷徹に聞こえる。なんと言うか、女性が無理やり男性の声を出そうとしているみたいな印象を受けるのだ。例えるなら男装の麗人になろうとしているのに、胸が大きすぎて性別を隠せないでいる的な。うん、私にもよくわからん。

『まあまあ、お久しぶりですね。自己紹介は自分でしたいですか? それとも、わたし? がしますか?』

『お前は少し黙って居ろ。話が進まない』

良く言ってくれた。スマホから響く声と部屋に響く声で会話するのはシニールだが、



第三の巨神は実に冷静で賢明な様だ。カッコいい系女性、良いと思います。

改めて、部屋のスピーカーから荘厳を装った声が流れて来る。

『今代の操り人よ、呼び付けに従つてくれた事にまず感謝を。それから、私の姉がすまない。これは昔から糸の切れた凧の様な性格でな。私も難儀させられている』

ああ、凄い分かりますわー。昔からこんななのかこの十七歳。こやつを作った人は何を考えてこんな性格にしたのだろうか。それこそが正に古から来る最大級の謎だ。

『私の名はデメテル。巨神などと大仰に呼ばれてはいるが、序列は下から二番目だよ。今はこの虫人の集落を維持する為に、土壌改善と植物の改良に努めている。どうぞお見知りおきを、今代の操り人』

なんとと言う丁寧なあいさつだろうか。挨拶は実際大事。何処かの十七歳にも見習つてほしい物である。

トカゲのおっさんも私も挨拶を返したが、第三の巨神はおっさんの方にはあまり興味はない様だ。はつきりした性格のせいかもしれないが、何よりも自身が特別視されているようで居心地が悪い。この巨人の母になっただけの女子高生に、この巨神達は一体何を見ていると言うのだろうか。

今回はその辺りもはつきりさせたい物だ。とりあえず、わざわざ呼び寄せる程に、何か用があったのかを先に尋ねてみよう。

『そう畏まる事も無い。私は自分の能力を使っているだけで、神でも何でもないのでか  
らな。こうして呼び付けたのは、好奇心と少し依頼があつての事だ』

第三の巨神が放った言葉で、跪いていた虫人達がピクリと肩を震わせる。きつと神  
云々の辺りで言いたい事があるのだろうが、無駄な口を挟まないために思いも言葉も飲  
み込んだのだろう。なんと言う忠誠心。姿のせいも相まって、正に戦士と呼ぶのがふさ  
わしい風格だ。

『と、そんな所で表のクロノスちゃんからメッセージの着信です。『なんか来た』との事  
ですよ。あらあら? 一体全体何が来たのでしょうか?』

暫し沈黙していたスマホが、唐突にやかましく喋り始めた。そして直ぐに聞こえて来  
る轟音と、体に突き抜ける様に感じる振動。動転する私とおっさんを置いて、いち早く  
動き出した虫人達が遺跡の外に向かって駆け出して行く。

『なに? クロノスだと? 零号機が稼働していると言うのか? どういう事だへス  
ティア、聞いてないぞ!』

『うふふふ、相変わらず不測の事態には弱いですねデメテルちゃん。落ち着かないと、  
せっかく取り繕っていたお顔の皮がはがれてしまいますよ?』

第三の巨神は何か別の事で驚愕している様だが、外の巨人が心配なので今は後回しに  
しよう。あと、十七歳はちったあ自重しろ。

こういう場合は大抵ろくでもない事が起こるのがセオリーと言う物で、行けばきつと沢山苦勞するのだろう。でもまあ、あの子を放置しておく事など論外。不測の事態が起こっているなら、せめてそばに居てあげたい。

そうと決まればとりあえずは行動だ。未だに名残惜しそうに巨神を見ているトカゲのおっさんの尻尾を引つ張つて、私は遺跡の外に向かつて走り始めるのだった。

次回、第十五話『来ちやつた!』に続く。

## 第十五話『来ちやつた!』

前回のあらすじ。

ジャングルで仮面な二輪車乗りに捕まって、連れて来られたのは巨大な大樹の集落だった。その根元を支える古代の遺跡に案内され、その最奥で出会ったのは第三の巨神。スマホに通話が届きよいよ会話かと思えば、掛けて来たのは第二の巨神の台風長女。第三の巨神は実に理知的な性格だったが、詳しい話をしようとした所で物騒な音と振動が響いてきた。子供が心配なので、とにかく遺跡の外に向かう。

嫌な予感はしていたんだ。ただ、それがどんな形で当たるのかは予想していなかった。何もこんな形で当たらなくてもいいじゃないかと強く思う。

「前に言った通りに、来ちやつた! 七つぐらい前だよ!」

遺跡を出て最初に飛び込んで来た光景は、無数の虫人達が地面に転がりびくびくと蠢いている姿と粉々にされた槍の様な武器の数々。そして、その中心でこちらにひらひらと手を振る、ちよつと次元の違う事を叫んでいる白衣のカピバラ。そう、あの最初の町に現れたうるさい奴だ。

その傍らには、巨大なブーメランを肩に掛けて、虫人の返り血を浴びて凄惨な姿になったメイドさんも居る。やっぱり虫人の血って赤じゃなくて緑色なんだ。そんな奇抜な装いになっているのに、彼女は顔色一つ変えずに佇んでいた。

本来に来ちゃった！ できればもう会いたくは無かった。

「見つけたぞ、巨神を意のままに操るヒューマンの娘よ。貴様には並々ならぬ学術的好奇心がムクムクと湧き出でて幾星霜。この吾輩に見初められた事を泣いて喜び、我が研究の為の礎となるが良いので吉。そうすれば、この至高の頭脳を持つ我輩も少しぐらいは感謝の念を向けてやらない事も無い、と言う物である。分かりやすく言うと、研究手伝ってくださいマジオナシヤス!!」

相変わらずぶっ飛んだ言語センス。しかも短い手足で一々気取ったポーズを決めるので、可愛いんだけどなんかウザイ。カピバラ面なのにドヤ顔してるのが良く分かるせいだろうか。

そして、そんなカピバラの言葉に反応して、メイドさんがゆつくりとこちらに向かつて歩き出した。こちらでも変わらず、無表情で高身長で迫力があって怖い。いや、緑に染まってるから前の時より怖い。無表情緑怖い。せめて拭う位しようよ、女性なんだからさあ！

「下がれ、客人!! この雌は強い! それよりも客人の巨神の方を!!」

じりじりと後退っていた私の視界の端から、叫びながらあの案内をしてくれた虫人の戦士が飛び込んで来た。バツタのように地面を跳ねながらメイドさんへと向かい、飛び掛かると同時に手にした剣で斬りかかる。おお、この世界に来て初めて剣で闘う人を見たよ、かっこいい!

つかず離れず、縦横無尽に跳ねながら闘う虫人の戦士。思わず見とれそうになつてしまうが、そうだ巨人の姿が見えないではないか。連行された時にはこの集落の傍で、大人しくしてる様に言つたはずなのに。あの子が勝手に言いつけを破るなんて、今までからは考えられないので何があつたのだろうか。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふのふ。自分の巨神が居なくなつてて不安そうであるな。ならばこの天才たる我輩が教えてやろう、今あの巨神はあそこにおるわ!」

テコテコと近づいてきたカピバラが、こちらに話しかけながらばつと周囲の森に向けて指先を向ける。そして、それと同時にほぼ反対の森の木々をなぎ倒しながら、私の巨人が姿を現し背中から地面に倒れ込んだ。おい、逆じゃねえか。それでいいのか自称天才。

指を差したまま固まっているカピバラは放置して、視線を倒れた巨人に向ける。あの子が一方的にやられる所なんて初めて見た。一体何がと困惑していると、なぎ倒された木々の向こうからもう一体巨大な物がのっそりと姿を顕わにする。

それは人型の上半身と方向転換の為の車輪のついた前足、そして馬力を得る為のキャタピラのついた箱型の後ろ足を持つ巨神。カピバラが作ったと言うレプリカの巨神だったはずだ。また作ったのかこのカピバラは！

「う我輩の事は博士と呼びたまえ。そう、その通り。前回回収した動力に改造を加えて数を増やし、さらなるパワーアップを施したレプリカ巨神。その名も半人半馬の神獣、『ケイローン』である!! べ、別に二足歩行が出来なくて妥協した訳じゃないんだからね!! 違うんだからね!」

そうか、妥協したのかカピバラ博士。

でも、いくらパワーアップしたって、一方的に私の巨人に勝てるとは思えないんだけど。もしかして、戦って良いって言ってないから無抵抗でやられてたのか!?

慌ててスマホ越しに『もう遠慮しないで良いから、そんな奴ぶつ飛ばしちゃえ!』と語り掛ける。しかし、巨人はピクリとも動かずに、レプリカ巨神に頭を掴まれて無理やり吊り上げられてしまった。なんで!? なんで反撃しないの!?

「くつくつくつ、クエスチョンエクスクラメーションマークは突然に! 何やら防御系の技が使われた時には驚いたが、それ以降巨神はあんな様子でグロッキー。我輩思いました、これは実はスゲーチャンスなんじゃねー? みたいな? さあさあおぜうさん、きりきりと神妙にお縄に付くのが科学の発展の為ですぞ——ぶぎゅっ!」

迂闊に近寄って来たカピバラ博士が何か言って来たけど、とりあえず頭を上から押さえつけて黙らせておく。両手をブンブン振り回してるけど、手足が短くて全く届いていないから脅威にはならないだろう。

そんな事よりも巨人の事が心配だ。

再び視線を向けた所で、その巨人が投げ飛ばされて虫人達の集落である大樹に投げつけられた。とんでもない轟音と共に背中からぶつかり、地面に倒れ伏すと地震みたいな振動を生み出す。投げ飛ばされた巨人はそのまま立てずにいて、こちらに——私に向けて手を伸ばして来た。

その姿を見た私は、頭の中が真っ白になって一も二も無く走り出す。あの子が呼んでる。なら、行かなきゃダメだ。レプリカ巨神が暴れていて危ないとかは、もう頭の中から吹き飛んでいった。

「ちよっ!? そつちは危険が危ないのである!! おぜうさん、お待ちなさい! おぜうさんに何かあったら、話が終わってしまいますぞ!? じよ、助手くーん、助手君なんとかしてー!!」

背後でカピバラ博士が何か叫んでいるが構いやしない。そのまま巨人の腕まで駆け寄って、差し伸ばされた手の指先にぎゅっと抱き付く。それだけで、涙が零れそうな位胸が締め付けられてしまった。



ごめんね、一人にしてごめんね。今はもう、傍にいないからね。

すがり付く様に抱き付いていると、巨人がゆっくりと体を起こし始めた。大きな瞳が私の事を見つめていて、そしてそれは直ぐに私の頭上高くへと持ち上がって行く。私の体も少しの浮遊感に包まれて、巨人の肩に乗せられる。途端に、視界一杯に相手のレプリカ巨人の姿が広がった。

よし、今度こそやつちやえ！ 私の号令に合わせて巨人が腕を振り被り、不用意に近づいてきたレプリカ巨人を殴り飛ばす。先程のお返しとばかりに軽々と巨体が吹き飛んで、周囲の森の木々をなぎ倒して転がって行った。何だかわからないが復活した！  
ここからが反撃開始だ！

『なんと言う、突然の復活劇！ ならばこちらも遠慮はしないのである、ケイローン！  
『博士の特性フィリピン爆竹ミサイル』一斉発射!! もう一度防御技を使わせてグロッキーに戻してやるのである!』

何その物騒な爆発物みたいなミサイル。わざわざ拡声器まで取り出してこっちに声を届かせるなんて、流石に紙一重の考える事は紙一重だ。そんな事を考えている間に、距離の開いたレプリカ巨人がその胸を両開きにして、格子棚の様に区分けされた格納庫から無数の投擲物を発射してきた。撃ち出された投擲物は空中で点火して煙を噴き上げ、それぞれが無軌道に煙の尾を引いて飛び回ってから、再び収束して一斉にこちらに

向かって来る。無駄に科学力高いなコレ。

迫り来る脅威に対して、巨人は左の掌を差し向けた。左手の装甲が展開して、生まれ  
た溝に光が満ちる。そして掌の前に円盤状の壁が生まれて、飛んできたミサイルを全て  
受け止めた。受け止めただけで、爆発する事もなくその場に止めている。爆発に備えて  
身構えていたので、少し拍子抜けしてしまった。

『さあ、これで相手はまたグロッキー。好きだけ叩いて叩いて、ぶってぶってどちら  
が上か体で思い知らせてやるのだー! 『わからないなら、ぶってわからせてやる!』と  
いうやつである!』

開いた胸元を閉じてから、レプリカ巨神が土砂を撒き上げながら突撃して来る。それ  
を見守りながら、巨人は円状の壁を小さくして行き、やがて掌の上に動きを止めた飛来  
物だけが残った。まるで時間が止まっているかの様に、そのままの形で無数の爆発物が  
握り込まれている。

こつちを舐め切っているのか無造作に近づいて来るレプリカ巨神。それに対して、私  
の巨人は一步だけ踏み込んで、タイミングを合わせて爆発物を握り込んだ左腕を叩き込  
んだ。

あつさりと装甲を突き抜けて、胸板に拳がめり込み肘まで込み突き刺さる。動きを止  
めたレプリカ巨神から腕を引き抜いた時には、握り込んでいた爆発物は全て返却されて

いた。そして、一步二歩と後退つてから背中を向ける。

その瞬間に左腕に灯つていた光の模様が消え去つて、展開していた装甲が閉じると同時にレプリカ巨神の中で爆発物が活動を再開した。当然の様に爆発し、レプリカ巨神は内側から一瞬膨れ上がりその上半身を爆散させる。下半身は残っていたが、もう動く様子は微塵も無い。

『なあにあれえ……。さつきと全然違う、全然違うのである。おぜうさんが肩に乗つたら強くなるのか、どういう理屈なのかさっぱり理論が分からない！ 肩に乗つてるのに戦闘で吹っ飛ばされないおぜうさんもまったく意味が分からない！ 分かるのは、此処が退き時だと言う事だけなのである！ 助手君！』

レプリカ巨神がやられた途端に、今まで虫人の戦士と戦っていたメイドさんが戦闘を切り上げカピバラ博士を回収する。いつか見たアイアンクロウがカピバラヘッドの後頭部を掴み上げ、ぶらんぶらん振り回しながらおよそ人の物とは思えぬ身体能力で地を駆けて森の中を目指して行く。素人が見ても鮮やかだと分かる、見事な撤退だった。

『動力炉緊急回収装置作動！ 正常動作確認、戦闘地域外への射出を確認！ 今回は引き分けと言う事においてやろう。だが忘れるな、我輩の頭脳が敗北した訳ではないと言う事を！ いずれ第二第三の量産型——イテテテテテ！ 助手君力入れすぎてるから！ 割れちゃう、我輩の優秀な頭脳が助手君の愛で割れちゃう!! おぼえてる

よー!!』

カピバラ博士も捨て台詞を忘れない。本当にキャラがぶれない奴だ。正直ちよつとだけ羨ましい。

それと同時に、博士の言葉に反応して残ったレプリカ巨神の下半身から、大きな金属の塊が内側から装甲を突き破って飛び出して行く。先程のミサイルの様に煙の尾を引いて森の外に向かって飛んでいく二つの塊。それを見送っている間に、カピバラ博士と助手のメイドもまた森の中に消えて行った。

これで唐突な戦闘は終了した様だ。今回は流石に肝が冷えた。やられている巨人の姿は心臓に悪い。

なんにせよこれでまた話を聞きに戻る。いや、その前に怪我人を何とかするのが先か。大活躍してくれた巨人の頬をよしよしと撫でながら、これからの事を考えると実に頭が痛かった。

ああ、何でもいいからもう、お風呂入りたい!

次回、第十六話『気持ちいい!』に続く。

## 第十六話 『気持ちいい!』

前回のあらすじ。

再び現れたカピバラ博士と助手メイド。メイドとブーメランを組み合わせたまったく新しい戦闘術で、メイドさんは虫人相手に無双していた。そしてパワーアップしたレプリカ巨神に苦戦する巨人。助けを求められたような気がして走り寄ると、再び息を吹き返して肩に乗せられ反撃開始。良く分からないけど、一方的に相手を倒せました。

風呂は良い。人類が生み出した文化の極みだ。特に手足をゆつくりと伸ばせるのが最低条件だと思う。じんわりと広がる熱が体の芯まで浸透して、疲労と言う名の老廃物がお湯に溶けて流れて行く。

この世界に来てからは、良くてシャワーかタライでの行水。悪い時は手拭いで体を擦るだけ。最悪な時はそれすらも無い。多感な時期の乙女に、この仕打ちはなかなか過酷では無かろうか。

だが、今入っている風呂は何とも素晴らしいではないか。薄黒色の温泉がかけ流しになっており、場所は森の中だが木製の仕切りで四方を高く囲んであって人目は気になら

ない。身体を洗う為の洗い場も石でしっぴかり組まれており、花の蜜や木の実の油から作られた石鹸まで置いてある。そして一番気になる虫の類は、虫人のおかげでまったく言つて良い程見かけない。

これはもう天国では無かるうか。私は此処に住もうかと、少しだけ真剣に悩み始めていた。虫人のビジュアルよりも、毎日入れる温泉と言うのはそれだけ貴重なのだ。

ちなみにトカゲのおつさんは、一月ぐらい入らなくても平気らしい。亜人つて奴は全く、どこまでこの世界に適應しているのやら。脱皮でもしてるのかあのトカゲは。

「おーい、先上がるぞー。あと、トカゲじゃないドラゴニュートだ」

その当人から仕切り越しに、無駄にデカイ声で話しかけられた。

もう上がるのか、さつき入り始めたばかりだと言うのに。カラスならぬ、トカゲの行水だな。せつかく虫人達が温泉を利用させてくれたと言うのに、もつともつと堪能しないともつたいないではないか。

『はあああああ……、くうううううつ！ 気持ちいい！ もう出たくなーい……』等と、思わずそんな言葉が漏れると言う物である。

虫人の集落が襲われた後、怪我人の手当てを終えてから、私達はもう一度第三の巨神の前に集まった。幸いな事に死人はおらず、怪我人達も磨り潰した薬草を塗りたくられたらすつかり元気に。おかげで特に滞りも無く、話し合いにはすんなり戻れたのだ。

そこで聞かされたのは、新しい依頼と少々厄介事。まったく、あの巨神の姉弟は何時だつてこちらに難題を押し付けて来てくれる。

『はあ……、次は海かあ……』なんて、溜息が零れてしまった。ここの湿度もきつかったが、潮風はもつと憂鬱にさせてくれる。

出来る事ならこの風呂から離れたくない。名残惜しさを感じながら、私はとりあえずもう一度体と頭を洗おうと湯船から立ち上がった。

小一時間後。

お風呂から上がって身体をしつかりと拭いた後に、髪をガシガシと拭きながら巨人の元に戻って行く。

この集落では綿花も育てていて、まさかのタオルが作られていたとは有り難さに涙が出る。ミシンが無いと作れないんじゃないかと思つたが、何でも虫人の中には糸を扱うのが得意な種族が居るらしい。どことなく、会うのが怖そうな気がするので深く追及はしないでおこう。腕いっぱいありそうだしな。

この大樹の集落とそこで育てられている豊富な植物。そして荒野に突然現れた森林地帯。その全ては、第三の巨神の能力による物だった。

二体の自律ユニットから広域散布される、ナノマシンによる土壌改善と成長速度の促進。正に豊穡の女神と言う訳だ。

無駄に話を脱線させる十七歳の巨神の横やりに耐えつつ、第三の巨神から聞き出した話によるとその力で環境を整えたいらしい。外の荒野ではろくに生活が出来ずに、死に絶えるのを待つばかりだった虫人を救う為に。

自分の出来る事をしただけだと語っていたが、あれは間違ひなくツンデレだ。今や純正の物は絶滅危惧種だな。虫人達に神格化されるのも当然と言うべき貢献だろう。

部屋を飾られて、恭しく扱われているが話し相手には困らない。きつと、この関係を巨神も嫌っていないから、環境改善を続けているのだろう。

巨神と人類の共生関係。これは、私と巨人の関係の理想形なのかもしれない。私は巨人の力を都合の良いように使っている。その私は、巨人に対してしっかりと返せているのだろうか。

今はまだ、自分自身で納得する答えを見つけてはいない。

そうだな、とりあえずは、お風呂がたっぷり使えるうちに私の巨人の全身を磨いてやろうかな。お風呂デビューって奴だ。滅茶苦茶苦勞しそうだけど、ちよつとは日頃の恩を返してやろうじゃないか。

次の日からの予定を考えてから、今夜は絵本を読み聞かせる為にさつさと巨人の所に戻るとしよう。

更に日は流れ。



そうしてそれから一週間ほどかけて、巨人の全身をピカピカになるまで磨き上げた。もちろん私一人では無理だった。トカゲのおっさんや虫人達も手を貸してくれて、総出で取りかかったのだ。

長い間遺跡で放置されていた間の汚れと、長旅で着いた砂ぼこりを落として、隙間に詰まっていた土なども丁寧に取り去ってやる。

この大清掃のおかげで、足の裏や足首の装甲の中には噴射口みたいな物が備わっているのに気が付いた。どんな機能があるのか巨人に尋ねてみると、『ホバー推進』とスマホにメッセージが。なんと、清掃したら新機能が生えた。いや、土汚れで今まで使えなかったのが復帰したのか。

新機能はそれだけではない。一週間の滞在の間に良く話す様になった第三の巨神が、自分用に用意されていた貨物用ラックが遺跡内にあるので持つて行っても良いと言ってくれたのだ。

規格とか合うのかと思ったが、問題は無いらしい。『おまえのクロノスならば問題は無い』と言われたが、巨神の姉弟同士には規格の統一性でもあるのかも知れない。

何はともあれ、これで私の巨人は背中に大容量の貨物コンテナを詰む事が出来る様になった。これで食料品や水の運搬には困らないだろう。旅の航続距離が延びると言う物だ。

それからこれが一番の目玉だが、肩と腰回りに木製だが足場を付けて貰えたのだ。これで旅の間に座ったり、戦闘中に今までより楽にしがみ付いて居られる。絵本を読むのだって此処で出来てしまう。巨人もちよつと嬉しそうだつた。

腰回りの足場は、トカゲのおっさんの為に付けてもらった物だ。肩の足場に一緒に乗れると喜んでいたのだが、どうも巨人は私以外をあまり乗せたくないらしい。ふつ、これも母の役得と言う奴か。

もちろん尻尾を垂らしてへこんでいたのだが、腰回りや掌なら今まで通り乗せてもらえるとは分かったので喜んで足場作りに参加していた。結局、乗れるなら何でも良いらしい。

最初はどうなる事かと思つたジャングル探索だつたが、結果的には得る物がずいぶんと多かつたな。私達は装備や物資を増やせし、巨人は今回私たち以外の人達と触れ合う事が出来た。

巨大な口ボはやつぱりどこの世界でも大人気。虫人の子供達に囲まれる巨人は、おろおろとしつともどこか嬉しそうに見えたのだ。『沢山友達が出来て良かったな』って声を掛けたら、スマホには『はい』と肯定の返事が返つて来た。

今まで私とトカゲのおっさんと巨人の狭い世界で過ごしてきたが、やつぱり多くの人と触れ合う経験は得難い物なのだろう。今回の事で、巨人の世界は確実に広がったはず

だ。

もちろん、世の中良い事ばかりじゃないのは分かっている。何時か、見たくもない現実と向き合う時が私にもこの子にも来るのかも知れない。でも、今はまだ、優しい世界に触れていて欲しい。

それが親としての、私の正直な気持ちだった。

見た目の問題はともかく、居心地のよかった虫人の集落だが、厄介な頼まれごとの為にも旅立たねばならない。

依頼された事は二つ。行方が分からなくなってしまった四体目——三女の巨神を探し出す事。そしてもう一つは、暴走して人に迷惑を掛けている六体目——次男を止めて欲しいとの事。

もちろん、最初に言われた最強の末っ子をなんとかするのも忘れてはいないし、最終目的である世界のリセットの阻止も絶対厳守だ。

なんかもう、ほとんどの奴を止めなきゃいけないみたいだな。特に弟達はほぼ全滅じゃないか。

その為にも、私達は此処から更に東にある、海岸線にある港町に向かう事となる。まずは居場所がはっきりしている六体目を何とかする事にしたのだ。

旅立ちの準備は、もう既にできていた。出発の日に備え、するべきことは一つしかな

い。

最後の温泉に、入って来ます。

次回、第十七話 『濡れちやう!』に続く。

## 第十七話 『濡れちやう！』

前回のあらすじ。

温泉、掃除、増設、準備、温泉！

その事に気が付いたのは、背の低い丘陵を幾つも越えて、吹いてくる風に潮の臭いを微かに感じるようになる頃合いだった。新しい機能のホバー推進での移動も順調だと言うのに、そのおかげで気分が沈んでしまう。いや、もうひと山越えた位で海が見えて来るらしいから、それはそれで憂鬱の種ではあるのだが。

悩みの元は、元の世界から持ってきた通学鞆の中にある。着替えなどと一緒に、文具やら何やらもそのまま突っ込んでいたのだが、もう一つ大事な物も入れてあった。それは小さなポーチで。中身は簡単なコスメ用品と、お月様に必要になるアレだ。

コスメ用品は大事に使っているのに順調に目減りしてきているが、もう一つの方は本来の目的では一度も使用していない事に気が付いてしまったのだ。こういうのは一度気になると、なかなか頭を離れてくれなくなってしまう。

もともと重い方でも無いし、時期がずれる事もよくあるので大して気にはしていない

かったのだが。この世界に来て既に一か月近くが経とうとしている。予定日はとつくに超過。流石に少し、やって来るのが遅いのではなからうか。

巨人の肩にある足場の縁に腰かけながら、何とは無しにお腹をすりすりと擦る。色々とお悩みは尽きないが、こういう先の見えない体の不安は地味にきつい。お腹の奥がきゅーつとなつてしまう。

「どうした? 腹でも空いたのか?」

そして同行者は当てにならないと来た。腰の部分の足場で胡坐をかきながら、頭だけ上に向けてこつちに話しかけて来る。その的外れな言動に、陰鬱な気分が一気に最低な物になった。

そんなんじゃないよ、こつち見んなトカゲ!

「トカゲじゃないドラゴニユートだ。体調不良ならすぐに言えよ。手の施しようが無くなってからだ、巨神もワシも途方に暮れる事になるからな」

分かってますよー。まったくデリカシーがあるんだかないんだか。少なくとも乙女心つて物が分かって無い。なんせそんなものは、自分自身でも理解していないのだから当然だ。

足場から両足をぶらぶらさせて、着けてもらった手すりに突っ伏しながら巨人の横顔を眺める。お前は真つ直ぐに育つてほしい物だよ。少なくとも、おっさんみたいにはな

らないで欲しい。この子がセクハラ親父になったら悲しいからな。

女の子には優しくしろー、なんて言うつもりは無い。男にも女にも、一定数どうしようもない奴等は居るのだから。どうせなら、自分が優しくしたいと思える人を沢山増やしてほしい物だ。

そんな風にとりとめの無い事を考えていたら、幾らか気分が紛れて来た。やはりこういう時は馬鹿話に限——私の思考は唐突に響き渡った破碎音で強制終了させられた。突如飛んで来た岩が、巨人の掌で防がれ弾け飛んだのだ。巨人が守ってくれなかったら、今よりもペツタンコになる所であった。ってやかましいわ!

「大丈夫か!? 伏せろ、攻撃されているぞ!!」

下から叫んで来るトカゲのおっさんに言われるまでも無く、足場の上で姿勢を低くして攻撃が何処から飛んできていいのか観察する。第二射は直ぐに来了。正面、海の方から弓なりに大岩が投げ飛ばされてきている様だ。

何処の誰かは知らないが、そっちがその気ならやってやろうじやないか。巨人が!

二射目の岩を装甲を展開した左腕で受け止め、発生した円状の光が空中に岩を固定させる。停止させられた岩をそのまま逆の手でぶつ叩き、同時に展開していた装甲から光が消えると停止が解除されて岩は真つ直ぐに元来た場所へ帰って行った。

やっぱり、この左手の技は相手の攻撃を停止させている。ただ防ぐだけじゃないか

ら、こうしてその後に応用が利くのが特徴の様だ。技を使う時にはどうやらスマホに技名が表示されるらしく、それによると名前は『defenser』。つまりディフェンサー。名前からして防御技なのは間違いない。

右手のあの凄いののはあれからまだ一度も使っていないので、今度使用した時にはスマホのチェックは忘れない様にしよう。あつちはどう考えても必殺技だから、やっぱり技名は知りたい物だ。

遠くの方から岩の着弾音が聞こえて来た。微かだが慌てふためく人の声も聞こえた様な気がする。それ以降、岩が飛んで来る事は無くなった。

さて、どんな奴らが巨人相手に戦いを挑んできたのやら。まずは顔を拝んでやろうじゃあないか。

ホバー走行を止めて、ズシンズシンと一歩ずつ、地響きと共に突き進み近づいて行く。暫く進むと、木製の装置が粉々に砕けているのを発見した。確か、投石機だっけ。詳しい原理は知らないけど、岩を放り投げる兵器だったと思う。漫画でちよろつと見ただけなので、私の知識で分かるのはそんな程度だ。

打ち壊されていない物もあるが、これだけ近づいても発射される様子はない。それもうしろだろう、兵器を操作するべき者達が居ないのだから。

その兵器の操縦者達は今、全員巨人の足元で土下座していた。



「申し訳ありませんでしたー!!」

「巨神様に逆らうなんて考えた事が全ての間違いでしたー!!」

「何時も通り食料金品は差し出しますので、なにとぞ平にご容赦をー!!」

なんとと言う見事な D O G E Z A ! 正座をして両手を突き、頭を地に擦り付ける。これこそが本気の謝罪の姿勢。これこそが、大人の見せるべき反省の態度。こんな綺麗な土下座は見た事が無い!

まあそれはどうでも良いとして、何時も通りと言うのはどういう事だろうか。

「あれ、なんか何時もと姿が違くないか?」

「ばっか、こんなに大きいのがそう何匹も居るかよー!」

「でも、何時もは女の子とか一緒に居なかったよな」

何と話しかければいいのか迷って居たら、何やら襲撃者達はこそこそと内輪で話し始めた。巨人の肩に居るとほとんど話は聞こえないが、なんと言うかこの状況で目の前で内緒話とかなかなか良い度胸をしている。

見た所こちらを襲撃してきたのは六人ほど。数台の投石機を全員で操作して、台数を揃えて連射出来るようにして待ち構えていたらしい。恐らくは、巨人の頭が見えた辺りで射程ギリギリで撃つて来たのだろう。

正直、ここまでして襲撃される心当たりがないのだが。あるとすれば先のカピバラ博

士達の関連だろうか。しかし、それにしては使っている兵器がやたらと原始的な気がする。アレの関係者なら、重火器を持って来ても驚きはしない。

「あの一、大変失礼な事を聞いてもよろしいでしょうか？」

考えごとの最中に襲撃者達の一人が、這いつくばったまま顔だけ向けて話しかけて来る。

歳は中年ぐらいか、なかなかガタイが良くて、肌が赤銅色をしていて髭が良く似合っていた。他の面々も、歳の差はあれどほぼそんな様相だ。正しく海の男といった風体か、とてもではないが兵器を扱うようには見えない。

こちらが構わないと言う意志を首肯して伝えると、先程の男性は恐る恐ると言った様子で言葉を紡いだ。

「あなた方は、どちら様でしょうか？」

奇遇だな、こつちも今言いたい事が出来た。それはこつちの台詞だコノヤロウ!!

紆余曲折はあったが、私達の悲しいすれ違いは解消された。襲撃者達は今は、仲良くホバー走行する巨人の掌の上に収まっている。話を聞いてみればなんとと言う事は無い、人違いならぬ巨神違いであったのだ。

「いやあ、申し訳ねえ! 俺たちやてつきり何時もの奴らが山側から攻めて来たと思っ

ちまつてよ！」

「何時もは海から来るからおかしいとは思ったんだよ！」

「虎の子の投石機の用意をしてたから、気も大きくなつてたしな！」

そんな事を言つてガハハハと笑う海の男達。そう、こやつらは今向かつている海辺に存在する、それなりの大きさの港町の獵師達だった。こんな山中に居たのは、投石機に乗せる手ごろな岩を搭載する為だったのだとか。それつて岩だけ運んだ方が楽だったんじゃないかな……。つーか、こつちは襲撃されたんだぞ、笑えねえよ。

そうこうしている間に視界が開け、ついに巨人は海岸線へとたどり着いた。獵師達に町の方向を聞いて、とりあえず近くまではそのまま進もうと巨人の向きを変えさせる。

波飛沫が舞う海の横の道を高速で移動し、そろそろ町が見えて来ると獵師の一人が言った時。私の耳にひゅーっと言う風を切る様な音が聞こえて来た。なんだろう、どつかで聞いた事がある様な気がするんだけど。

この音に心当たりがあつたのか、先程と同じくトカゲのおっさんが反応して大声を上げた。

「巨神を止めろ！ 砲撃だ!! 海岸線から離れるんだ!!」

砲撃。そう、この音は戦争映画なんかで良く聞いた、砲弾が飛んで来る時の風切り音だ。あの音はフィクションで実際こんな音はしない筈なんじゃ——

そこまで考えた所で、近くの海が突然爆ぜた。天高くまで水柱が上がって、まるで雨の様に海水が降り注いでくる。うわっ、髪が濡れちやう!　せつかく温泉で頑張つて綺麗にしたのに!

巨人は警戒の為に走行を止めて、海岸に対して身体の正面を向けてくれる。言うまでも無く動いてくれてとつてもお利口だ。後でなでなでしてあげよう。

こんな事をするのはいったい誰か。海に向かって視線を這わせ、新たな襲撃者の姿を探す。こんな展開はさっきのだけで十分だったの、まったくもう!　かんべんしてほしい。

そして、水平線の先にぼつんと浮かぶ船を見つけた。海の上で他に比較できるものがないので大きさは分からないが、他に何も見えないからにはアレが砲撃してきたに違いない。

スマホの画面を巨神の視覚とリンクさせて、最大望遠でその船を観察する。外見は銃角を多用したデザインの、現代的な戦艦の様な船だった。護衛艦つて言うんだっけ。

その甲板に、まったく釣り合っていない古めかしい大砲が乗っかっていて、何やら人影がわちやわちやと蠢いている。人つて言うか……、魚っぽい?　じゃあ人影じゃなくて魚影?

そして、その船の艦橋の上には、黒地に白でバツ印の骨と眼帯を付けた人の頭蓋骨が

描かれた旗がはためいていたのだった。海賊船だアレー!?

次回、第十八話『とんがつてる!』に続く。

## 第十八話『とんがってる!』

前回のあらすじ。

女の子には色々悩みがあるんです。新機能のホバー推進を試していたら岩を投げつけられた。巨人が防いで反撃した所、下手人達は土下座でお出迎え。話を聞いてみれば彼等は次の町の漁師で、何でも巨神違いをしたのだとか。その後町に一緒に向かっていると、海の上から海賊船に砲撃された。

正直、この時ほど巨人に飛び道具が無いのを残念だと思った事は無い。

次々と飛んでくる砲弾を、避ける事も無くぼーっと見送る。そのどれもが直前で失速して、ドバンドパンと目の前の海面へと落ちて行く。直撃する様な物は巨人が受け止めてくれる筈だが、これはそれ以前の問題だ。

あいつ等、ノーコンにも程がある。これならトカゲのおっさんが流れ弾で死ぬことも無いだろう。

「トカゲじゃないドラゴニュートだ。このままじゃ埒が明かんな。とりあえず、ワシらだけ残って獵師達は避難させた方が良いだろう」

よし生きてたか。相変わらず人の心の中の台詞に反応する奴だ。

流石に放置して町に向かうのも問題があると言う事で、運んで来てあげた漁師達は掌から下ろし先に街に戻っていてもらう。それから手ごろな岩でも投げてやろうかと思案していると、ずっと続いていた砲撃が不意に止んでしまった。当たらない事に気が付いて、今更ながらに方針を変えたのだろうか。

更に見守っていると、海賊船は舳先をこちらに向けて近づいてきた。今まで停止していたというのに、もう既になかなかのスピードだ。船舶としてはやはり、かなりの優秀さを誇っているらしい。

「あやつら、このままだと浅瀬に衝突して座礁するぞ」

トカゲのおっさんが至極どうでも良さそうに呟く。分かんなくてもないが、流石に海賊旗を掲げているような奴らだし、無策に陸地に近づくななんて事は無いだろう。

そう思っていた時期が、私にもありました。

結論から言えば、奴らの船は座礁した。そりやあもう見事にガツンと。ダンスの角に小指をぶつける感じでガツンと浅瀬に突っ込んで、何やら甲板の上にわらわらと人影が躍り出て来た。そいつらはひとしきりギャーギャーと叫び合うと、船の錨を下ろしてからそれを伝って浅瀬に降りて来る。

そうして、巨人の足元にそいつらはやって来た。

「おい！ お前達、あの町の奴らじゃないな!」

「あの町は俺達海賊団が縄張りにしてんだ、そんなでつかい奴を連れて暴れようとしたらただじゃ置かねえぞ!」

「そーだそーだ!!」×大群

思ったより小さい。背丈は私と同じぐらいだろうか。いや、背ビレも入れれば少しだけ私より高くなる。足が無い分——足の代わりに尾ヒレれで立って居るのでどうしてもその分背が低くなるのだろう。

そう、目の前に居る連中は、全員が鮫だった。どう考えても水中に適応しただろう姿の癖に、何故か陸地でも元気に活動する。半魚人ならぬ全魚人とも言うべき、鮫その物の姿の亜人であった。

もしかして砲撃が当たらなかったのは、あの不器用そうな胸ビレで操作していたからなのではなからうか。

「おめえ等、待ちな。そいつらの相手はお前らじゃ無理だ」

その時、再び甲板上から落ち着いているが良く響く声が聞こえて来た。それと同時に甲板を蹴って、大きな人影が浅瀬に向かって跳躍する。

そして、ビターンと腹から水面に落ちた。しかも水面は私の膝ぐらいしかないのほぼ陸地に直撃だろう。痛みを想像したら、思わずうわあと口から言葉が漏れ出した。



そして、たっぷり時間をかけてから腹打ちした人物が立ち上がり、のっしのっしと肩を怒らせてこちらへやってくる。威厳も何もあつたモノじゃないが、醸し出す威圧感だけは相当な物だろう。

他の鮫人と同じ様に尾ヒレ直立歩行ではあるが、その体格は二回りほどデカイ。怒り肩の先にあるのは逞しく発達した胸ビレで、その先には三又に分かれた鉤が握られている。一番の特徴は他の鮫人達と違い鮫顔の口の中に鋭い眼光が光っている事だった。まるでこの人だけ被り物をしているかのようだ。もちろん頭頂部には立派な背ビレがあり、他の鮫人達よりもご立派だ。むしろ、俺を見ろと言わんばかりにとんがっている！

上着だけ制服みたいのを羽織って、その上に更に羽織った赤いマントをひらひらさせる。片手——片ヒレはフックになっていて、これぞ正に海賊船長と言わんばかりの風格である。

「そして、俺でも無理だろう。ここは、我らが船長の出番であるとお言葉だ。お前ら道を開けな!!」

そう言つて、でっかい鮫人が道を譲る様に脇に移動する。それに倣つて、わらわら居た他の鮫人達も左右に分かれて人垣を作っていた。つて言うか、デカイのが船長じゃなかつたんかい。

まだ船に誰か残って居たのかと、再び視線を座礁している海賊船に向ける。しかし、その船長とやらは、一向に姿を見せる気配が無い。やっぱりその辺の岩を適当にぶん投げさせようか、なんて考えていたら海賊船からハウリング音が響いてスピーカー越しの声が発せられた。

『ふふふふ……、くつくつくつくつ、はーっはっはっはっ!! 待たせたな! 今そつちに行つてやるぜ!!』

どことなく、合成音声を思わせる若い男の声。いや、少年の様に聞こえる女性の声だろうか。判然とはしないが、とにかくやたらと元氣な事だけは伝わって来る。

そして、その声の持ち主が姿を現した。いや、最初からそこに居たと言うべきだろう。艦首が割れ、艦橋が歪み、船尾が形を変えて行く。剥き出しになった内側が曝け出されると、それは腕となり足となり、そして頭となる。船を形作っていたパーツは体の外側に外套の様に張り付いて、内側に引っ込んでいた両手の拳がせり出して来てググツと力を入れて握り込まれる。うん、何かコレ、アニメで見たことある。今のうちに攻撃とかしたらダメなんだろうな、きつと。

最後に海賊の帽子を模した頭部に埋め込まれた三角形に三つならんだ緑の丸いレンズと、その下の私の巨人に似た顔立ちの両目にキラリと光が灯る。これはおそらく、五つの瞳を表しているのだろう。

まさか海賊船が變形するとは恐れ入った。それも、ほとんど人間とそんな色ない程の人間型に。そして、直感が正しければこいつは、止めてくれと頼まれていた巨神姉弟の次男に違いない。長女は瞳が一つ、次女は二つ。そしてこやつは帽子の都合合わせれば五つの瞳だからだ。私の巨人に似た姿なのも、その予想に拍車を掛けていた。

後期開発機ともなると、やはり与えられる能力が一味違う物になるのだろう。長女は性格がぶっ飛んでいるが、こいつは設定がとんがってる！　どうか性格はマトモであつてくれ！

『問われる前に言つてやろう！　俺様の名は海賊船兼船長のネプチューン!!　この海賊団を仕切る、熱い、海の、漢だぜ!!!』

一カメ、二カメ、三カメとカメラ目線を決めて、ポーズもぼつちりに決め台詞。あー、こいつもダメつばいなあ。

巨人の肩の上でげんなりしていると、突然スマホが着信音を鳴り響かせる。こんな時に掛かつて来る様な相手は一人しか思い浮かばないけど、嫌だと思つて放置すると絶対に碌な事にはならない気がする。

シブシブと通話ボタンをスライドさせ、ついでにスピーカーボタンもぼちつとな。

『はーい、アナタのお耳の不協和音。巨神ヘステイア、十七歳です。そろそろ次の町に付いた頃かと思つてお電話してみましたー。あ、間違つてもヘステイアさん十七歳とか

言っちゃだめですよ？ もし言われちゃったらその時は、焼きます」

やはり貴様か。お耳の不協和音って、自分の性格自覚してるのかもしかして。あと、焼きますって所だけドス効かせていて怖い。

まあ、ちようど良いと言えればちようど良いか。次男の巨神っぽいのに出会った事を伝えておこう。

「『おい、人と話してる時にスピーカー通話するとか、お前のマナーは地獄に落ちるレベルだな。大体、このネプチューン様が——』」

「『あらあら、この声は？ あらあらあら？ もしかしてもうポセイドンちゃんにお会いしていたのですか？ でも今ネプチューンって……。あらあらあらあら、まあまあまあ。もしかしてポセイドンちゃんったら、また？』」

「『へ、ヘスティア!? ヘスティアねーちゃんか!? ちよつまつ、子分達の前でそれ以上言うなああああ!!』」

あれか。友達が家に遊びに来てる時に、部屋に入ってきて色々暴露する年上の家族的なアレか。いわゆる公開処刑って奴だな。哀れな……。

長女の巨神の暴露攻撃の前に、音を掻き消そうと言うのか水上で地団駄を踏み始めた次男の巨神。そこにはもう、先程までの自信満々な態度も、大勢の部下への沽券も有った物では無い。声色も相まって、大きな子供が暴れているかのようだ。

さて、この收拾をどうやってつけねばいいのだろう。本当に厄介な十七歳だよ全く。

次回、第十九話『透けて見える!』に続く。

## 第十九話『透けて見える!』

前回のあらすじ。

海賊船からの砲撃はノーコンだった。海賊船が座礁船にジョブチェンジ。中から鮫肌な亜人がたつぷりご登場。そして現れる第六の巨神。海賊船の正体は巨神だったと驚いて居たら、何時もの十七歳から電話が。そして始まる長女から次男への精神攻撃。誰かこの收拾を着けてくれ。

子供の喧嘩つてあるじゃないですか。戦い方なんて分からない様な子供同士が、それでも精一杯手足を振り回して勝敗を決め様とする小さな決闘。そのスケールが大きくなると、こんなにも厄介な事になるんだなあ……。

『おおおおおおお!! 今すぐその通話を切りやがれ! 切らないなら、切りたくなるようにしてやるからなあ!!』

姉の精神攻撃に耐えかねた次男君、何と矛先をスマホを持つ私に変えてぎぶんぎぶんと浅瀬を突進して向かって来る。表情は変わらないのだが、その声からはとんでもない怒りが伝わっていた。

気持ちにはわかるよ。私だってアレはウザイ。

『ですからねー、ポセイドンちゃんは厨二病？　って言うのを患っているってデメテルちゃんと言ってますして、自分の名前を変えて他人になり切ろうとするんですよー。今回はきつと鮫人さん達と意気投合して、海賊ゴツコをしたくなってしまうたようですね』  
『ぎやああああああああ!!　ブッコロ!!!』

正直同情しちゃうよこれは。まあ、通話は切らないんだけど。だって聞きたい事があつたし。その為にも、海賊船の巨神には犠牲になつてもらおうとしよう。

目前に迫つて来た海賊船の巨神に対して、私の巨人は何も言わずとも両手を差し伸ばして防ぎに入る。お互いの両手ががっちり組まれてがっぷり四つ。ぎりぎりど力と力がせめぎ合い、足元の地面が踏ん張つた為にはぼこんと抉れて行く。

思えば、私の巨人と拮抗する様な力を持った敵って、今回が初めてなのではないだろうか。今までは人型じゃなかったり、同じ巨神でも実力に差が在ったりでまともに組み合つた事なんてない。そして、相手は明らかに後期開発された可変型だ。下手をするとな性能で負けている可能性がある。

組み合うのは危険だろうか。でも、離れても攻撃手段が無いしな。判断に迷いが生まれてしまう。

『考え事とは余裕だなあ、オラア!』

その隙を突かれて、押し返すばかりだった海賊巨神が急に後退した。前につんのめった所に、巨人の胴に向けて鋭い膝蹴りが叩き込まれる。肩に捕まっている私にまで、ビリビリとした衝撃が響いてきた。

続いて、下がった頭目がけて肘が振り下ろされるが、それは機敏に反応した巨人が腕を振るって弾き飛ばす。よし、胴体がら空き、右ストレートだ!

『どわっ?! やるなあ、コノヤロウ!』

誰が野郎だコノヤロウ。

胴体に拳を当てられた海賊巨神は、タタラを踏んで浅瀬に後退。そのまま自分から大きく跳躍して、何と水上に立ち上がり水柱を上げて水上スキーさながらに高速移動し始めた。

何をしようとしているのか不安はあるが、これで何とか距離が出来た。今のうちにトカゲのおっさんを避難させて、十七歳の巨神に聞きたい事を聞いてしまおう。

あれ、そう言えばさつき、胴体に思いつきり膝蹴り入れられてなかったつけ。サツと血の気が引いて、手すりを掴みながら慌てて下を覗き込む。

うわわわ、おっさん!? 生きてるかトカゲえ!?

「トカゲじゃないドラゴニートだ! こっちは気にするな! 思いつきり暴れて、ワシに巨神同士の戦いを見せてくれ!! 期待しているぞ!」



心配したとうの本人は、なんと遠く離れて見物している鯨人達と一緒に居た。船長つぼいけど船長じやない大きな鯨人の隣で、なんか勝手な事を言つて両手と尻尾をブンブン振っていた。あの野郎楽しんでやがるな。

あれは後でシメるとして、次はスマホの先の十七歳をどうかしよう。そもそも今襲われてるのは、殆どこれが原因の様な物だ。

『もしもし、聞いてますかー？ それでですねえ、ポセイドンちゃんは——』

悪いが世間話はそこまでだ。というか、あからさまに海賊巨神の怒りを煽るような話ばかりしおつて、あからさま過ぎてお前の思惑が透けて見える！

どういうつもりで私達を巨神達と接触させ、あまつさえ今回は戦わせようともする。一体何を考えているんだ。

嘘をついていないとしても、言つてない事が沢山あるんだろう。例えば、クロノスの事についてとか。そういうのを一切切話してもらおうか。煙に巻いたり、時間切れで逃げたりしな内にな。

はー、一気に言つてやった。こういう喋りまくる奴には、反論させずにこつちも一気に言うに限る。

『……………。え？ なんですつて？ 良く聞こえませんでしたー』

ここでその切り替えし!? 難聴系主人公か!? ああああ、分かつてはいるのに相手の

ペースに飲まれてしまう! ツッコミを入れてしまう!

「俺を無視してんじゃねえぞオラア!」

海上を大きく旋回して、再び正面から急接近して来る海賊巨神。両の手を前に突き出して、両手の五指を全てこちらに向けて来る。あ、なんか嫌な予感。正面、左手の防御技を!

巨人に指示を飛ばした瞬間、相手の向けてきた指先が炎を拭き上げた。巨人が右の掌で私を庇いながら、装甲を展開した左手を前に突き出して光の円壁を掲げる。そしてそこに、殺到する様に無数の弾丸が飛んで来た。

先に壁にぶつかって動きを止められた弾丸に後から来た弾丸がぶつかって、バチュンバチュン火花を飛ばして弾け飛んでいく。マシンガンか! 指が全部マシンガンなのかアレ!?

壮絶な銃撃で足止めをされている所に、更に海賊巨神の両肩に回った艦首部分のパイプから水中に向けてボトボトと細長い魚みたいな物が投下される。それは水の中に落ちると同時に推進を開始して、白い軌跡を海面に刻みながらこちらに向けて突き進んで来る。そうして、巨人の足元の海岸線に突き刺さると同時に大爆発を起こした。

あれは魚雷だ! 飛び道具いっぱいだな羨ましいぞ! 下から熱風が吹き上げて来て熱い熱い!

『こいつで、トドメえ!!』

叫びと共に背中から二連装の砲台が競り上がって来て、こちらに狙いを定めると同時に一斉射。ビックリ箱かお前は。

音速を越えてるはずなのにこつちに迫って来るのが見えてしまった巨大な砲弾が、足元を爆破されて態勢の崩れた巨人の、その展開していた銃弾塗れの円壁に連続して砲弾がぶち当たり更なる大爆発を生み出した。

着弾の寸前で思わず目を瞑ってしまった、続いて襲ってくる振動と轟音に歯を食いしばって必死に耐える。くっそ、手すりを掴んでいて耳を塞げなかった、耳がキーンとして頭もくらくらする。それでも戦況を把握しようと、必死に目を開けた。

とりあえず、自分は大丈夫。巨人は……、両手の分厚い装甲版を掲げて何とか防御した様だ。無事で良かった。

『はーっはっはっはあー! どうしたよおおオラア! こんなもんでやられるわけねーんだろ、かかって来いよ!』

水上で挑発的に喚きながら、ザバザバと波を切り八の字に蛇行する海賊巨人。煽りおる。くっそ、こつちに飛び道具が無いからって良い気になりおって。痛む耳と相まって、私の腹の虫はご機嫌斜めだ。

凄いい悔しい! せめてこつちも水の上を自在に移動できれば!

と、そこで巨人の瞳が私の方に向けられているのに気が付いた。痛みで顔を顰めていたのが気になったのだろうか、それに対して大丈夫だと示す様にぐつと親指を立てて見せる。

その次の瞬間、巨人の両手両足の装甲が全て同時に展開し、生まれた溝に光が満たされて紋様を浮かび上げた。手にしたままだったスマホの通話画面に割り込んで、巨人からのメッセージが書き込まれる。

そこに書かれていたのは『system cronus』の文字が一つ。

「お、いよいよ本気になったか? いいぜえ、齒ごたえのあるやつは好物だ——ゴツ!?!」

気が付いたら、巨人が宙を飛んでいて、海賊巨神の顔面にドロップキックをぶちかましていた。

下手なビルよりもデカいはずの海賊巨神が木の葉の様に吹き飛んで、海面を石切みたいに二度三度と跳ねる。そこへ更に、海面を走って追い抜いた巨人が先回りして、飛んで来た海賊巨神をサッカーボールみたいに蹴り上げた。

恐らくは、海に足が沈み込む前に次の足を踏み出して、海の上を移動したのだろう。何が何だかわからない。ただ一つ分かるのは、巨人が戦えると言う事だ。

そこからはもう、一方的だった。跳ねあがった体を両手の拳で無造作に叩き落とし、

無抵抗の体に向けて殴る蹴るわの暴力の嵐。最後にまた思い切り蹴飛ばされて海面を滑って行き、海賊巨神の体は陸地の岩場に叩きつけられる。

どういう材質なのかは分からないけど、今でも相手の体はへこんだりしない。でも、思わず目を背けたくなるような攻撃の数々に、ついには悲鳴すら止んで動かなくなってしまう。

その光景が怖くなって『もういい！ もうやめて！ もう十分だから！』と必死に叫び声を上げた。このまま続けさせていたら、何だか巨人が私の知らない別の何かになりそうな気がしたのだ。

動かなくなった海賊巨神にさらに腕を伸ばしていた巨人は、その声を聴いてびたりと動きを止める。同時に、各部の装甲から走っていた光が消えて、展開していた装甲も元の形状に戻って行った。

その様子を見て、両足がガクガク震えて思わず足場の上に座り込んでしまう。ああ、止まってくれて良かった……。

「勝ったか……」

「負けた……か……」

遠くの方でうちのトカゲとでつかい鮫人が、殆ど同時に呟いて溜息を吐いていた。

次回、第二十話『恥ずかしい!』に続く。

## 第二十話 『恥ずかしい！』

前回のあらすじ。

十七歳のせいで戦闘になった。マシンガンとか魚雷とか砲撃とか、こっちに飛び道具が無い事を良い事に一方的に撃たれまくる事に。なんか巨人が海の上を走れるようになって、最終的に相手をボコボコにした。正直怖かったです。

唐突に始まった巨人対巨神のガチバトル。勝敗は私の巨人が勝ち取ったが、正直浸りきれずに高揚感は一切ない。

岩場に叩きつけられた海賊巨神だが、流石に巨神の姉弟は頑丈だったらしい。あれだけボコボコにされたのに、多少汚れただけで目立った損傷は見かけられない。だが、ダメージ自体はあったのか、あんなに喧しく叫んでいた声は聞こえずに今は気絶でもしているかのように沈黙していた。

『『どうやら勝てたようですね、おめでとうございます。無事にシステムクロノスも起動出来た様子で、おねーちゃん一安心です』』

仮にも弟がぶっ飛ばされたのに、それで良いのか長女十七歳。と言うか、まだ繋がっ

ていた事にびつくりだよ。さっきの聞こえない振りではぐらかしてる間に、何時も通り通話を切られると思っていたのに。

『心外ですね。私はそんな鬼畜外道なつもりはないのですが。これでも、嘘は言わないヘステイアおねーちゃんとして、姉弟の間で通っているんですよ?』

嘘は言わないけど本当の事も言わない、の間違いじゃないのか? 今までの言動を聞いてると無性に胡散臭く感じる。正直、この言動に振り回されて、この先も旅を続けて良い物なのだろうか。

『あらあら、ずいぶん疑われてしまいましたね。しょうがありません、それなら一つだけそちらの質問にお答えしましょう。知りたい事を何でもおっしゃってくださいませ』

む、これは意外だ。また煙に巻かれるかと思つたのに。だが、何でもかんでもはぐらかすこいつにしては、ずいぶんな譲歩と言えるかもしれない。しかし一つだけか、悩むなあ。本当に十七歳なのかとか聞いたら、そんな訳ないじゃないですかとかマジトーンで返つて来そうだし止めておこう。

うーん、いざ何でも聞けるとなると迷つてしまうな。私達を他の巨神に合わせようとする目的? それとも、何か私達が知つておいた方が良い事を黙つてそんな辺りを突いてみようか。くつ、一つだけと言う縛りが余計に考えをかき乱してくる。



んんんんん、そうだ！ アレにしよう！

『え？ 私の動力について、ですか？ 本当にそんな事でいいんですか？ まあ、私は全く構いませんけど……』

よくよく考えればコイツについて一番知りたい事は、『何で動力の欠陥で長い眠りにつくとか言つてたくせに何度も連絡してきているのか』だ。それに、こいつらの動力について知識があれば、もし次に巨神と戦う事になつても有利になるかもしれない。その辺の事をキリキリ答えてもらおうじゃないか。

『そうですね、簡単に言うなら私達は時間を食べて動いています。時粒子動力変換炉。通称、タイムコンバーターによって、理論上は無限の動力を得られるとして作られました。前にも言ったとおり、私はその動力炉の動作試験タイプとして作られています。そしてその試作の動力炉は時粒子の変換効率が悪く、今の世界では活動可能になるまで時間が掛かるのです。それが、大体一週間ぐらいでしょうか。一週間つて長いですよね。私にとつては、永き眠りと表現してしまう程に。うふふふ……』

相変わらず一気に喋る奴だな。そして、時間、時間かあ……。え、どうやって時間を動力にしてんの？ 時の流れを帆に受けてくつて奴なのかな。さっぱり原理が分からないが、多分私の頭じゃ詳しい理論を聞いても解らないんだらうな。

そして、一週間か……。紛らわしい言い方をしやがって、また何千年も眠りにつくか

と思うだろあんな言い方じゃ。

「『あらあら、あんまり難しい事を考え過ぎると、知恵熱出しちゃいますよ? それに、三千年の長い月日を地の底で過ごししてきたのは本当なのですから……。』 ついつい、こうして連絡を取ってしまうのです。ごめんなさいね。ご迷惑でしたよね」

そういう物だろうか。そういう物か。しかしまあ、永久機関で動いているとは恐れ入った。それなら、巨人の燃料切れとかは気にしなくても良いのかな。時間なんて、ありふれた物なんだろうし。

あと、別に迷惑とかは感じてないから。こつちだつて話し相手は幾ら居ても困らないし。だから、そんなに落ち込んだ声出すなよな。

「『今私の事を可哀想と思つてしまいましたか? その気持ちをご大事にしてくださいね。私つて、とつても可哀想な地中暮らしですから。うふふふ』」

こんな奴を一瞬でも哀れんだ自分が、非常に恥ずかしい! ああああああ、やつぱりコイツの性格は最悪だ! うちの子が真似しない様に注意しなくては!

「『……………。さて、それでは約束通り質問にはお答えしましたし、今回はこれで失礼させていただきますね。また、次の巨神に出会いそうな頃に連絡させていただきます』」

む、確かに約束は守つてくれたしな。次辺りには何で巨神に会わせるのかも聞かせてくれ。つて言うか聞き出してやる。だからまたかけて来いよな。こつちからかけて

も繋がらないんだし。

「うふふふ、そうですね、考えておきます。では、まだまだ苦勞すると思いますが、挫けないでくださいね？ 陰ながら応援しています。もちろん、クロノスちゃんの教育が上手く行く事も。頑張ってくださいね、お母さん？」

おう、頑張ってお母さんするぞ。それだけは最後まで頑張ろう。

とりあえずは満足して、私達は通話を終えた。まだまだ分からないことだらけだが、今はこれで良しとしておこう。役目を終えたスマホを胸元に戻して、ふうつと大きく溜息を吐く。色々疲れたよ全く。

それから後。

巨人の肩から下ろしてもらって、下の連中と合流する。トカゲのおっさんは何やら、船長っぽいのに船長じゃない鮫人と話し合いをしていた様だ。余程熱中しているのか、こちらに気が付く様子が全くない。

おい、トカゲのおっさん、こっちは話しつついたぞー！

「トカゲじゃないドラゴニユートだ。おお、そつちも話が付いたか。ワシも今水中の遺跡の話……」

あん？ どうしたんだよ、鳩が豆鉄砲喰らったみたいな顔して。私の顔に何かついているのか？ 別に怪我もしてないし、むしろ何だか体が軽くて妙にスッキリしてるぐら

いなんだが。

「おまえさん、その髪はどうした？　ずいぶん短くなつとるようだが」

は？　髪？　言われて後頭部に手を伸ばすと、ちゃんと何時も通りの長い髪が——無い。待て待て落ち着け。とりあえず、スマホと巨人の視覚をリンクさせて、自分の姿を映させてみよう。

ええええええ!!　髪が、髪が無くなつてる!!　背中まであつたのに、ショートになつてるう!!

「ふむ、砲撃に巻き込まれて千切れたか……う？」

大声を上げて狼狽えていると、大柄な鮫人がぼつりと呟く。砲撃つてさっきの戦いの時のか。と言う事は、下手人はアイツか！　岩場に叩きつけられて、未だに目を覚ましていない海賊巨神！

キツと睨みを入れると、下手人に向かって駆け出した。そして、投げ出されている足目がけて飛び蹴り！　もちろんそれだけじゃ気は済まない。げしげしげしと連続で踏みつけてやる。

『う……お、おお？　何で俺、陸の上に……？　つて、あああつ！　てめえ！　俺の動力を奪いやがったな！　もういつべん勝負しろやコラア!!』

目を覚ましたか、乙女の髪 of 仇め！　この髪を見ろ！　お前の砲撃で自慢の髪がこん

なに短くなって！ とにかくもう、悔い改める！

『な、なんだ？ 髪？ そんなもん砲撃で焦げたり千切れたりしてたら、お前の頭は今頃ミンチになってんだろうが。操り人ならお前の巨神が守ってんだから、かすり傷一つ負ってない筈だろうが』

……………。それもそうか。そもそも私の巨人が守ってくれたんだし、髪の先も焦げたり千切れた様にはなっていないみたいだしな。じゃあ、この髪はいつたい…………。

『そんなもん俺が知るかよ。それより勝負だ勝負！ 今度は負けねえから——』  
「そっまでだ」

そんなもんって言われた。自慢の髪だったのにそんなもんって…………。

さっきの戦いの決着に不満があるのか海賊巨神が騒ぐが、それを落ち着いた声色で大柄な鯨人が諫めた。部下の筈の鯨人の言葉の筈だが、それでびたりと海賊巨神は口を閉ざしてしまう。なんだろう、この二人の関係が良く分からない。

「どんな形であれ、お前は決闘で負けた。それを後からぐだぐだと難癖をつけるのは、海の男としては失格だ。それは理解しているな、船長？」

問い掛けに対して返事は無い。沈黙は肯定と受け取ったようで、大柄な鯨人は言葉を続ける。何だかこのやり取りが、私にはすごく気になってしまう。

この二人は、私に無い物を持っている様な気がするから。

「俺はお前に、船の仲間達の事を良く見られる様に、その生き様に責任を持たせてくたえて長を任せた。だからこそ、その責任から逃げて欲しくはない。……解るか?」

「『わかったよ……。ああ、今回は俺の負けだ。認めるよ……。』」

これは親子の会話だ。親が子に、自身の背中を見せる。伝えたい思いを真っ直ぐにぶつける。そんな父と子の対話なんだ。私にはそれがとても眩しい物に見えて、凄く……悔しい。

「どうだろう今回の一件の落とし前、この俺に取らせてはもらえないだろうか?」

大柄な鮫人は続けて、今度は私に向かって言葉を投げかけて来た。落ち着いているのに力強くて、何かを背負っているのが伝わって来る言葉に思わず気圧される。

しばらく頭の中でぐるぐると言葉をせめぎ合わせ、なんとかこくりと頷くのが精いっぱいだった。

私は巨人の力で戦いには勝てたけれど、親としての度量では完全に負けたのだ。そんな敗北感で、胸の中が占領されてしまった。

次回、第二十一話『ピクピクしてる!』に続く。

## 第二十一話 『ピクピクしてる!』

前回のあらすじ。

自称十七歳の巨神から割と重要な事が聞けた。私の髪が何故か短くなっている事にびっくり。そして、親としての格の違いを見せつけられて、物凄い敗北感を味わってしまった。

落とし前は付ける。そう宣言した大柄な鮫人は、勝負に勝った巨人の保護者である私に対して交渉を持ちかけて来た。自分達には蓄えた財宝を放出する用意があり、それ以外の要求にも応じる事が出来る。それで足りなきや俺の首をやるから、他の奴らは見逃してくれないかと。

正直、そんな事を私に言われても困るだけなのだが……。首つてなんだよ首つて、戦国時代か。そもそも、その体のどこら辺からが首なんだよ。

どうも話を聞く限りでは、この海賊団は最近になって海底の遺跡で巨神を発見したらしい。そしてそれから彼らは、巨神を乗り物では無く仲間の一員として受け入れた。船長を担っていたのは仕事を見て覚えさせる為と、一人で勝手に突っ走る性格を矯正する

為だったらしい。

「俺あ海賊だ。海賊の生き様しか知らねえ。だからこいつには、俺は海賊の生き方しか教えられねえ。だからこそ、そこには一片の妥協も入れちゃあならねえんだ」

そう語った大柄な鮫人は、胡坐をかいて不貞腐れる海賊巨神を優しげな眼で見つめていた。私はその海賊巨神をつんつんと突く巨人を見つめる。果たして私達は、この親子のようになれるのだろうか。

結局。私が海賊団に要求した事は、港町の漁師達への償い。そして、可能ならば和解して欲しいと頼んだ。私達が出会った漁師達は投石機を持ち出す程困っていたようだし、私達が居なくなってもわだかまりが続く様なのは正直気分が悪い。だったらこの際、纏めて解決してくれと要求したのだ。

お願いとか提案だったら、この話はおそらく聴いてはもらえなかつただろう。海賊を生業にするという事は、生半可な気持ちで船や町を襲っている訳では無いのだろうか。だから私は、彼等の稼ぎ場の一つを諦めると要求したのだ。殆ど棚ぼたで手に入れた勝者の権利だったが、この際有効活用させてもらおう。

「解った。その条件を呑もう。今まで奪った物と同じだけの物品と、詫びも込めて貿易品になりそうな物も届けよう。ただし、あの港町の奴らが和解を受け入れるかどうかは保証できないぞ」



それは理解している。実際に襲撃され脅された側が、その相手を許せるかどうかなんて当事者にしかわからない。だから私がしようとしている事は、大きなお節介なのかも知れない。

でも、せつかくうちの子が掴み取った勝利なら、最大限に有効活用してあげたいのだ。結果として、海賊と港町の和解はあっさりと成立した。と言うのも、街に戻って行つた漁師達に促されて、町人のほぼ全てが巨神同士の戦いを目撃していたからだ。海賊巨神の戦闘力も、それを倒した私の巨人の事も全て見ていた町人達は、そんな物と事を構える位ならとあっさりと和解を受け入れた。

大柄な鯨人の差し出した物が莫大な価値があり、その一助となったのもある。金銀財宝とまではいかないが、遺跡で見つかった価値のある発掘品の譲渡と、それから更に大型の海洋生物を確保して来るのを確約したのだ。巨大な肉食生物の跋扈する危険な外洋でも、自在に暴れ回れる巨神を有しているこの海賊団ならではの条件だろう。

それでこの話はお終い。いさかいてもわだかまりも無く、利害が一致して和解は成立だ。おめでとう、良かったな。巻き込まれたこっちは、堪ったモノじゃなかったけど。

そうして、私達はまた旅の空。港町で必要な物を買ひそろえて数日休み、しつかりお風呂に入ってから次の巨神を求めて旅に出た。髪を洗うのが楽になったのだけは、この騒動で唯一の収穫かも知れない。

うん、完全に強がりだなこれは。

旅するうちに日が暮れて、焚火で暖まりながらぼんやりと星空を見上げる。ついでに、上から覗き込んで来る巨人の顔も視界に入る。

ああ、そう言えば今日はまだ絵本を読んであげてなかった。でもごめん、もうちよつとだけ待つてほしいなあ……。

「どうした、道に迷ったような顔をして。今日は一日中そんな顔をしていたな。巨神も心配して、お前さんをずっと見ておったぞ」

ああ、見られているのは絵本の催促じゃなかったのか。いかな、そんな事にも気が付かないぐらい煮詰まっているのか。教えてくれてありがとう、ドラゴニユートのおっさん。

「トカ——そうだ、ドラゴニユートだ、トカゲじゃない。まったく、減らず口だけは健在だな。一体何をそんなに悩んでおるのだ。髪についての愚痴は港町での滞在中に、とつくと聞いてやっただろうに」

おめー、女の髪についての愚痴がああ程度で終ると思うなよ。それはそれとして、今の悩みは別口である。こうして口を利いたのも良い機会かもしれない、すこし相談を試みよう。

なあ、おっさんから見て、私は良い母親になれているかな？ 良い親つてのは、何な

んだらうな？

「何だ藪から棒に。それがお前さんの悩みの種だったのか？」

「そうだよ、悪かったな唐突で。これでも結構真剣に悩んでるんだぞ。髪の問題が後回しになるぐらいには、真剣に悩んでいる。つまり、今のところは悩み事ランキング第一位だ。」

それはともかく、何て言うか一人で考えてると色々煮詰まって来て、何でもいいからアドバイスみたいな物が聞きたいんだ。思っている事を素直に打ち明けると、トカゲのおっさんは焚火の火でお湯を沸かしながらうーむと大きく唸った。期待感から、思わずその顔をじつと見てしまう。

「ワシもまだ伴侶を持ったことは無いからよく分からんが、子供を育てるにあたって一番必要なのは子供の事を考え続ける事ではないか？ 千差万別な種族が居るこの世界で、判で押した様な模範解答なんぞ無いだろう。であれば、後はどれだけ子供の事を思つてやれるか、子供の為に何をしてやれるかが焦点になるのではないか？」

子供の事を考える。でも、それつて親なら当たり前の事だよな？ 子供の事を考えない親なんて、親とは呼べないんじゃないのか？ そんな当たり前の事をしてるからつて、子供の為になるもんなのか？

言われた事に更に思考が乱れる私に、トカゲのおっさんは至極落ち着いたまま言葉を

続ける。

「その点、お前さんは常に巨神の事を考えておる。絵本にしろ清掃にしろ、自分で考えてしてやった事なのだろう? ならば後は、その気持ちを忘れずに接して行けばよいだろう。子は親の背を見て育つとも言う。お前さんが子に見せている姿は、少なくとも誇つて良い物だとワシは思うぞ」

そう、なのかなあ……? ああでも、口元がちよつと緩んでしまう。私つて、こんな承認欲求強い方だったのかな。……うん、そうだな、相談して認められただけで悩みが和らぐなんて、私はどうも飽きれる位にチョロイらしい。

まあ、ありがたい事に気持ちは少し軽くなってくれた。

話している間にお湯が沸いて、おっさんがそのお湯を使ってティーバッグのお茶を淹れてくれる。受け取って啜ると、飲みなれないが頭がスツとする様な香りが喉の奥を抜けて行った。

しかし、この世界は結構旅に役立つ物が売っているな。何処かで大量生産でもしているのだろうか。

「西の方にある大きな帝国では様々な遺物が集められていてな。工場と言う所で様々な物が作られて、トレーダーによって各地の町へ売りに出されている。その代わり帝国はサルベイジャーが集めた遺物を集めて、更に帝国の力を強大にしておるのだ」

へー、そういう風に経済が循環してるのか。でも、それが本当なら巨神とかもその帝国が集めてそうだよな。どうしても巨神が見つからないなら、何時かはその帝国にも行かないといけないかもしれない。

なんにしても、それはこの世界をじっくりと探してからでも問題は無いだろう。

「ふつ、どうやらもう大丈夫そうだな。そうだ、お前さんは沈んでいるよりも、能天気の前に進んでいる方が余程似合うと言う物だ」

止めてくれませんかねえ。その言い方だと単純馬鹿みたいに聞こえるじゃないですか。せっかく良い気分だったのに、イラつきでこめかみがピクピクしてる！ お前なんかやっぱりトカゲだ。トカゲで十分だこのトカゲ！

「トカゲじゃないドラゴニユートだ。元気が出たのなら、巨神を構ってやれ。さつきからずっと、お前さんの事を見ておるぞ」

言われなくてもそのつもりですー。まったく、トカゲはこれだからまったく。……ありがとう。

正直、私にはまだ自分が何が出来るかは分からない。でも、考える事だけはこれから続けようとは思う。それが私の為にも、私の巨人の為にもなるのなら尚更に。

その為にもまずは、今夜も巨人に絵本を読み聞かせよう。いっぱい顔に抱き付いて、よしよししてあげるのも忘れずに。愛情表現はしつかりが大事だろう。

明日を憂う前に、まずは今日をしっかりと。私はお茶を飲み終えてから、うーんと伸びをして勢いよく立ち上がるのだった。

次回、第二十二話『弄り回したい!』に続く。

## 第二十二話 『弄り回したい！』

前回のあらすじ。

海賊流のケジメの付け方を見せていただきました。再び旅に出て、胸中に浮んだ思いに悩み苦しむ。トカゲのおっさんに相談してみたら、チョロつと気持ちが悪くなった。とりあえず、明日の為に今日を頑張ろう。

無尽の荒野を駆け抜けて暫く、私達は今は無量の砂漠地帯を疾走していた。

舞い上がる砂埃から逃れる為に大きなレンズのゴーグルをしつかりと嵌め、頭からすっぽりと布を巻き付けて顔を覆い隠す。直射日光も砂塵も、今この場では人を殺す脅威となるからだ。

陽の光さえしのげれば、ジリジリと身を焦がす様な暑さは大分和らぐと言うもの。巨人的のおかげで砂漠を泳ぐ危険な生き物に怯える心配も無いので、後はひたすらに次の町を目指せばいい。

そう、思っていたのに……。

『その巨神、止まりなさい。ウーツ、ウーツ、ウワン!! ピーポー、ピーポー!!』

この吾輩が止まれと言ったら止まるべきではないでしょうか!! 人の話はじっくりさつくり、正直に聞くのが世の情けですぞ!! じゃすと、あ、もーめんつ!!」

よりによつてあいつらに見つかるなんて、きつと私達の中にとんでもない不幸体質な奴が居るんだらう。一体どいつだらうなあ。なあ、トカゲのおっさん?

「トカゲじゃないドラゴニユートだ! 少しずつだが追い付かれています! あいつ等の方が足が速いぞ、どうする!」

おっさんの言葉にちらりと背後を盗み見る。巨人の肩の足場から見えるのは、ホバー推進の巻き上げる砂塵と、その後方から猛烈な勢いで迫つて来る半身半馬の巨神。そして、その頭の上で無表情で佇むメイドと、そのメイドに後頭部を鷲掴みにされながら拡声器でわめいている白衣のカピバラの姿が見えた。

「『今、また現れやがったなこのげつ歯類つて思った? ごめんねごめんね!! だが我輩は謝らない! 今日こそは我輩の超絶頭脳と西の——イテテテテテテテテテ!!』  
助手君、助手くーん! 割れちやうから、いい加減本当に割れちやうから! クルミの様に!!」

相変わらずだなああの漫才コンビは。足して二で割ると丁度良いんじゃないだろうか。闘う度に強くなつて行くレプリカ巨神だが、今回はそれが顕著なのかもしれない。こちらは全速力で走行していると言うのに、引き離すどころか距離がどんどん詰められて



いる。

「ふははは、怖かろう。今回は以前の二倍の機動力を持たせているのである！ スピードだけなら誰にも負けません！ 無限軌道こそ漢の浪漫!! パワーアップを繰り返すだけの殺し合いなんてもうたくさんだ！ 今回こそはその巨神を倒して我輩の科学力の勝利を認めさせてやるのであ————る!!!」

我ながら厄介な奴に目を付けられたものだ。最初は確か研究に必要だからって攫われかけただけの筈だったのに、何時の間にやら打倒目標にされてしまってる。あ、やっぱり不幸体質なのは私なんじゃないだろうか。

とにかく、こんなだだっ広い砂漠で迎え撃つなんて、機動力がある相手に対しては悪手でしかない。もっと足場の悪い所に逃げないといけない、ってトカゲのおっさんが言っていたので現在逃走中なのだ。

頑張れ私の巨人、あんな半分馬に負けるんじゃないぞ。

「あれー？　なんか前見た時と雰囲気ちがわね？　もしかして、髪切った？　イテッ！　あれー？　吾輩今世間話しただけ——あがががが割れる！　割れる！　助手君もしかして、嫉妬？　嫉妬なんですかああああああつ!?　イテテテテ!!!」

楽しそうだな向こうは。何で私がいづらのダシにされてるんだろうか、凄い微妙な気分になるから止めて欲しい。と言うか、あのメイドさんはあのカピバラのどの辺が良

いんだらうか。謎である。

謎と言え、彼女のあの胸の大きさは何だらうか。何を食べたらあんなになるんだらう、私の方はこんなにも寂しいと言うのに。例えるなら小玉スイカ？ 何あれむっちゃ弄り回したい！

いかんいかん、嫉妬で思考が変な方向に飛んでいる。今は状況に集中しよう。

「っ!?」なんと、このタイミングで出くわすのか!? 進行方向右に新しいお客さんだ!!」下から聞こえて来た悲鳴みたいな叫び声に従い、私は視線をそちらに向ける。そこには、こちらに真っ直ぐと向かって来る砂の壁が。いや、砂を纏いながら迫って来る巨大な生き物が視界一杯に映っていた。私の巨人よりもデカイ。これはもう、動く島か何かと言うレベルだろう。

こんなクソ忙しい時に、なんとる悲報の協奏曲。厄介事と言うものは重なる物と言うのが相場ではあるが、これはもう運が悪いと言うレベルではないのではないだろうか。『おお、あれはなんと、砂漠地帯に住まう幻の巨大生物ではないか!! うおおおお、でっけええええっ!! 巻き込まれたらせっかくの強化したレプリカ巨神が台無しである! じよ、助手君助手君、回避回避回避してー回避してー!!!』

追手達も遅れて事態に気が付いたらしい。騒がしく喚きながら、私達を追いかけるルートから外れて方向転換していく。大方、こっちに押し付けて逃げ出そうと言うのだ

ろう。

その動きに釣られたのか、はたまた大声に反応したのかは分からないが、横合いから迫つて来ていた砂の壁は釣られる様に半人半馬の巨神を追い始めた。よし、後は全部あいつらに任せよう。

『らめえええええええ!!? おっきいのこつち来ちやうのおおお!!! よし、こうなれば死なば諸共なのである。助手君、あいつらに近づけて巻き込んでやるのであーる!! はつきり言つて呉越同舟!!』

自分達が勝手に逃げた筈なのに、もう一度こつちに向かつて来やがった。何が諸共だ、ふさげけん!

結局並走する形になった巨人とレプリカ巨神を、勢いを増した砂の壁が追いかけて来る。そいつはなかなか追いつけない事に焦れたのか、一度深く沈みこんでからまるで海面から飛び出す鯨の様にその巨体を宙に躍らせた。

空中で長くしなる身体をぐるうりと横に一回転。悠々と頭上を通り過ぎて行くその姿は、生き物であるはずなのに何処か彫像めいた物を連想させる。恐らくは、その鼻先から正面に向けて、二本突き出た立派な牙のせいかもしれない。

あれは魚と言うよりも、とんでもなく巨大なトカゲだ。砂の中を泳ぐ牙付きの蜥蜴とは、本当に非常識な世界だな。爬虫類ならトカゲのおっさんの親戚だろう。ちよつと話

を付けて来てくれないだろうか。

「無茶を言うな! 落ちて来るぞ、しっかり捕まっている!!」

言われてからハツとして、慌てて足場の手すりをしっかりと掴んだ。そりやそうだ、あんなデカイ物が何時までも空を飛んでいる筈がない。奴はその二本の牙を湛える大口を開けて、こちらに向けて緩慢に落ちて来る。程なくして、砂漠中に響き渡るであろう轟音と共に、砂蜥蜴の巨体が砂の海に飛び込んだ。

あんな巨体が砂の中に沈んで行くと言うのに、不気味なほどその影響がこちらには伝わって来ない。巨人に乗っているおかげだろうか、ただ只管に大きな物が通り過ぎる風圧だけが纏った外套と長布の余りをはためかせざるばかりだ。

そしてそれは、一緒に逃げていたあの連中も同じだった。

『おやおやあ!? なんだなんだ意外と大した事ないんじゃないですかあん!? これならびびる必要なんてなかったな、早く帰ってパインサラダとステーキでも——おひよおのおおおのおおおのおおお!!!』

死亡フラグを最後まで立て切る前に、カピバラ博士とその助手は乗っていたレプリカ巨神ごと宙を舞った。潜行してすぐに踵を返して、頭を突き出して来た砂蜥蜴に角で弾き上げられたのだ。あれだけ大声を出していたのだ、さぞ砂中からでも位置が良く分かっていた事だろう。

まるで木の葉の様に巨体に翻弄されて、ぐんぐん上昇を続けるレプリカ巨神。そしてその後を追う様に再び空中に身を躍らせる砂蜥蜴。ぱっくりと大口を開けて、自分より高みに居る獲物を一飲みにしようと言うのだろうか。

「『つああああ!』 この高さはまずい、不味いのである! 助手君、全力で脱出を——」  
何か、カピバラ博士が雰囲気を変えて叫んだ瞬間、空の彼方から一筋の光の線が降り注いだ。

その光は殆ど真上から半人半馬の巨神の胴体を撃ち抜いて、そのまま追従する砂蜥蜴の大口の中に飛び込こむ。そしてその光はあつけ無く、砂蜥蜴の頭をばんつと乾いた音を立てて吹き飛ばした。

は? と、それを見ていた誰かが、その光景を理解できずに思わず言葉を漏らす。それは私だったのかもしれないし、同じ様に見上げていたトカゲのおっさんだったのかもしれない。

もしかしたら、撃たれた砂蜥蜴自身だったのかも。

頭の半分ほどを失った砂蜥蜴の体が空中で失速し、横倒しになりながら砂の大地に向かって降って来る。その体の長大さから、避けようとしても無事で済むとはとても思えない。だったら、こんな時こそアレの出番ではないだろうか。

思い立ったら即実行。巨人に向けて、回避よりも迎撃を指示する。使うのはいつぞや

に巨大ミミズを仕留めた右腕の必殺の技だ。指示を受けた巨人はホバー推進を止めて、右腕の装甲を展開し生まれた溝に光を充填させて行く。

「ばっ！ バカモン！ その武器は相手を風化させるんだぞ?! あの質量を頭の上で砂にしたらどうなるか——」

トカゲのおっさんの必死の叫びの意味を理解した時、巨人は落ちて来る砂蜥蜴に青白く雷光走る光の球体に包まれた拳を叩き込んでいた。時すでに遅し。

いや、巨人の膂力でぶん殴られた砂蜥蜴の体が中空に押し返されている。この隙に奴の体の下から脱出すれば、まだ逃げ切れる可能性があるかもしれない。

「『おおおっ!! おっちる時は胃が浮遊感で包まれるのほおおおお!!』 そして貫通！ なにこれ!? 砂!? お砂で出来てるの!? これはびっくり仰天と共に、博士と助手君は地面に降り立ちます。十点満点!!』」

中空で撃ち抜かれ上下に分断されたレプリカ巨神が、全身を乾燥させてひび割れさせていた砂蜥蜴の体にぶち当たった。朽ち果てた砂蜥蜴に大穴を開けさせて貫通し、それぞれのパーツが砂の大地に突き刺さる。

その衝撃で、砂蜥蜴の体は粉々に砕け散り、私達の頭上に大量の砂がゴバツと広がった。

あのカピバラ、生きてたらひっ捕まえて、泣いて御免なさいと言うまで後頭部の毛を

むしってやる！ ツルツルになった所を、全力で煽って更に泣かせてやる！ 逆恨みだとしても絶対に仕返ししてやるからなー!!

自分でも割と無茶だと思いう理屈を捏ねながら、巨人の掌で庇われた所で私の意識はぷつつりと途絶えた。

次回、第二十三話『意外に固い！』に続く。

## 第二十三話『意外に固い!』

前回のあらすじ。

砂漠で再び出会ってしまったカピバラ一家。追いかけてつこをしていたら、巨人よりデカイ砂蜥蜴に襲われる。空中に跳ね上げられたカピバラ一家と、それを追いかけて飛んだ砂蜥蜴を、天空から降り注いだ一条の光が撃ち抜いた。死体に潰されない為に相手を砂に変える必殺技を使ったけど、頭の上で使った為に大量の砂を被る羽目になる。そこで意識を失ってしまった。

ぴちよんぴちよんと、水の滴りを耳にする。耳が痛いぐらいの静寂の中に響くそれがとても気になって、私は気だるげな微睡みの中から意識を浮上させて行った。

起きて直ぐに視界に映ったのは、焚火の傍でお湯を沸かすトカゲのおっさんの後ろ姿。おはようと声を掛けると、彼は首だけで振り向いて声を掛けて来る。

「……起きたか。この状況下で高いびきとは、ずいぶん呑気な奴だな」

くつ、やめろ、乙女はいびきとか搔かないんだよ。とりあえず、ベシベシと背中を叩いておいたが、あまり効いてないようだ。うろこ状の皮膚が意外に固い! 涼しい顔し



てまた火の方を向いてしまった。

仕方ないのでどっこいせつと起き上がり、とりあえず周囲をきよろきよろと確認する。周囲は真つ暗で焚火の周囲しか見えないが、感覚的に閉所に居る様な気がした。あの砂の洪水の後に、一体私達はどうなってしまったのだろうか。

解らない事は人に聞けばいいの精神でもって、何があつたのかをトカゲのおっさんに尋ねる。それに応えたのは、何故か全く別の声であつた。

「うむ、それにはこの吾輩がお答えしよう。我輩ほどの知恵者に講義をしてもらえろとは、報奨金で学校が建つてしまうのであるぞ。学校では教えてくれない事が目白押しなのである。それはつまり——イテテテテテ、はい、ごめんなさい！ 話を脱線させてごめんなさい！ 助手君、我輩の頭脳が圧殺されちゃうー！！」

何で此処にカピバラ博士が居るのだろう。もちろんその助手であるメイドさんも、カピバラヘッドを鷲掴みにしながら焚火の傍に正座している。トカゲのおっさんの陰になつていて二人とも見えなかつた。まさかこの二人と、こんなに落ち着いて言葉を交わす日が来るとは。

「さて、我々がどうしてあの大量の砂に押しつぶされなかつたか、という質問であるが。その答えは、今我輩らが居る場所、あの砂漠の地下に広がる地下空間にあるのである。なんかアルアルアルって続いて、似非中国人みたいですね」

相変わらずのぶつ飛んだ発言だが、それに耐えながら聞き取った内容はこうだ。

大量の砂が落ちてきた時に、巨人とレプリカ巨神の重量が一点に集まり地面の底——つまりは今いる地下空間の天井が抜けたらしい。そのまま大量の砂と一緒に私達は地下の空洞に入り込んでしまい、結果砂に埋もれて潰される事は無かったのだ。

なんと言うありがちな展開。でも、そのおかげで助かった。

「さてさて、我輩らがなぜここに居るかと言う理由であるが、それはもう実に単純明快。そこな竜人の旦那には既に説明してはいるが、我輩らはそちらに休戦の申し出を持ち掛けに来たのである」

休戦？ 今まで何度もそっちから襲って来たくせに、いまさら何を虫の良い事を言うのだろうか。そんなの全く信用できないし、どんなに信頼を得ようとされたって心が動くとは思えない。

そんな頑なな私に対して、カピバラ博士は実に落ち着いた声色で語り掛けて来る。

「あくまでも一時休戦と言う事である。我輩等は少々困った事になっているし、そちらも巨人がその有り様ではこの空洞の探索にも困るのではないかな？」

至極冷静に追及されて、私は語句に詰まってしまふ。

そう、確かに私の巨人は今、この場所から動く事が出来ない。直立した巨人が天井にまで差し伸ばした、左腕の装甲を展開して光を灯らせた掌の先。私達が落ちて来たと言

う天井の穴から大量の砂が落ちて来るのを、円形の壁を使い停止させて塞ぎ止めているから。

地中に潜れる巨人だけならまだしも、私やトカゲのおっさんは生き埋めになった時点で潰れてしまうだろう。私が意識を失っている間もずっと、この子は私を守ってくれていたのだ。

「この空洞の中を調査するのであれば、こちらは助手君の戦力を提供できる。そこになると、我輩の驚異的な頭脳もお貸ししちやってお買い得！ アッハイ、脱線しません。しませんから締め付けないでください、オナシヤス……。我輩達の利害は一致していると思うのであるが、いかがかな？ 『そちらにとつても、悪い話ではないと思えますが』と言う奴である」

なんだろう、最後の一言で凄く不安になった。

でも、少なくともここから出られる場所を見つけない事には、いずれにしろ進退が極まってしまうだろう。ここは、覚悟を決めるべき所だろう。

それから小一時間後。

しつかりと休息と食事をとってから、私達は巨人をその場に残して周囲の探索に出た。地形の把握と出口の捜索、それからカピバラ博士には他にも探し物があるのでさうだ。

ランタンの明かりだけでは心もとないが、それでも私とメイドさんがそれぞれ一つずつ持てば、周囲を何とか確認は出来るくらいにはなっている。

「我輩の作り上げた傑作機、レプリカ巨神のケイローンに使われている動力炉。今回のそれは通常の三倍を誇る特別製で、大きさも重さも三倍と言う素敵仕様なのである。これは回収せずにはいられぬと言うモノ、スポンサーさんに怒られちゃう! なので、人命救助だと思つて協力してほしいのである」

なんで動力炉を探すのが人命救助になるのかはよく分からないが、それを手伝うのがメイドさんが付いてきてくれる条件なので仕方がない。こんな何が潜んでいるか分からないような所を、トカゲのおっさんと二人で歩くなつてぞつとしない。なんたって、トカゲ顔してるのに学者肌で戦闘とかはからつきしだと豪語しているからな。

そうだよな、トカゲのおっさん?

「トカゲじゃないドラゴニュートだ。それはともかく、作り上げたという事はやはり、巨神達と同じ動力源なのか?」

「吾輩が古代の遺物から発掘したデータを元に、なんとか再現しようとして諦めたタイムコンバーター。その模造品として自力で作りに上げたのが、時粒子人機融合炉。数多の人体実験の果てに、時粒子の源であるヒューマンを内包する傑作。それこそが、通称『時粒子エンジン』なのである!!」

諦めてるなら同じ物じゃないんじやないか？ いやそれよりも、こいつは今とんでもない事を言わなかっただろうか。もしかして、その時粒子エンジンとやらには……、人が入っている？

「イカにもタコにもクラゲにも！ 我輩の長年の研究によりヒューマンの女性、それも十六から十八までの特定年齢の娘には非常に強力な時粒子が観測されているのだ。そんでもって、ちよちよいと融合炉に入っていたら、融合炉はケイローンを動かすに至るエネルギーを生み出す事が出来たのである」

に、人間を機械に入れる？ まさか前に街中で女性を集めようとしていたのは、動力炉に使う為だったのだろうか。だとすれば、やはりこいつはいかれている。今更ながら、こいつに協力したのは間違いだったかもしれない。

「誤解があるようなので言っておくが、我輩何も無理強いて彼女等を利用しては無いのである。ちゃんと同意を取り付けてお給金だって支払っているし、脱出装置や慣性制御等の安全面にも十全に配慮しておる。何よりも、彼女達は身体能力に劣るヒューマンであり、身内に売られるほどに窮しておった者達。我輩の所で雇わねば、路頭に迷ってしまうのである」

だから……。機械の中に押し込めて、あんな危ないロボットに乗せるなんて……。

うまい反論が思いつかなくて、思わずトカゲのおっさんに視線を向けてしまう。助けを求めるような私の視線に、おっさんはふむと一つ呟いて短く息を吐く。浮かんでいる顔色は多分、困惑だろうか。

「まあ、言っている事は間違いではないよ。ヒューマンはこの世界では、圧倒的に生き辛いののは確かなのだ。倫理的に思う事はあっても、それを非難できるほどワシは強くない。今は巨神の歴史を探求する事で精一杯だよ」

そつ! ……そう……、だよな……。トカゲのおっさんだつて、誰も彼もを助けられるわけじゃない。私にだつて出来ない。それ処か巨人の力が無いと、きつと荒野を歩く事も出来ないだろう。

そんな私が、まがりなりにも人助けをしているカピバラ博士に何かを言えた立場ではない。心で反目していても、頭では理解できてしまえる。これは、子供の我儘なんだと。でも、それでもと納得しきれない私の腕が、胸元のスマホに伸びてしまう。

「……巨神の見ている前で、正しさを示したいという気持ちはわからんでもない。だが、世の中には出来る事と出来ない事があると言う事も、立派な教育になるとワシは思うぞ」

くそつ、そうだよ格好つけだよこんな。だから指摘されれば余計惨めになる。こんなのは、胸ポケットに居る私の子には見せたくも聞かせたくも無かつたな……。

ああ、周りの風景同様に、気分が何処までも暗く落ち込んで行ってしまいうさだ。「それはそうと、おぜうさんは何時もその様な語り口なのであるか?」

ナーバスな気分だったのに、カピバラ博士がなんか言い始めた。そうだけど、何?

なんか私の喋り方で、気に入らない事でもあったのだろうか。正直もう、布団に顔を埋めて足をバタバタさせたい気分なんですけど。

まあ、話題を変えたいと言う気は分からんでも無い。で、どうしてまたいきなりそんな事を言い始めた? きいちやるから言うてみい?

「いや、まあ……、なんと言うか、婦女子としてはなかなかどうして、男前な語彙であるからして。正直、こうして言葉を交わしてみても意外性にびっくりしたと言うか何と言うか、とても……」

「……………、おっさん臭い?」

カピバラが遠慮がちに言葉を濁して、トカゲがずはりと直球で言葉の先を口にす。私は無言で腰のベルトから閃光榴弾を引き抜いた。乙女に向かってなかなか面白い事を言ってくれるな、安全ピンに掛けた指が震えてカタカタ音が鳴るってもんじゃないか。

「まてまてまてまてまて、落ち着け! 謝るから! 悪かったから!」

「落ち着いてください! 落ち着いてください! こんな閉鎖空間でそんな物使った

ら、鼓膜が破裂してしまうのである！　うちの職場労災おりないんですよ!?　じよ、助手くん、助手君たすけてー!!」

それからしばらくの間、ぎやあぎやあと三人で騒ぎ合った。そしてメイドさんに、この後むちやくちや正座させられた。無言のままなのに、三人とも従わせられてしまう圧力があつたのだ。

正直、地肌に直接正座するのは辛いんで勘弁してほしいです。

次回、第二十四話『溢れて来る!』に続く。



## 第二十四話 『溢れて来る！』

前回のあらすじ。

気が付いたら光の射さない地下空洞に居た。焚火を囲んでカピバラ博士とおしやべり。一時休戦して協力関係を結び、周囲の探索をする事となった。レプリカ巨神の動力が人間と機械の融合させた物だと聞かされ、そしてそれはあくまで雇用であると言い負かされて落ち込む。後なんかおっさん臭いって言われたので、閃光手榴弾を炸裂させてやろうと思いました。無礼者殺すべし、慈悲は無い。

探索は思いのほか順調に進んだ。何故なら、危惧して居た様な危険な生物との遭遇が全くなかったからだ。カピバラ博士が周囲を検分してみた結果、生物が生息している痕跡は有ったので、恐らく巨人やレプリカ巨神が落ちてきた音を聞いて逃げ出したのだからと言う事らしい。

そしてそれは、この空間に出入り口がある事の証左なのであろう。やはり博士が言うには、出入り口が無いなら逃げ出す事も出来ないから、との事だ。

何だかさつきから言う事が適切で、博士が本当に頭が良い様に見えてしまう。外見は

どう見てもカピバラなのに。

「おお、あった! あったあった、アタタタタタツ!! 探索が終わったあ! ついに見つけ出したのである、ケイローンの下半身よ! 会いたかった、会いたかったぞ時粒子エンジン! これぞまさしく愛だ!!」

何故そこで愛ツ!!? 突飛な事を言い始めるのは今更だが、探し物が見つかった途端にこの荒ぶり様。これは相当、時粒子エンジンとやらにご執心らしい。

中に人が入つてるとの事だが、『生きているけど人の体を成していない』とかじゃないだろうな……。

「もう、五体満足に決まつてるでしょー? お給金払つてるって言ったのに、そんなマッドサイエンティストみたいな事する訳ないじゃないですかヤダー!! 我輩これでも紳士で通つてるのであるからして、動力炉の中のおぜうさん方の安全はとんでもなく保証しているのであーる」

そう言えば確かに、やられる度に動力炉だけは何度も何度も回収していたなあ。途中からは脱出装置まで付けていたし、大事にしている事だけは確かなのだろう。それ以外にも、中は呼吸と粒子抽出を兼ねた保護液で満たされていて、怪我もしない様にしっかりと固定された上で眠らされているらしい。意識が戻る頃には一仕事終えて、お給金が待っているという至れり尽くせりな環境なのだそう。確かに、気の使い方は尋常では

無い。

それが人間だからなのか、発明品だからなのかは分からないが。

発見してどうするのかと思えば、コンテナの様な下半身の外殻をメイドさんが無造作に挟じ開け始めた。繋ぎ目に指を突っ込んでメキメキと金属の筈の装甲版が、どう見ても力が有る様には見えない細腕によって捲り上げられて行く。

この人もこの人で、見た目と実力がまったく釣り合っていない。出会ってから今まで一言も喋らないし、いったいどういう人なのだろうか。

分からないので、とりあえず聞いてみる事にした。

「うん？ 助手君のぼうわあーがエゴいですと？ それはホレ、当然なのである。なんと言つても助手君は我輩手製の高性能義体の被験者であるからして、そのぼうわあは正に十万馬力を通り越した百万馬力！ 空を飛べない以外は完璧なのである!!」

義体？ 偽物の体と言う事だろうか。つまりメイドさんはサイボーグみたいな、後天的に強化された人間と言う訳だ。

動力炉の中に押し込められた人間にずいぶん気を使っているから心証が変わって来ていたけれど、やっぱりこのカピバラ博士に対しては警戒心が溢れて来る！ やっぱり人体実験しているじゃないか！

「そりゃあ、人体実験はするべきであろうとも。治験は全ての生き物に必要なのである。

それに助手君の場合は……」

反論の言葉を区切り、カピバラ博士はちらりとメイドさんに視線を向ける。その視線の先ではメイドさんが相変わらずの無表情で、ちようど三つの金属の塊が寄り集まった様な動力炉を引きずり出していた。その形状は例えるなら、三色パン？ 確かにあの大ききならば、ヒューマンの女の子ぐらいなら易々と納めてしまえるだろう。

メイドさんはそのまま動力炉をひよいと肩に担ぐと、涼しげな顔を崩さずしんずしんと博士の元に戻って来る。そして、何も言わずに博士に向かってコクリと頷いて見せた。

それは作業が終了した事への通達にしか見えなかつたが、博士はそれを許可だと判断して言葉が続ける。メイドさんは博士の言葉を遮る様な事はしなかつたので、やはり博士の方が正しく彼女の言いたい事を理解したのである。

「彼女は全身の筋肉が徐々に動かなくなる病に、幼いころから侵されていたのである。そして我輩と出会った時には自力で起き上がるどころか、満足に喋る事すら叶わなくなっていた。だからこそ、我輩は彼女に新たな肉体を贈ったのである。彼女こそが正に、我輩の最高傑作と言うべき存在なのである！」

む、筋肉が動かなくなる病気って、確か筋ジストロフィーだっけ。小説で読んだことがあるけど、まともな治療法が無いとか言う。……うっ、何か警戒してるのが物凄く悪

い事の様な気がしてきた。えーつと……、その病氣つて今はもう大丈夫なんだろうか、それだけでもまずは確認しておこう。

「うむ、優しいのであるな。彼女はもうすっかりバツチリ元気なのである。神経系の一部と脳以外は全て作り替える事になってしまったが、今では家の清掃から裏社会の清掃まで何でもこなせる万能メイド。我輩の優秀な助手をしてもらっているのである」

それで助手君か。意外とべらべらと事情を喋ってくれるんだな。じゃあついでに、なんでメイド服なのかも聞いておこう。こうなったら、疑問に思った事は何でも聞いてみた方が得だ。

「うむ、それは助手君が自分で用意した物なのである。本来は我輩手製の戦闘にも耐えるピチピチバトルスーツを着ているのであるが、どうもそれが恥ずかしく——あ、あの助手君？　なぜ我輩の頭を掴んで持ち上げるのでせうか？　あつ、あつ、痛い、痛い、痛いです。締まってる締まってるしままままあああああつ!!」

おっと、どうやら質問タイムはここまでの様だ。照れ隠しでアイアンクローが始まるとは、なかなかアグレッシブな愛情表現だな。このメイドさん、カピバラ博士が何か不都合な事を言う度に頭を締め付けているのだろうか。

それから程なくして、私達はもう一度陽の光を見る事が出来た。なんと言う事は無い。一旦壁際までたどり着いたら、後はそのまま壁沿いに沿って移動して出入口を探し

たのだ。

巨人が入れる程のただっ広い空間には、都合の良い事に外に繋がる大きな横穴が存在していた。後はそこを巨大な動力炉をつつかえさせないよう慎重に通り抜けて、上り坂に苦労しつつも漸く外に出る事が出来たのだ。

肝心の巨人の脱出だが、これはほぼ一瞬で終ってしまった。ただ、スマホ越しに砂を塞ぎ止めるのを止めさせた後に、砂中を掘り進ませて天井の穴から再び外に飛び出させたのだ。

ずーっと遠くで、砂塵を巻き上げて巨人が地面から出てくる光景は中々にシユールだった。

そんな事をしている間に、砂漠の空は夕闇に包まれてしまう。私達はもうその日の移動は諦めて、巨人を座らせて何時もの様に足の間キャンピングを張る事にした。

巨人の背中のコンテナから取り出した薪で焚火を作って、さして美味しくも無い干し魚とパンの食事を楽しむ事にする。これだって、粘土みたいな携帯食料に比べたらだいぶマシなのだからありがたい事だ。

どうせならカピバラ博士達にも振る舞おうとしたのだが、博士とその助手はなんと夜間の間に移動をしないと言い出した。動力炉の中に居る女の子達を一度、しっかりした場所まで診断してあげたいのだそうだ。そう言われてしまえば、引き留める事は出来なかつ

た。

「一時休戦は脱出するまで、であつたな。我々はこれで失礼させてもらうのである。次に会いまみえる時は、再び敵同士としてどちらの巨神が上か決めるのである。ところで一番近くの町つて、どつちの方角でしょうか教えてプリーズ」

途中まではシリアスつぽかつたんだけどなあ……。

結局星の位置からトカゲのおっさんが大体の位置を読み取り、太陽の沈んだ方向から方角を割り出して近くの町の位置を教えてあげた。

そして、三つ連なつた動力炉の上にカピバラ博士が乗り、それを更にメイドさんが背負つて夜の砂漠を爆走して立ち去つて行く。現れた時と同じく、その去り際もまた唐突であつた。

「なんと言うか、更によく分からない存在になつてしまつたな。相手の事情を知ると言う事は、良い事ばかりではないのかもしれない」

確かに。根つからの悪人ではない事は良く分かつた。だが、あいつ等の目的が私の巨人の打倒だと言うのなら、手加減して負けてやるわけにはいかないだろう。私の子供は強くて逞しいんだ。やられる姿なんて、正直見たくはないからな。

今日は色々な事を聞かされたけれど、ふと私はトカゲのおっさんの事をあまり聞いた事が無いのを思い出した。知っているのは、考古学者でトカゲの亜人で巨神マニアだと

言う事ぐらいだろうか。

なんとなく、トカゲのおっさんの事もいろいろと尋ねてみたくなっちゃった。

「トカゲじゃないドラゴニユートだ。ワシの事か？ 特に、聞いておもしろい様な身の上は持ち合わせておらんが……。そうさな、どうして巨神の歴史に興味を持ったかぐらゐなら話してやろうか」

焚火の薪が爆ぜる音を聞きながら、何処か自慢げに語るおっさんの話に相槌を打つ。その日は夜寝る前に絵本を読んでやる時間になるまで、話を聞かされることになってしまった。ちよつとだけ後悔したが、悪い気分はしない。

少しだけトカゲのおっさんの事が理解できて、私はきつと嬉しさを感じたんだと思う。胸の中に、焚火の熱とは違う暖かさを自覚する事が出来たのだから。

明日からまた、三人での旅が再開されるんだ。

次回、第二十五話『変な味!』に続く。



## 第二十五話 『変な味！』

前回のあらすじ。

カピバラ博士とメイド助手の話を色々聞いてしまった。今までただの敵だと思っていた相手にも色々事情があるのを知って、相手を糾弾できるほど自分に正しさが無い事を自覚してしまう。地下から脱出した後は博士たちと別れ、今度はトカゲのおっさんの話を聞く事にした。そしてまた、旅が再開される。

見渡す限りの白。三百六十度を向いても白一色の景色が、地平の果てまで続いている。

その景色を彩る白は雪ではない。ここは雪原とは縁遠い、照り付ける太陽の真下。一面の白は、全てが塩で構成された無生物地帯であった。

試しにちよつと味見してみたら、想像より塩っ辛い上に苦かった。ぺっぺっ、変な味！

「此処は元々塩湖が在った場所だが、今は干上がってごらんの通りの塩の大地となっておる。塩が採れる貴重な場所でもあるが、その代り草木は全く育たぬ死の世界でもあ

る。あと、トカゲじゃないドラゴニュートだぞ」

そうなのか、トカゲのおっさん。相変わらずうん蓄を語るのが好きだな。私もそれを聞くのは嫌いじゃないぞ。

それはそうとして、この塩の大地は一面が真っ平らで目立った凹凸もほとんどない。だから自然と、巨人のホバー推進の速度も上がって行く。いいぞ、このまま私達は風になるのだ。

そんな調子で塩の匂いを感じながら風を受けていると、ふと巨人が上空に視線を上げるのが見えた。この子の五感は計り知れない物があるので、私達には見えない何かを感じ取ったのかも知れない。

視線の先の物が気になって、私はスマホを巨人の視覚とリンクさせる。画面に映った物を確認しようと覗き込んだ瞬間、その画面にチカツと何かの光が瞬いた様な気がした。

その直後、巨人が左腕を天に掲げてその腕の装甲を展開、掌の前に円形の壁を生み出して降り注いできた物を受け止める。勝手に動き出した事に驚いた直後に、巨人が受け止めた物を見て更に驚いた。

それはいつぞやに見た、空から降り注いだ光線だ。巨大な生物の頭をいとも容易く吹き飛ばした光が、今まさに私達を襲おうと降り注いでいる。

というか、なんか巨人の方が押されていないだろうか。受け止めている光の壁の裏側に、動きを止められた光線がモリモリ溢れて行つてまるで決壊寸前の防波堤だ。このままだと光の壁から溢れて、こちら側へ雪崩れ込んで来るのではないだろうか。

危機感を覚えた私は、咄嗟に巨人に回避する様に命じていた。途端に光の壁を維持したままで、巨人が急加速してその場を離れる。滑る様にして移動するホバー推進は、巨人の巨体をアイススケートの如く軽やかに移動させた。

肝心の空からの光線だが、展開したままの光の壁に照射され続けている。逃げる巨人の事を正確に追尾してきて、当たると動きを止められ、巨人の逃げる動きに合わせて中空に停止した光の帯が伸び続けていた。

だが、それもやがて終わる。照射されていた光線が細くなり、やがて勢いを無くして消失。続けて放たれるかと警戒したが、空から光の雨が降り注ぐことは無かった。

冷却時間があるのかは分からないが、どうやら連射は出来ないようだ。

「何とも非常識な……。あの停止した光がどうなるか想像もつかん、此処は少し距離を取った方が良さだろう。ただしあまり速度は上げない方が良い。あの光は本来空を飛ばん限りは撃たれない物だ。恐らくは、速度が関係しているのかもしれない」

トカゲのおっさんに言われて、私は巨人を何時も通りの速度で移動する様に頼んだ。恐ろしい世界だなこは。スピード違反するとビームで撃たれるのかよ。

光の帯から距離を取ったその直後、左腕の装甲を戻した途端に停止していた光の帯が爆裂した。パンつと乾いた音を立てて弾け飛んだ光はまるで花火の様だったが、爆発に巻き込まれた塩の大地は無残にもえぐり取られていたのでゾツとする。直撃していたら、巨人はともかく私達は跡形も無かったに違いない。

ともかくにも、何か事情を知って居そうなおっさんには、後で詳しく話してもらう必要があるだろう。

と言う訳でキリキリ話せ、と焚火の前で座るトカゲのおっさんに詰め寄った。あの光について話してもらおうのだ。

あれから巨人をおっかなびつくりと日暮れまで走らせて、陽の沈まない内にキャンプを張る事を決めた。味気ない保存食の食事を済ませて、これだけは心の癒しである砂糖入りのお茶を飲んで人心地ついでから。それから漸く、あんな危険な存在について黙っていたおっさんに食って掛ったのだ。

「さてさて、落ち着け。別に隠していた訳では無い。地上に居る時に撃たれるとは、ワシも思っではいかなかったのだ」

そんな言い訳から始まった説明は、正直常軌を逸していた。

この荒野の世界では、実は航空機などの空を飛べる遺産はそれなりに発見されている

らしい。だが、今現在それらはその大半が失われており、人々は空を飛ぶ事を諦めていた。

その理由が、あの空から降る光だ。

一定の高度まで飛行をすると、天から降り注ぐ光に撃墜される。それは一切の例外は無く、やがて現在の人類は空の旅を捨てた。低空飛行では大した距離も飛べず、地上を移動する乗り物と大して違いが無いと判断されたからだ。

命を賭して空に行くには、あの光の脅威は人々には過剰に過ぎたのだそうだ。何より、燃料の調達が難しいのもその一助となっているのだろう。バイクとか車もそうだが、燃料どうなってるんだろうな。

「燃料は遺跡から見つかる事もあるし、水を使って動く物もある。大型の物になると、そもそも原理が分からないなんて事も良くあるな」

良く分から無い物を使うとか、控えめに言っても頭おかしいわ。まあ、新しい物が作れないならそうやって生きるしかないんだろうけどさ。

それにしたって、三千年もこんな生活をして、よく遺物は枯渇し無い物だ。

「それだけ、人が少ないと言う事だな。亜人もヒューマンも、ギリギリの数でしか生きてはおらん。減り過ぎれば消滅して、増えすぎればやはり死ぬだけだろう」

それがこの荒廃した世界。そんなもの悲しい世界に、私は今居るんだな。空も飛べ

ず、地を這いまわり、何時消えるともわからない命の世界に。

聞きたい事は聞けたので、後は眠る前の絵本の時間になるまでは寛いで過ごす事にする。塩の大地にシートを引いて横になりながら、スマホで撮影した写真をペラペラとスライドさせて眺めていた。私の知らない間に、巨人が撮影しているのか気が付くと増えているのだ。

なんとなくボーッと眺めていた写真の一番新しい物に、気になる物が映っていた。それは、例の空から降り注ぐ光の写真。こちらに向けて光が降り注ぐ瞬間を、連続して撮影した物だった。私はその写真を、撮影時間が若い順にスライドして眺めて行く。

光が発生して降り注ぐ前に、光の発射地点に向けて横から光の線が走っているのが見えた。彗星にしては青空の元でくつきりと見えすぎている。この光はつまり、私達の頭上で直角に曲がったと言う事になるのだろう。

「これは、流石巨神の視力と言う物か。この横からの光の方向に向かえば、光の発射地点が分かるかもしれないな」

気になった写真をトカゲのおっさんにも見せると、やはりそんな意見が返って来た。こんな傍迷惑な光を飛ばしている奴を特定できるなら、特定してぶん殴るのが世の為ではないだろうか。私の巨人に攻撃してくれたことだしな。

何よりも、こんな常識はずれな事が出来る存在は、新しい巨神の仕業かも知れないの

だ。探してみる価値はあるだろう。そして殴る。

そんなこんなで、明日からの方針が決まった。漠然と各地を回るよりは、断然目的地があつた方が良くに決まっているだろう。

差し当たつては、こんな素敵な写真を撮つてくれた巨人をねぎらう事としよう。頬つぺたをいっばいなでなでして、絵本も沢山読んであげなくっちゃ。次の街での買ひ物の時は、新しい絵本を買つてあげるのも良い。

あれこれと世話を焼きながら、その日の夜はあつと言う間に更けて行くのだった。

次回、第二十六話『ブルブルしてる！』に続く。

## 第二十六話『ブルブルしてる!』

前回のあらすじ。

スピード違反したら頭の上からビームを撃たれた。巨人の視覚が捕らえたビームの軌跡を頼りに、犯人を見つけ出す為に行動を開始する。

まったく。びっくりしたもんだよ全く。

ビームの発射地点に向かって突き進んだところで、見上げる様な山を見つけて山越えを敢行。ある程度登った所で山頂から何かが飛んで来たかと思えば、それはビームの雨だった。

咄嗟に巨人を岩陰に隠れさせ、左手の防御技で岩事時間を止めて即席のバリケードにして雨をしのぐ。ご丁寧に、飛んでくるビームは寸前で散弾の様に分裂して、文字通り雨へと変わってくれた。どういう技術だそりゃ。特許取れたら大儲けできるぞ。

そしてそんな最中、降りしきる豪雨の音に負けじと、私のスマホが着信音を奏で始めた。気分的に無視しても良いかとも思ったが、どうせこのスマホに掛けてくるやつは出るまで鳴らし続けるに決まっている。



洩々と通話の表示をスライドさせ、電話に出る事にした。

『はい、貴女のお耳の不協和音。巨神へステイア、十七歳です。あらあら、凄いい音ですね。こっちの声は聞こえますかー？ もしもーし？』

聞こえているわクソツタレ。案の定、掛けて来たのは奴だった。このクソ忙しい時に、くだらない用件だったらひっばたいてやるからな。

『そろそろ次の巨神に出会った頃かと思つてご連絡したのですが、どうやら無事に出会えているようです。不幸中の幸いと言う奴ですね。良かった良かった、では私はこれで……』

おいマテ。やっぱりこの攻撃は新手の巨神の仕業だったのか。通話を切るのは大歓迎だが、その前に知つてる事を洗いざらい話せ。この巨神の特徴とか弱点とかも知ってるんだろうが。

『えー。そんな事したら面白くないじゃないですかあ。特に、ハデスちゃんと貴女の巨人の相性は最悪ですし、システムクロノスでも使わない限りは接近するのもままならないんじゃないですか？ ほらほら、こんな所でもたもたしてると、時間を止めた光線が溢れて来ちゃいますよ』

まるで見ているみたいに言うじゃないか。他人事だと思つてこの女郎。何時も通りのおふざけた物言いに、ブチ切れそうになつて握つた拳がブルブルしてる！

とまれ、こんな所でぐずぐずしていたら塩の平原の二の舞だ。折角ヒントをくれたのならば、使ってみようか海以来のあの凄い奴を。

「あ、それから。システムクロノスを使うなら、トカゲさんは降ろしておいた方が良いでしょう。空気との摩擦で焼きトカゲになってしまいますから」

え、それって私も危ないんじゃないか? でも、前回使った時はまったく空気抵抗とか感じなかったんだけど。あ、髪の毛は短くなつたな。

「貴女は特別です。巨人が守ってくれますから、そのまま引つ付いていて大丈夫ですよ」

良く分からんが至れり尽くせりだな。だが方針は分かった。

とにかく、節分の鬼より撃ちつばなしにされているんだ。いい加減に一発返しをしてやろうじゃないか。

トカゲのおっさんは危ないから、とりあえず近場の岩陰に隠しておく。焼きトカゲになつたら何時もの台詞が聞けないからな。

「焼きトカゲじゃない生ドラゴニユートだ。それはともかく、巨人と一緒になら無用だとは思いますが、何をしてくるか分からん相手だ、気を付けて行けよ」

言われるまでも無い。油断して返り討ちなんて、そんなの私の巨人には相応しくないからな。どうせやるなら、勝ち戦が一番だ。

システムクロノス、発動！ 一方的になぶって来る様な奴は、一発顔面に叩きこんでやれ!!

そして私の巨人は一筋の流星となった。見送るトカゲのおっさんも、飛んで来る閃光も全てがびたりと動きを止める。音も無い空間の中を、全身の装甲を展開して姿を変貌させた私の巨神が駆け抜けて行く。両足の移動技での加速状態。こうなれば、飛び道具など怖くもなんとも無い。

程なくして、私達は狙撃してきていた犯人の顔を漸く拝む事が出来た。私の巨人に少しだけ似た雰囲気、甲冑姿の様な体躯。その巨軀を覆い隠す様に構える大きな盾と、右腕と一体化している長槍の様な長銃身の大砲。人の様な二つの瞳を持つ顔の額には、闇色の単眼が一つ——いや、後頭部にも同じものが付いていて全部で四つの瞳を持つている様だ。

以前に海で出会った巨神に比べれば実にシンプルなデザインだが、その分頑強さが滲み出て来る様な武骨さがある。これが今から叩きのめす相手なら、実にやりがいがありそうじゃないか。

私の意識を汲み取ったかの様に、私の巨人が拳を握りしめて振り被る。そのまま、真っ直ぐに顔を狙って巨大な拳が突き出されて行った。

だが、その拳が顔面に突き刺さろうかと言う瞬間、ぎろりと相手の巨人の瞳がこちら

を睨み付けて来る。そして、あろう事か大楯を使ってこちらの突き出した腕を弾いて見せたのだ。

がら空きになった胴体に向けて、奴は右腕の大砲の先を突き出して来る。加速状態に何故追従できるのかという疑問はさておき、私の巨人はその銃口を左手で掴み力任せに胴体から離れさせた。

互いに両腕を逸らされて、後は力任せの取っ組み合いだ。ぎちぎちと装甲が悲鳴を上げて、至近距離で二つの巨体がにらみ合う事になる。巨神同士で戦うといつも組み合っている気がするな。

距離を開けられると飛び道具の無いこちらが不利だ。このまま距離を離さずに、強引に力でねじ伏せるのが上策。油断も慢心もせずに、全力で押し切ってしまう!

『はい、そこまで。これだけ近づけば、通信を遮断して引き籠って居た貴方にも私の声が直接聞こえますよね? 上位固体権限により命令します。無線封鎖解除。三千年の引き籠り生活を終わりにしなさい、第四子かつ長男のハデスちゃん』

ここからが本番と思つた矢先、とつくに切れたとばかりに思っていた通話先から声が響いた。その事にも驚かされたが、もつと驚いた事にそれまで抵抗していたはずの相手の巨神が突然抵抗を止めたのだ。突然相手が引いたために、私の巨人が思わずつんのめってしまった程だ。

一体全体、何なのだこの状況は。

「『実はこの子はずいぶん昔から音信不通だったので、今回発見できたので近くまで行つてもらふ事にしたのです。全ては、私のちみつな計略の通りと言う事ですね』」

人を都合の良い様に利用しやがって、相変わらず性格が悪い。というか、結局私は何時もこいつの掌の上か。くそう、絶対にいつかぎやふんと言わせてやる。

「『そんな事より、貴女の体の方は大丈夫ですか？ システムクロノスを使うのもこれで二度目ですからね。どんな反動が出ているかの確認もかねて、些細な事でも報告して下さい』」

は？ 反動があるなんて一言も聞いてないんだけど。別に今のところ変化はなさそうだけど、デメリットがあるのだとしたら今後は使用を控えないと――

そんな風に陰険巨神の言葉に警戒心を抱いていた時、私の体からストーンと一枚の布が落下した。それは、紛う事なき私の下半身を守っていたスカートそのものであり、それが地に落ちた様を目で追うと次第に私の中に一つの感情が沸き上がって来る。全身をひたすらに駆け巡る衝動で、顔が熱くなるのを感じ私は感情のままに悲鳴を上げた。

その感情の名は、まさしく羞恥だ。

「『あ、キヤーって悲鳴初めて聞きました。これはアレですね、らつきーなすけべえが発動しちやった感じなんですかねえ。この場にトカゲさんが居ないのが本当に悔やまれ

ます。今からちよつと舌打ちしますね。チイツ!』

やかましい! なんだこれは、どうして今までなんとも無かったのにスカートがずり落ちる様な事が起きるんだ!? これが反動つて奴なのか!? スカートずり落ちる反動とか一体全体どうなっているんだ!!

『あらあら、まあまあ。あまりにも見事な錯乱っぷりで、いけないと思つていてもついつい愉快になつてしましますね。プーツクスクスクス、失礼。ゲラゲラゲラ、失敬。プフホツ、ゲホゲホ、恐縮です』

もーっ! ほんともー! なんなんだよこの状況はー!!

腐れ巨神の煽りに耐えながら、私は取り急ぎ落ちたスカートを拾つて履き直す。何時までもこんな姿を晒している訳にもいかないし、私の巨人の教育にだって悪いからな。おう、こつち見てるハデスとか言う奴も、じろじろ見てるんじゃないぞ。金取るぞ。

そうして再び腰までスカートを上げた時に、私は自分の身に何が起こったのかを察してしまった。

この世界に来てからの大切な一張羅であり、長旅にも耐えた学校指定の制服のスカート。それが、あつけなくずり落ちてしまう程に、私の体が縮んでいると言う事に気が付いてしまったのだ。だってほら、ウエストに指が三本も入る様になつている。

『そうですか。もうそんなに、時間を食べられていたんですね。今後、システムクロノ

スを使う時には、ある程度の覚悟をしておいた方がいいかもしれないね。あまり食べさせすぎると、着られる洋服が無くなってしまうですよ?」

時間を食べられた? そう言えばだいたい前に鉄仮面の人が、私の巨人の事を『時食いの巨神』って呼んでたつけ。そうか、あれはそう言う事だったのか。私は時間を食べられて、体が縮んだり髪が短くなっていたんだ。

なんだそれ。何で今更そんな、私の巨人が怖くなる様な事を言うんだよ。

『と、そんな事を言っている間にデータリンク完了。流石、静止衛星軌道上に多数のビーム反射衛星を配備しているハデスちゃん。三千年ボツチしてたくせに、情報収集能力は桁違いに高いですね。そのおかげで最後の巨神の現在位置が判明しました。それによって、貴女の現状を何とかできるかもしれない提案が出来そうなんですけど、お聞きになれますか?』

私の心境を完全に置き去りにして、スマホから流れて来る無機質な言葉。そこに含まれた甘い誘惑に、私は思わずゾクリと背筋を震わせるのだった。

次回、第二十七話『いやらしい!』に続く。

## 第二十七話『いやらしい!』

前回のあらすじ。

航空機を撃墜すると言う謎の光の発射地点を指していると、巨人と比べても巨大な山の上に新たな巨神を発見する。滅多矢鱈にビームを乱射してくるそいつに対処する為、海でも使った凄いいパワーを使って一気に接近戦を仕掛けるも、スマホの向こうの腹黒巨神の計画通りになってうやむやになってしまう。そして私は、巨人の力を使った反動とやらで、身体が小さく縮んでしまった。

気分是最悪だと言うのに、物事は刻一刻と勝手に進んで行く。今のこの状況だってそうだろう。

『はーっはっはっはっはっ！ 我が都市が誇る最大戦力を見て、その威光に恐れ戦きなさい！ いかにか巨大な兵器を用い様とも、三十体もの量産型ケイローンには敵うまい！ 困んで棒でたたかれる前に、平伏して土下座でもするが良いわ!!』

なんか拡声器越しに、とんでもないこと言ってる女の人の声が聞こえてきている。なんとなくだが、高圧的な態度なのに凄く小心者そうなイメージがある声だな。



確かに、地平線の果てを疑似四足の巨神もどきがぞろぞろと埋め尽くしている様は壯観の一言だろう。カピバラ博士の作った人を動力源としたレプリカ巨神が、何時の間にやらこんなにも量産されていたとは驚きだ。

まさか、あの腹黒巨神に行くように促された旅先で、こんなにも大歓迎されるだなんて思いもしなかったさ。

あの山頂での巨神同士の戦闘の後で、自分の身に起きた現象に戦慄していた私に、スマホの向こうの腹黒巨神は変わらない声色で一つの提案をしてきた。それは、動揺していた私を正気に戻すには充分な威力を持ち、その言葉に突き動かされて私は今此処に居る。

『全ての巨神に出会えば、ゼウスちゃんの居場所は自ずと解るでしょう。そうすれば、貴女は元の居場所に帰り付く事が出来るかもしれませんよ。これ以上〈時間〉を浪費する前に、次の巨神を目指す事をお勧めします』

何故そんな事を知っているのかとか、その他もろもろの疑問なんぞ知った事か。帰れるというその一言が、私の今の行動原理だ。その為にこうして、口車に乗って遠路はるばる地の果ての大都市とやらまで来たのだから。

「……まさか市長がここまで短絡的だとは思わなかったな。すまん、到着を連絡したのが完全に仇になってしまった」

意外な事に、腹黒巨神の指定した大都市の場所はトカゲのおっさんが知っていた。何でもおっさんに資金を提供していたスポンサーとやらが、この大都市自体だったのだとか。そして、馴染みである事を利用してPDAを介して巨人で近づく事を連絡しておいてくれたそうなのだが、その結果が現状の大量の量産型との対峙である。

「ワシだってこの状況は予想外だよ。調査に出ている間に、ここまで防衛力が備わっているなんてなあ。それから、トカゲじゃないドラゴニュートだ」

もうそれは良いよ。テンプレとかしている場合じゃないだろう。

各地から発掘された発掘物を集めて、他の町や村よりもはるかに発展した巨大工業都市。そんなものと、何が悲しくて敵対なんぞしなければならぬのだろうか。なんとも、頭が痛い問題が発生してしまった物だ。

『はっ、反応がない……。やっぱり、稼働状態の巨神相手に三十体じゃ少なすぎたかしら……。でもでも、諦めちゃだめよ。ここで諦めたら、一体誰がこの都市を守ると言うの？ 市長であるこの私が——あっ、マイクのスイッチ切るの忘れて!』

ガガピーとか言って放送が途中で沈黙し、それを合図にしたかの様に都市との間に立ちただかる巨神もどき達が動き始めた。なんか色んな意味であれを相手に戦うとか嫌なんだけど、相手側はずんずん進撃してきてやる気の様だ。

今回の数を揃えて来たレプリカ巨神。今までと違うのは数だけでは無く、その人型の

上半身には巨体にふさわしい大きな弓矢が装備されていた。背中には矢筒まで背負っており、あれらを一齐に連射でもされたらそれだけで街一つ滅ぼしてしまえるだろう。

私の巨人だつて何発も直撃すれば壊れてしまうかもしれない。ああ、こんなにも多勢に無勢が厄介だとは思わなかった。せめて、巨人の武装に集団戦に使える様な物があれば良かったのに。なんて、嘆いたって現状は変わりはない。

「お、おい!? 巨神の背中コンテナが勝手に開いているぞ! そつちで何かしたのか!」

今にも敵の集団がつかえた矢を撃ち放とうとしていたそんな時に、腰のあたりに居るトカゲのおっさんが俄かに騒ぎ始めた。言葉に釣られる様に巨人の肩から背後を見てみれば、そこには貰い物のコンテナの中から徐々に姿を表す二つの物体があった。

それは、球体にカメラのレンズが付いた浮遊する機械。姿勢制御の為か下部に何本かのトゲが生えていて、上部には二本の触角の様なアンテナが生えている。大きさが小さな小屋よりデカく無ければ、案外可愛いデザインかも知れない。カメラのレンズが赤と青の光を発して、二体の差異としてそれぞれを彩っていた。

そして、遅ればせながらスマホに通知が届き、見てみればそこには何時もの様に技名らしき物が表示されている。自律型戦闘支援ユニット、ツインデバイス。それを私が読み上げたと同時に、コンテナからせり出した二体の金属の塊が勢い良く発進した。慣性

の法則なんかをどこかに置き去りにしたような、急加速とコーナーリングでの飛翔である。

「今のは、三番目の巨神が扱っていた支援装置と同じ物か。お前さんの巨神も同じ物を扱えるとは、いやはやい加減予想外の押し売りの様だわい」

ああ、通りで見覚えがある気がすると思った。三番目に出会った巨神、デメテルが荒地を熱帯雨林に作り替える為に使っていた自律ユニットにそっくりなんだ。カメラアイの色が赤と青になっている、と言う違いはあるみたいだけれど。

だとすれば、後はどうしてこれを発進させたかだけれども、その答えは直ぐに分かった。空中に飛んでいった二つの球体が、突然とんぼ返りしかと思えば地上に居るレプリカ巨神を襲撃し始めたからだ。

二つの球体それぞれが時に交差し、時に並行してレプリカ巨神の群れの間を飛び回り、無造作にその身を巨神達の上半身に叩きつけて攻撃して行く。余程の勢いがあるのか、レプリカ巨神の方はまるでほろきれの様に簡単に引き裂かれ、弓を持つ腕や前足を吹き飛ばされる。なるほど、戦闘支援と言うのはこう言う事なのだ。

襲撃されているレプリカ巨神も何とか反撃しようとしている様子だけれど、二つの球体があまりにも早く突飛に動く物だから同土打ちを避けて弓を射る事も出来ないようだ。球体の方は人を組み込まれた動力の在る後ろ足部分を、わざわざ避けて攻撃する余

裕まであると言うのに。

やっぱり、こんな事までできるなんて私の巨人は凄いな。時間を食べられているなんて聞いた時はちよつと怖くもなつたけど、私はこの子を憎んだり怖がつたりはしたくない。例え帰る方法を探すとしても、最後まで一緒に居たいと思うよ。もうこの子は怖いけど頼もしい、私の可愛い大きな大きな子供なのだから。

それにしても力の差が歴然過ぎて、これはもう蹂躪と言つても過言ではないだろう。えつと、あんまりやり過ぎない様に私の巨人に言つた方が良いだろうか。

「いや、ここは市長の心を折る為にも徹底的にやつた方が良いだろう。ワシは降りて離れておくから、お前さんも一緒に暴れて一方的にとつちめてやると良い」

うわあ……。こんな対応をしてきた相手に対して必要な処置なんだろうけど、何て言うかトカゲのおっさん発想が狡いというかいやらしい！ こんな擦れた大人の影響は受けて欲しくないなあと思いつつ、腰の足場からおっさんを下ろさせて私は巨人を進ませる。

今とはにかく、徹底的に暴れさせたい気分だったから。

次回、『優しくして！』に続く。

## 第二十八話『優しくして!』

前回のあらすじ。

新たな巨神の手がかりを教えられて大都市に向かうも、量産化されたレプリカ巨神の大群を差し向けられてしまう。多勢相手に対処を悩んでいたが、突如巨人の背負っていたコンテナから支援ユニットが発進、レプリカ巨神達をなぎ倒し始める。丁度憂さ晴らしたいたい気分もあつたので、巨人も戦線に投入させ大暴れをさせる事にした。

とりあえず動く物が無くなるまで大暴れした後に、コンテナに自律ユニットを格納しつつ大都市へと向かうと、街の入り口となっている門の前で何人もの人物達に迎えられた。ただの町人ではない様で、各々ボウガンやら銃器やらで武装している様だ。流石は技術を集めて発展している大都市の警備隊は重武装だな。

すわ今度は人間相手に武器を向けられるのかと思いきや、門前の人々を掻き分けてずんずんと一人の女性が進み出て来る。手に拡声器を持っているから、もしかして戦闘前に無茶な事を言つて来た人だろうか。他の者達よりも上等そうなスーツをかつちりとしに着けて、癖はあるが手入れされた長い髪を揺らしきつめのつり上がった瞳でこちら

を睨み付けて来る。

そんな彼女は、誰よりも私達の前に進み出るとすううつと大きく息を吸い込み――

「本当に、申し訳ありませんでしたあああああああつ!!」

それはそれは、美しい流れの土下座であった。

姿勢を正して両膝を突き、両手を突いてから地に顔を伏せての平身低頭。全ての責任を肩に乗せ、全ての罪は自分にあると見せ付ける心からの謝意の姿勢。こんなに流れる様な綺麗な土下座を見たの、生まれて初めてだよ私。

まあ、土下座を生で見るの自体二回目だけど。

「……市長、どうしてこんな馬鹿な真似を……」

「あああああつ!! 裏切り者のトカゲ男! いっぱい資金提供したのに、巨神に乗って攻めてくるなんて何て恥知らずな!! 少しでも人としての良心が残っているなら土下座しなさい!! うわーん!!」

「トカゲじゃない、ドラゴニユートだ。裏切りって、一体何のことを言つとるのか説明してくれ」

周囲が突然の土下座でざわめく最中、巨人の腰から這い降りたトカゲのおっさんが女性に話しかける。すると彼女は這いつくばっていた姿勢から一転、ピョンと飛び上がる。トカゲのおっさんに詰め寄り始めた。どうやらこの二人は顔見知りらしいが、そうか

この人がおっさんの言っていたこの都市の市長なのか。

傍から見ると、身長差のせいで大人と子供にしか見えないが。おっさんがデカいのもあるが、この市長さん凄い身長低いな。泣きながら両手振り回してるのに、頭に手を置かれただけで簡単に受け止められてしまっている。

それから小一時間ほどかけて、激昂している市長さんをなだめつつ詳しく事情を聴く事になった。そして、原因はやはりトカゲのおっさんがPDAで送った連絡のせいだと言うのが判明する。

『稼働状態にある巨神でそちらに向かっている。楽しみに待っている』って、もうちよつと詳しく説明してやれよ。これじゃあ、そそっかしい性格だと言う市長さんが脅迫文だと勘違いしても仕方がないじゃないか。

「はっはっはっ、すまんすまん。ワシの指だと爪が邪魔で、長い文章は打ち難くてな」パソコン苦手なおじいちゃんかよ。こんなんでも市長から直々に遺跡の調査を任せられるって言うんだから、この世界での機械文明の衰退は深刻なのだろうな。

ともあれ、誤解から始まった大都市との戦闘は何とか和解へと辿り着く事が出来た訳だ。損害の責任は、自体を引つ掻き回した市長が取らされることになったらしい。また休暇と給料が減ってしまうと市長は泣いていた。お願いだから皆市長に優しくして!

そして私達は今、市長と数人の護衛に連れられて大都市の中枢である工場区画の奥深



くへと移動していた。

この大都市は元々遺跡から発掘された機械部品を使った工業製品を増産する目的で人が集まり、次第に増えて行く住民の為に住宅区と商業区が後付けで作られた工業都市なのだ。都市の北部に工場区を構えて、そこから輸送の為にメインストリートを南へ一直線に引く。巨大な一本道の東に商業区が、西に住宅区が立ち並ぶと言う実に機能美を優先した造りになっている。

問題なのは工場の立つて居る地下にあると言う遺跡。その遺跡こそが、この大都市を工業都市へと至らせた巨神の眠って居た遺跡だったのだ。

「……………よし、ここだ。ここがこの工場の最重要区画。私達がカピバラ博士から賜ったレプリカ巨神を量産する事が出来た、その理由がこの区画にはある」

そう言いつつ、先頭を歩いていた市長が装飾の欠片も無い武骨な観音扉を両手で押し開ける。その部屋の中に足を踏み入れた時、私は大きく息をのんでしまった。そう、この部屋にこそ私が求めていた物が存在していたからだ。

物言わぬ、軀としての姿で。

「……………これは、分解したのか。話には聞いていたが、あの頑強な巨神を良くもここまで……」

トカゲのおっさんが思わずと言った様子で口元を押さえる。私も似たような気分だ。

だって、目の前で座り込む巨神の姿は、まるで全身の肉と皮を引きはがされた様な無残な姿だったのだから。

辛うじて残る骨の様な金属フレームと、それにまとわりつく血管の様な配管と配線のチューブ。部品を取り外されてぼっかりと穴の開いた胸部に、まるでそれを虚ろに見下ろす様な剥き出しのカメラレンズの瞳。『貪り尽くされた死体』——そうとしか形容が出来ない哀れな巨神の姿に、瞳の奥がぐつと熱くなる様な感覚に襲われる。泣きそう

だ。「弁明をしておく、我々がこの巨神を発見した時には既にこいつは機能を停止していた。我々は巨神を復活させるべく色々手を尽くしたが至らず、それ故に必要な部品を取り外して工業区に組み込んで利用させてもらっている。そのおかげで、この都市は多くの富と物資を生み出して人々を潤わせているのだ」

市長さんが巨神の屍の前に悠然と立ち、表情を引き締めてこれは当然の権利なのだと言張する。理屈は分かるさ。便利な機械があるなら、それを誰だつて使いたくなる気持ちにはわかる。

でも私は、彼らが意志を持ち、言葉を交わす事が出来る事を知っているんだ。今のこの姿を見て、何も思わずにいるなんてできないよ。

『彼女の名はヘラ。私達姉弟の第三子にして三女。ちよつとやきもち焼きですけど、子

供が好きな優しい子だったんですよ。能力的には出産……、取り込んだ物質を体内で加工して、機械部品を製造する力を持っていました。その気になれば即席の軍勢を作ったりも出来たんですよ。昔はずいぶんとお世話になったなあ、懐かしい……」

何も言えずにいた私の胸元から、ポケットに差し込んでいたスマホを通して良く聞いた声が発せられる。何時も唐突に会話に参加して来る自称一七歳も、今回ばかりはその声に覇気が無かった。いや、ふざけていないだけで真剣なだけなのかも知れないが、どこか無機質な声色に感じてしまう。やはり妹を失った事に対して、慮る事があるのだろうか。

「一つ、お願いがあります。もっと近くに寄って、彼女に触れていただけですか？　優しく、貴女の巨人にしているように……」

私はその言葉に素直に従った。今この場に居ない自分の代わりに、妹を慈しんでくれと言われたように思えたから。

市長さん達も特に止める素振りも無く、黙認してもらえた私は座り込む巨神の軀にそつと手を伸ばす。座り込む巨神の足の間に立って、装甲の剥ぎ取られた脛の当たりの武骨なフレームにそつと掌を当て一撫で。

すると、それに反応して死んだと思っていた巨神の体が、がくと背中を反らせて全身を痙攣させ始めた。あ、これ、またやられたかもしれない。

「あはっ! あはははははははははっ!! やーっぱりだあ! この時代の人間に動力炉が弄れる筈ないと思つてたけど、なるほど量産機能の部分だけ取り外して別の動力に繋げて動かしていたんですね。どうせ時粒子コンバーターが起動できなくて、死んだつて判断したんでしようけど。おかげでヘラちゃんを再起動する事が出来ましたねえ。あははははは!!」

調子が戻った様で何よりだよ腹黒巨神。やつぱりお前はそういう奴だよな。ちよつとでも同情して、傷心に浸っていた自分が恥ずかしい限りだよ。

「うふふつ、私は何時だつて貴女のお耳の不協和音ですから。ヘスティアちゃん一七歳、今回はもう感謝感激雨あられですよ。これでヘラちゃんの頭から色々と情報を引き出せますです、はい」

そうかそうか、うさん臭くて感謝の欠片も感じ取れそうにないよ。

それにしても、また動かなくなつた巨神に私が触つたら動き出すと言う場面に遭遇したな。海の巨神も一度動かなくなつたけど、私が殴りつけたらまた動く様になつた。これはもしや、こいつ等の動力と私に何か関係があるのだろうか。

「はい、ありますよ。そもそも、私が各地で巨神を探してほしいとお願いしたのも、半分ぐらいは巨神を起動させてほしかつたからです」

あつさり暴露したな。半分つて事は、もう半分は一体どんな意味があると言うのか、

どうせならキリキリ白状してしまえばいい。鼻持ちならないお前なら、聞かなくても自分から説明するんだらう？

『あー、酷いなあ。私は私でやれることを必死でやっているだけなんですよ？ でも、まあ良いです。もう既に目的は達成されましたしね。お望みなら聞かせてあげちゃいましょう。あなた自身の、有用性について、ね？』

そうして、性悪巨神は朗々と有用性とやらを語り出した。私もトカゲのおっさんも市長たちですら置いてきぼりにして。

そこで告げられた内容は、私にとって非常に重要かつ興味深い事柄で。そう、つまるところ、私の今の目的である元の世界への帰還に関わる話だったのだ。

そしてそれは、私に大きな選択を迫る物でもあった。

次回、第二十九話『もう一回したい！』に続く。

## 第二十九話『もう一回したい!』

前回のあらすじ。

市長さんに案内された工場区画の奥で、分解された巨神を見付けて再起動させることが出来た。ついでに、何時もの十七歳巨神の性格の悪さも再確認させられる。

そして私は、大きな決断を迫られた。

結局、再起動させられた巨神へは、その腕を私に向かって伸ばしただけで動きを止めてしまった。何か言いたい事があつたのだろうか。その胸中は知られる事も無く、彼女は再びの沈黙を迎えてしまう。

そして、沈黙した巨神の代わりに、腹黒巨神がスマホ越しに煩く宣ってくれた。

『端的に言えば、貴女は巨神に使われている動力にエネルギーを補給する事が出来ません。旧式の時粒子エンジンはもちろん、時粒子コンバーターの活動を活性化させる、いわば触媒ですね』

そして語られたのは、うすうすと察していた自身の秘密。そうか、それで私はあの時、クロノスに求められたんだな。時を食べる巨神に、正に電池の様にエネルギーを充電し

ていたわけだ。

いや、母的には子供にご飯を食べさせていたと言うことなんだろうか。だとしたら、私はまた一つあの子に親らしい事を出来ていたのだな。そう思つて居た方が、精神衛生的にも良い。

『そして、その触媒としての力は巨神に触れる度に、共振作用を起こして出力が増幅される。貴女の巨人の力が少しずつ解放されて行つたのは、触れ合つた巨神が増えて出力が上がつた事が要因なのですよ。今の貴女は全ての巨神に触れた事で、かつてない程にその素養を高めている筈です』

私を触媒として成長させる為の巨神探しか。確かに、私の巨人は旅をつづけるほどにその機能を取り戻して行つた。それは私を通して注がれる力が、次第に増量していた証なのだろう。

でも、それがどうして私達の旅に必要なのだだろうか。素直に聞いてみれば、腹黒はこう答えた。

『その方が都合が良いからに決まっていますじゃないですか。貴女の巨人も強くなるし、その身に溜め込める時粒子の量もどんどん増えて行く。そして、その高まりが最高潮の今こそ、ゼウスちゃんを討つのにうつつけという訳なのですよ。それに、あなたが帰還する道筋にも繋がっている話なのですよ？』

なるほど、強敵を倒すにはこつちも強くならないといけないと云うのはよく分かる。だが、それが私を元の世界に戻すと云うのはどういふ事だ。この際だ、疑問に思つた事は何でも口にしてしまおう。

「うふふふつ、全てはヘラちゃんから伝えられた座標の位置に行けば解る事です。もちろん、その為には今の最高の状態で挑む事が望ましい。時間を掛ければ掛けるほどに、せつかく高まつた貴女の力が平均値に戻つてしまいますからね」

つまりは、時間が無い、と云う事か。

「貴女と巨人なら、その時間を限りなく有効に扱えます。選択肢は一つしかないと思えますよ。それとも諦めちやいますか？ 帰還への道は、もう見えていると云うのに

……」

そんな一方的な話を聞かされてから、私は今一人で星空を眺めていた。市長から宿を紹介されて、巨人は工場区画の大型ドックで簡易なメンテナンスを受けている。もちろんスマホがあるから、こつちの様子は逐一見ているだろう。

絵本の時間も終わったので後は眠るだけなのだが、あんな話を聞かされた後でグースカと眠れるはずもない。だから私は、窓越しに空を眺めて物思いにふけつてゐる訳だ。

なんだろう。なんか違和感がある。それが何なのかは理解できないけれど、私はあの腹黒巨神の言葉に違和感を覚えていた。そもそも私はどうして、あの巨神の言葉を――



「起きているか？ 少し伝えておきたい事があるんだが、入っても構わないだろうか？」

私の思考は、不意に聞こえて来た控えめなノックの音と、聴き慣れた声に遮られた。

この声は、トカゲのおっさんか。開いてるから入っていいよと声をかけると、おっさんはずいっとドアの隙間から頭を入れて、中を確認してから部屋に入って来る。誰か居ないかチェックしたのか？ こんな夜更けに私なんかを訪ねて来る奇特な奴なんて、おっさんぐらいな物だろうに。誰も居やしないさ。

「フツ、色気のない奴じゃのう。まあ良いわ、それこそちようど良い。お前さんに言つて置かにやらん事がある」

何だい改まつて。明日からの旅の日程なんかはもう話したし、『私達の旅』の話なら別に明日でもいいと思うけど。そんな風に言つて話を促してみると、トカゲのおっさんは尻尾の先をピンと立てて至極真面目な表情で話し始めた。

「ああ、その『お前さんの旅』の話なんだがな。単刀直入に言おう、今回はワシを置いていけ。私はお前さんの足枷になるつもりはない」

……………。やっぱりその話だったか。そうだよな、あの腹黒の話は一緒に聴いてたもんな。学者なアンタなら、その答えに行きつくのも当たり前か。

「お前さんの巨人の移動用の機能を使えば、ホバー走行で移動するよりも遙かに早く目的地に着ける。それこそ一晩もあれば走破してしまえるだろう。だが、私が乗っていて

はその機能は使えずに移動に時間が掛かってしまう。だったら、取るべき選択肢など一つしか無かるう」

でもその選択肢を選んだら、アンタの旅は終わっちゃうんだぞ? アンタが居てくれたから、私はここまで来られたんだ。その恩人を自分の都合で置いて行くななんて、そんな身勝手なことしたくないよ。

おっさんはもう私と旅が出来なくなっても良いのか? 私は、私はもう一回したい! 何度だつて、何時までだつて……。おっさんは寂しくなったりしないのかよ!

「何を言うておる、旅に出会いと別れは付き物よ。それにワシはまた別の旅に出るだけじゃ、ここで旅を止めたりはせんよ。何よりも、お前さんの為になるなら、ワシは喜んで今の旅を諦めてやるわ。行つて来い。行つて、世界の平和も自分の帰り道も、もぎ取つて来い。お前さんと巨神なら、それが出来るさ」

おっさん、ごめん……。おっさん、ありがとう。私は気が付いたら堪えきれずに、何時かみたいにおっさんの胸で泣きじやくつていた。何度も謝つて、何度もお礼を言つて。そんな私の頭を、おっさんのごつい指が優しく撫でてくれる。

むう、嬉しいのに悔しい、複雑な気分だ。くそう、何だかいつも恥ずかしい思いをしている気がするな。トカゲの癖に生意気だよ、やっぱりさ。

「トカゲじゃない、ドラゴニュートだ。まったくこの小娘は、出会った頃からトンと変わ

らんのう。最後の最後まで、しょうの無い奴だな……」

結局その夜は、だいぶ遅くまで二人で話し込んでしまった。落ち着いた後に始めた、旅の思い出話に花が咲いてしまったばかりに。名残惜しむ様に、長く楽しく。

翌朝になつて、私は旅の空の下に居た。トカゲのおっさんや市長たちに見送られて、今はもう果ての無い荒野のど真ん中だ。

行先は既に、座標をスマホ経由で巨人に送つてある。後は私が眠りコケていても、私の巨人が目的地まで一直線に行つてくれるだろう。とても眠る気分には成らないけれど。

私の巨人は昨日と少しだけ姿が変わつていた。朝起きてみたら腰と肩の部分の荷台が撤去されて、代わりに手すりのついた金属製の足場が取り付けられていたのだ。市長さんとトカゲのおっさんからの餞別代りと言う事で、都市の人達が一晩でやつてくれたのだ。

真新しい足場に座つて、無数の線となつた風景を横目にぼんやりと何も考えずにいる。下手に何か考えてしまうと、静かすぎるせいで一人になつた事を余計に実感してしまいそうになるから。

すると、私の巨人がチラリと視線をこちらに向けて来た。ん、そうだったね、ごめん

ね。お前がいるから、私はまだ一人じゃない。だからよそ見はやめ様な。高速移動技のアクセラレーター併用でホバー走行している最中に、岩や村なんか足をつっかけたらとんでもない事になってしまう。

私は手すりに掴まって立ち上がると、地平の先に有るだろう目的の場所へと目を向ける。腹黒巨神の話が本当なら、この先に私が元の世界に帰還する為の道がある筈だ。ごたごたと悩むのは昨日までで良い。後は行くだけって奴だな。

景気つけとまではないかないが、私は景色を眺めながら口笛を吹き鳴らす。音を置き去りにするような加速の世界で、その音色は何処まで響くかは知らないが、少なくとも私の巨人はその音色を喜んでくれたようだ。心なしか更に移動速度が上がった様な気がする。

初めての二人旅。この道の先には、恐らく最大の障害が待ち受けて居るだろう。期待と不安は入り混じってあるが、私には私の巨人が付いていてくれる。大丈夫、絶対大丈夫さ。

ごまかしの口笛が、途切れる事無く荒野に流れ続けて行った。

次回、第三十話『責任とって!』に続く。

## 第三十話 『責任とつて！』

前回のあらずじ。

トカゲのおつさんと離別した。そして私は、巨人と共に旅に出る。元の世界に、帰り付く為に。

指定された座標に辿り着いた私は、思わず目の前の光景に呆気に取られていた。なんだこれは、と。

険しい山に囲まれ、それこそ航空機でも無ければまともに人がたどり着けない様な秘境。そこを巨人の力で踏破して、大慌てで辿り着いたその場所にはかつて大帝国と呼ばれた国の痕跡だけがあつた。今はもう、かろうじて残る建物の瓦礫の数々が、かつて世界で一番栄えたと言う国家の輪郭をおぼろげに伝えるのみ。大半はもう、風化して砂に埋もれつつある。

そんな砂と荒廃の廃墟の中で、ひときわ目立つ人型の残骸。そう残骸だ。

原形を殆ど留めないまでに痛めつけられ、装甲は砕けるだけでは無くひしゃげて溶けている。下半身など丸々なくて、左腕だけが無念そうに空を掴もうと伸ばされていた。

ずっと昔に、この巨神は役目を終えて眠りについているのだ。恐らくは、志半ばで力尽きて。

だからこそ思う。なんなんだこれは、と。

私は此処に、世界を破壊して文明をリセットさせる凶悪な巨神が居ると聞いてやって来た。だと言うのに、ここに居たのは最後に会った巨神ヘラよりも尚、無残な姿になった無力な巨神だけ。

まさかこの残骸が巨神ゼウス？ 全ての巨神を上回る、末弟にして序列最高位の巨神だと言うのだろうか。

これが私の旅路の果てだと言うのか。こんな物の為に、私は仲間を置き去りにしてまでやって来たと言うのか？ これで、私の旅は終わりだと？

『いえいえ、終わるのはこれからですよ』

不意に頭上から聞こえて来た聞き慣れた声に私が天を仰ぐと同時に、私の巨神が左手を天に掲げながら突然背後に向かって一足飛びに跳ね退いた。

左手の装甲を展開しながら浮かび上がった光の盾。触れた物の時間を停止させて攻撃を防ぐ防御技なのだが、今回はそれが数瞬だけ浮かび上がってすぐに打ち消されてしまった。

そして、盾を貫いて降り注いできたのは光の濁流。いつぞやに見た天から降る光の矢

など比ではない、盾自体を飲み込むほどの大きさのビームが大地に突き刺さり砂塵と爆風を巻き起こす。

思わず顔を背けて衝撃に耐えるが、私の巨人が守ってくれたので事なきを得る。でも、巨人が自分で飛び退いていてくれなかったら、今頃は光に飲み込まれていただろう。確実にこの子は成長している。私の巨人偉い！

『あー、やつぱり避けちゃうんですねえ。あの時と同じ、うふふふ、つまりこの先も同じになるんですよねえ……』

そして、また聞こえて来る聞き慣れた声。見上げてみればそこに居たのは、四つの人影——いや、あまりにもデカいそれは正に巨影だ。私の巨人に影を落とすその四つに、私は見覚えがあった。中空に浮ぶ四体のそれは、私の巨人に匹敵する巨大さを誇る巨神達。今までの旅路で出会って来た、各地に点在していたはずの最初の巨神の子供達に相違ない。

どうしてお前達がここに居るんだ、腹黒巨神とその姉弟達!!

『はあい、生で会うのはお久しぶりですね。あなたのお耳の不協和、女神ヘステイア一七歳です！　そして愉快的仲間達!!　ヘラちゃんがいなくて一人マイナスですけど、そこはまあしょうがないですよね。そのゼウスちゃんみたいに、バラバラにされちゃってましたしね!』

っ……、やつぱりさっきの残骸が最後の巨神だったのか!? 一体どう言う事だ、一体全体何だっけ言うんだ。お前がゼウスの話を私に聞かせたんだらう? お前がここに来れば帰れるって言ったんだらう?

今までの事は全部嘘だったのか!? どういう事なのか説明してくれよ!

「逆にお聴きしたいんですけど、どうして貴女は私の言葉が全て真実だなんて思っていたんですか? まあ、世間知らずの小娘が、いきなり常識からかけ離れた世界に放り出されればこうもなりますか。嘆かわしい事です、その方が都合が良いのも確かですね。本当に腹立たしい事なんですけどね!!」

なんなんだこいつ、いつも以上に話が支離滅裂だ。そんな事を言いつつ、四体の巨神達はゆっくりと空から砂の地面へと降りて来る。思ったよりも小さな音と共に着地して、私の巨人と正面から対峙した。

「どうかこいつ等、飛べたのか。私の巨人も何時か飛べるようになるのだろうか。いや、今はそんな事よりも——」

「今はそんな事よりも、私が何を企んでいるかが知りたい、ですよ? 解ってますよ、解ってます。自分の事のように分かっていますとも。企みなんていうほど高尚な物ではないんですけど、今明かされる衝撃の事実って奴は教えてあげましょうか。大丈夫、聞きたくなくなっても、この情報は絶対に知らないといけない大前提なのでお話します」



よ』

もったいぶった言い方が何時もならイライラするはずなのに、今の私はどういう訳か背筋に氷の柱でも入れられたような奇妙な怖気に襲われていた。なんだろう、この話を聞き続けると良くない事が起こる気がする。根拠はないが、本能的な所で心が警鐘を鳴らしていた。

そんな私の内心は置き去りにして、性悪巨神は淡々と言葉を続ける。

『まず大前提として、この世界は貴女にとつて異世界ではありません。この世界は、貴女の居た世界の六千年後の未来です。つまりい、貴女は異世界転移では無く、タイムスリップしてきたと言う事ですね』

………は？ タイムスリップ？ つて事は何か、この世界は私の世界の未来の姿だつて言うのか？ 人が真面目に話している時にそんな性質の悪い冗談なんて、これは流石に性格が悪いってレベルじゃないぞ……。

『あ、現実逃避とかは時間の無駄なのでスルーしますね。そして、貴女はこれからこの時代から三千年前の世界に行く事になります。大丈夫ですよ、戸惑っていてもこれから私達を送り込みますから。だから貴女は確実に三千年まで時を遡ります。これは絶対の決定事項です』

なんで、何でお前にそんな事が分かるんだよ！ そんな、これから起こる事を見て来

たみたいに! 他の巨神とは明らかに違う、お前一体何なんだ!?

問い掛けてみれば、そいつは表情も無いはずの巨神の顔で確かに笑う。私にはそう見えたのだ。そしてそのまま、私にとって致命的な言葉を囁いた。

『私は貴女です。三千年前に遙かな過去に送り込まれて、今日までこの醜い巨神の中に組み込まれて生き延びて来た、貴女です』

ばっ?! はっ?! はあっ?!

奴の言い放った言葉を耳にして、私は困惑し驚愕し激怒し、もう一度戸惑った。なんて馬鹿馬鹿しい言葉だろう。あれが未来の自分? タイムスリップしてもう一度戻って来た私の馴れの果てだと言うのか。そんな事を信じられると思っているのか!!

『あああ………つはああああくくく……、言つてやつた言つてやつた、ついに言つてやつた!! 三千年間ずっと待ち続けて、ずっとずっと言いたくてたまらなかつたこの瞬間に言つてやつたあああ!! あははははははははははははははは!! ひひひひひ! ひやああああつはつはつはあああつ!!』

それに対して、目の前の巨神は狂喜していた。まるで悪戯を成功させた子供の様に。まるで、気が触れた精神異常者の様に。

『解りますよ、貴女の戸惑い。解りますよ、貴女の怒り。だってそれは、遙かな過去に私が味わった物なんです。ええそれはもう、昨日のように思い出せます。ウヒヒヒ

ヒ、時粒子の影響で三千年経っても私は劣化も出来ないんですよ」  
それから、奴は嬉しそうに笑いながら自分の事を説明し始めた。

巨神ヘステイアは特殊な動力の実験機として作られ、過去に飛ばされた自分はその動力の為に生きたまま素材として使われた事。本来は意志など残らない筈だったのに、巨神の中で意識を確立して生き残った事。更には、それを利用して自分を改造してくれた連中を皆殺しにしてやった事。とつとつと語って、その度に実に嬉しそうに引き攣った笑い声を上げる。

こいつはもう、肉体は保護されていたとしても、精神が修復不可能なほどに粉々に砕け散っていた。

「忌々しい先代の操り人がゼウスちゃんを使って抵抗してきましたが、まあごらんの通り他の巨神を操って袋叩きにしてあげましたけどね。クロノスシステムの実験機であるハデスちゃんに、非搭載型のゼウスちゃんじゃ叶う訳ないじゃないですか。誤算だったのは、その時に時間跳躍が出来なかった事ですけれど。高性能機を謳ってたくせにまったく、期待外れもいいところですよねー」

かつて、遙かな古代に開発されていた六体の巨神達。最初の巨人から手に入った技術を使い、持てる限りの性能を発揮させた数々の製作品。その最後の六体目として作られていた巨神ゼウスは、広域の破壊力だけを追求された世界最強と名高い高性能機になる

はずだった。同じ巨神が相手でなければ、だが。

そんな事を語り終えて、興奮が収まったのか性悪巨神はホウツと口も無いのに溜息を吐く。本当に、何処までも人間臭い。

『さて、長々と余計な事まで話してしまいましたが、要するに私の目的は貴女を三千年前に送り込んで、代わりに私はまた別の時間に飛ぶと言う寸法です。その為の貴女の強化! そのための六体目になり損ねた巨神!』

私のクロノスは、ゼウスと共に作られたトライアルの為の試作品。戦場での広域殲滅を追求したゼウスと違い、私の巨人は装備の換装で今までの巨神の力を全て使う事の出来る汎用型の設計思想で作られたらしい。もちろん、時の権力者に受けが良かったのは分かりやすい破壊力だった。その為に、この子には名前も付けられず、地の果ての施設に死蔵されていたのだと言う。

『かつて、予言を真に受けて己が子を生まれる度に喰らったと言う神の王クロノスは、妻に騙されてゼウスと謀った石を飲まされてしまう。はて、その石とはもしかして、やがて主神となるゼウスに匹敵する力を秘めていたのではないだろうか。なーんて、その石の方がゼウスちゃんより生き延びているんだからお笑い草ですよねえ』

名もなき石。それが私の巨人だと、性悪巨神はつまらなそうに吐き捨てる。ふざけんなよ。私を騙して弄んだだけじゃなく、私の子供まで侮辱しやがって絶対に許さない。

「ふふっ、その気持ちもわかりますけどね。【私】ってほら、その子供を置き去りにしてでも元の世界に帰りがつちやつたじゃないですか。だから、嫌なくらいその気持ちに説得力がないのも分かつちやうんですよねえ。うぶぶぶっ！」

ああ、こいつはやっぱり、大嫌いだ。同族嫌悪なんて次元じゃない。同存在嫌悪だ。

そもそも、他の巨神はなんでこいつに従っているんだ。無口なハデスはよく分からないけど、デメテルやポセイドンが仲間を放り出してまでこんな所に来るなんておかしいだろう！

「無駄の極みですよ。上位機体権限で今全ての巨神は自意識を封じられて、私の言いなりのお人形さんです。残念ながら、貴女の巨人は選考漏れした機体なので操れないんですけどね。私ってほら、特別な動力を使ってるから他の機体よりも優先度が高いんですよ。その戦闘能力は低いんですけどね？ 指揮官兼任の補給機体なんです。だから、説得なんてしても無駄無駄です」

何から何まで、本当にあいつに都合が良い状況になっている。そして、この状況は私が奴に踊らされたから起きている事だ。だったら、私と私の巨人で全部まとめて叩き潰してやるよ！ 過去も未来も丸ごと含めて責任とって！

「うん、まあ。私がおここに居る時点で、結果は解り切っているんですけどね。どうぞご健闘くださいませ」

そしてそこから始まったのは、戦闘とはとても呼べない様な一方的な蹂躪だった。

全身の火器をぶっ放しながら接近戦を挑んで来るポセイドン。こちらの展開した二体の支援ユニットを、倍の数の支援ユニットで叩き潰すデメテル。他の巨神の被害を気にもせずにビームを撃ちまくって来るハデス。そして、時間を喰らう右手の必殺技を使って敵を止めても、すぐさまエネルギーを補給させて無限に復活させてしまうヘステイア。

ヘラがもし無傷だったら、無尽蔵に雑魚が沸き出してさらに酷い事になっていたのだろう。現状も既に最悪の一言だろう。

最初から勝ち目なんて無いんだ。だって、かつてここで負けて過去に飛ばされた私が目の前に居るのだから。決まりきった時間の流れ。運命とでもいうのだろうか。予定調和。

だからって、諦めきれるものか! ヤケクソ気味に叫んで、システムクロノスを発動させる。私の巨人の全身の装甲が展開し、周囲の時間は全て私達だけの物になった。

『はい、それも対策済み。言いましたよね、ハデスちゃんはクロノスシステムの実験機だって』

止まった時間の中で、こちらに向けて右腕の長い砲塔を差し向けるハデス。そして、その背後に立って、ハデスの体に触れているヘステイアもまた止まった時間の中に潜り

込んで来ていた。

そして、ハデスの右手の砲身が過剰なまでの光を集め、私の巨人に向けて一気に解き放つ。最初に空から撃ち放たれた極太のビームだ。あれはあの二体が協力してぶつ放す技だったのか。

勝負に逸った私のせいで一直線に加速していた私の巨人は回避も出来ず、その光の濁流を左手の盾で真正面から受け止めた。盾は一瞬で撃ち抜かれ、光の濁流は私の巨人の半身を軽々と飲み込む。それで巨人の左手と左足は吹き飛ばされて、バランスを失った体は砂の地面に叩きつけられごろごろと横転して行く。半壊どころか、もう立ち上がる事すらできない。

私とは言えば、巨人に咄嗟に庇われて怪我一つない。でも、システムクロノスの反動で、私の体は更に縮んでもう制服がブカブカになってずり落ちる。惨めさと悔しきで、私の両目からは落涙が止まらなかった。

『うふっ、うふふっ、長かった。本当に長かったけど、これでやっとな……』

感慨の声と共に、再びハデスの銃口に光が集まって行く。手すりにしがみついて何とか立ち上がっても、私にはもうその光を見つめる事しか出来ない。手を伸ばして、今だに私を守ろうとするクロノスの頬に触れるのが精一杯だ。

情けないお母さんでごめん……。お前はこんなに良い子なのに、何もしてあげられ

なくてごめん。

光の濁流が私とクロノスを飲み込んだ。

そして、私は元の世界に帰る事が出来た。

色々和無くした物はあつたけれど、日常生活に慣れる作業はおおむね順調である。両親と言う物を久しぶりに体感したが、あの程度のうつとおしきは許容範囲だ。

流石はゼウスちゃんの子の双子の兄弟機、溜め込んで置ける時粒子の量が桁違いで六千年の時間跳躍も成功させることが出来た。昔の私には感謝しなければならぬ。先代の操り人はまったくの期待外れで、三千年も待たされることになったのだから。

時間跳躍と言うのは実にシンプルだ。過去に飛ぼうが未来に飛ぼうが、一個人に出来る事などが知れている。歴史を改変しようとしても、大勢は修正力を伴ってある筈の結果を再現する。つまりは、足掻いても無駄と言う事なのだ。

だからこそ私は、歴史の決定事項通りに行動しなければならぬだろう。

幸いにして、私の頭には過去の経験で培った時粒子関連の知識が残っている。現代技術を使っても、その再現をするのは難しくは無かった。勉学に励むふりをして研究職に進み、ロボット工学で権威を獲得して自身の持つ知識を存分に活かす。要するにこれは



知識チートと言う奴だろう。ずるして地位を手に入れちゃうなんて、私ってばだーいぶ悪い子ですなぁ！

権力さえ手に入れてしまえば後は簡単だ。次世代に誇れる新エネルギーだの、世界初の最先端技術だの、聞こえの良い言葉を並べ立てれば金も舞台も向こうからやって来る。それらを総動員して最初の一機目を作り上げるのには、それ程時を必要とはしなかった。三千年に比べたら屁みたいなもんですよなぁ！ まあ技術が拙すぎて三十年ぐらいかかっちゃいましたけど！

一度壊れた物は、どんなに取り繕おうと壊れたまま。それでも私は、人類史初の大型ロボットの完成にまでこぎつけ、完全無公害の新エネルギーなどと謳って時粒子コンバーターの試作品まで作り上げて見せた。

これでもう、この後どうなるかが私の知った事ではない。世界が滅ぼうが、文明が終わろうが関係は無い。

だって、こうしないとトカゲさん達が未来で生まれないじゃないですか！ 歴史が滞りなく循環しないじゃないですか！ だから私頑張ったんですよ、一生懸命頑張ったんですよ！

そして私は、完成した機体にクロノスと名付けた。最初の巨神の誕生の瞬間であり、同時に名実ともに――

私、巨人の母になりました!

おわり